

京都府遺跡調査報告集

第200冊

1. 樋ノ口窯跡群第2次
2. 宇治市街遺跡(川西地区)

2026

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する福知山市樋ノ口窯跡群の発掘調査は、砂防(防災安全)事業に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施し、宇治市街遺跡第35・36次・40次調査は、新庁舎建設工事に伴い、京都府警察本部の依頼を受けて実施したものです。このたび、発掘調査ならびに整理等作業が完了しましたので、『京都府遺跡調査報告集』第200冊として刊行する運びとなりました。

近畿北部有数の横穴式石室墳として知られる牧正一古墳に近在する樋ノ口窯跡群では、古墳時代後期の融着した須恵器が出土するとともに、青磁碗や縹銭の出土によって、中世にも土地利用がなされことが判明しました。

宇治市街遺跡では、3次にわたる発掘調査で古代から中世の建物群や大規模な区画溝を検出し、後者は方形居館を画する遺構の可能性のあるものとして注目されます。『源氏物語』ゆかりの地と知られる宇治地域の、平安時代中期以降の歴史を復元するうえで貴重な成果が得られました。

以上の調査成果は、今後、それぞれの遺跡が立地する地域の歴史や日本史研究を進めるうえで重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府中丹西土木事務所ならびに京都府警察本部をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和8年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 原 眞 人

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

(1) 樋ノ口窯跡群第2次発掘調査報告

(2) 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
樋ノ口窯跡群 第2次	福知山市牧	令和7年7月24日～ 令和7年10月15日	京都府中丹西 土木事務所	名村威彦
宇治市街遺跡	宇治市宇治字文字	令和3年12月16日～ 令和4年2月28日 令和4年4月25日～ 令和4年8月24日 令和7年7月24日～ 令和7年11月27日	京都府警察本部	加藤雅士 村田和弘 森島康雄

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

1. 樋ノ口窯跡群第2次発掘調査報告	
1. はじめに-----	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境-----	2
2) 歴史的環境-----	3
3. 調査の経緯と方法	
1) 調査の経緯-----	5
2) 遺構略号について-----	5
3) 出土遺物について-----	5
4. 小規模調査	
1) 調査の概要-----	5
2) 小結-----	7
5. A地区の調査	
1) 調査の概要と基本層序-----	7
2) 検出遺構-----	10
3) 出土遺物-----	10
6. B地区の調査	
1) 調査の概要と層序-----	15
2) 出土遺物-----	15
7. まとめ-----	16
2. 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告	
1. はじめに-----	19
2. 位置と環境	
1) 地理的環境-----	20
2) 周辺遺跡-----	22
3. 調査の経過-----	23
4. 1～4区調査の概要(1期調査)	
1) 基本層序-----	26
2) 検出遺構-----	26
3) 小結-----	37
5. 5区調査の概要(2期調査)	

1)基本層序-----	39
2)検出遺構-----	49
3)小結-----	49
6. 出土遺物	
1) 1～4区出土遺物-----	49
2) 5区出土遺物-----	58
7. まとめ-----	62

挿 図 目 次

1. 樋ノ口窯跡群第2次発掘調査報告

第1図 福知山市の位置-----	1
第2図 調査地周辺の地質図-----	2
第3図 周辺遺跡分布図-----	3
第4図 樋ノ口窯跡群第2次調査区配置図-----	6
第5図 小規模調査区平・断面図-----	8
第6図 A地区平・断面図-----	9
第7図 A地区断ち割り断面図-----	10
第8図 焼土坑平・断面図-----	11
第9図 A地区出土遺物 1-----	12
第10図 A地区出土遺物 2-----	13
第11図 B地区平・断面図-----	14
第12図 B地区出土遺物-----	15

2. 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告

第1図 宇治市の位置-----	19
第2図 周辺地質分布図-----	21
第3図 周辺遺跡分布図-----	22
第4図 年度別調査区配置図-----	23
第5図 1～5区平面図-----	24
第6図 1～4区全体平面図-----	25
第7図 1～4区平面図1-----	27
第8図 1～4区平面図2-----	28
第9図 1～4区平面図3-----	29

第10図	南西壁土層断面図	30
第11図	南東壁土層断面図	31
第12図	掘立柱建物1実測図	32
第13図	掘立柱建物2実測図	33
第14図	掘立柱建物3・4実測図	34
第15図	掘立柱建物5実測図	35
第16図	東西SD303平面図・断面図	36
第17図	区画溝SD150(SD420)平面図	37
第18図	区画溝SD150断面図	38
第19図	区画溝SD420断面図	39
第20図	1～4区ピット断面図1	40
第21図	1～4区ピット断面図2	41
第22図	1～4区ピット断面図3	42
第23図	5区平面図	43
第24図	旧別館部分 東壁・南壁土層断面図	44
第25図	本館部分 北壁・北壁土層断面図	45・46
第26図	断ち割り土層断面図	46
第27図	区画溝SD150、重機断ち割り1合成断面図	47
第28図	井戸SE501土層断面図	48
第29図	溝SD502土層断面図	49
第30図	1～4区出土遺物1	51
第31図	1～4区出土遺物2	53
第32図	1～4区出土遺物3	54
第33図	1～4区出土遺物4	56
第34図	1～4区出土遺物5	57
第35図	5区出土遺物1	59
第36図	5区出土遺物2	60
第37図	5区出土遺物3	61

付表目次

1. 樋ノ口竈跡群第2次発掘調査報告

付表1	出土土器観察表	17
付表2	銭貨観察表	18

2. 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告

付表1 1～4区出土土器観察表-----64

付表2 5区出土土器観察表-----73

図版目次

1. 樋ノ口窯跡群第2次発掘調査報告

図版第1 (1)調査地上空から福知山盆地を望む(北西から)

(2)1～3トレンチ調査前全景(北から)

(3)4～6トレンチ調査前全景(南から)

図版第2 (1)1トレンチ全景(西から)

(2)2トレンチ全景(東から)

(3)3トレンチ全景(西から)

図版第3 (1)4トレンチ全景(南西から)

(2)5トレンチ全景(南東から)

(3)6トレンチ全景(西から)

図版第4 (1)A地区調査前全景(北西から)

(2)A地区調査後全景(北西から)

(3)A地区調査後全景2(右が北西)

図版第5 (1)A地区北東壁(西から)

(2)A地区北西壁(南から)

(3)A地区断ち割り(東から)

図版第6 (1)焼土坑S L01出土状況(南東から)

(2)焼土坑S L01断面(南東から)

(3)焼土坑S L01完掘(南東から)

図版第7 (1)焼土坑S L02出土状況(南東から)

(2)焼土坑S L02出土状況(南西から)

(3)焼土坑S L02出土状況(南東から)

図版第8 (1)B地区調査後全景(北西から)

(2)B地区北東壁(南西から)

(3)重機断ち割り地点断面(南東から)

図版第9 (1)出土遺物1 包含層出土土器1・銭貨

(2)出土遺物2 包含層出土土器2

- 図版第10 (1)出土遺物 3 包含層出土土器 3
(2)出土遺物 4 包含層出土土器 4
- 図版第11 (1)出土遺物 5 包含層出土土器 5
(2)出土遺物 6 包含層出土土器 6
- 図版第12 (1)出土遺物 7 包含層出土土器 7
(2)出土遺物 8 包含層出土陶磁器・土製品
- 図版第13 (1)出土遺物 9 焼土坑 S L 01出土土器
(2)出土遺物 10 B地区包含層出土土器

2. 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告

- 図版第 1 1区柱穴群完掘状況(東から)
- 図版第 2 (1) 1・2区調査前状況(南から)
(2) 1区南東部の柱穴群検出状況(南東から)
(3) 1区区画溝 S D 150検出状況(北西から)
- 図版第 3 (1) 1区柱穴群完掘状況(南東から)
(2) 1区柱穴群完掘状況(北西から)
- 図版第 4 (1) 1区掘立柱建物 1(北西から)
(2) 1区掘立柱建物 2(南西から)
(3) 1区掘立柱建物 3・4(北から)
- 図版第 5 (1) S P 099土層断面(東から)
(2) S P 070土層断面(北から)
(3) S P 072土層断面(北東から)
(4) S P 032土層断面(東から)
(5) S P 045土層断面(東から)
(6) S P 024・025土層断面(東から)
(7) S P 026土層断面(東から)
(8) S P 005土層断面(北東から)
- 図版第 6 (1) 区画溝 S D 150掘削状況(北東から)
(2) 区画溝 S D 150掘削状況(南西から)
- 図版第 7 (1) 東西部南壁土層断面(北西から)
(2) 区画溝 S D 150土層断面(北西から)
(3) 1区南西壁土層断面(南西から)
- 図版第 8 (1) 2区完掘状況(北東から)
(2) 東西部第 2 面全景(西から)

- 図版第9 (1) 3区完掘状況(南から)
(2) 3区完掘状況(西から)
- 図版第10 (1) 3区東西溝SD303東半部(南から)
(2) 3区東西溝SD303断ち割り断面1(西から)
(3) 3区東西溝SD303土層断面2(東から)
- 図版第11 (1) 4区ピット完掘状況(東から)
(2) 4区区画溝SD420掘削状況(北西から)
- 図版第12 (1) 4区区画溝SD420掘削状況(西から)
(2) 4区区画溝SD420土層断面(北西から)
(3) 4区区画溝SD420完掘状況(北西から)
- 図版第13 5区 調査区全景 (上が北)
- 図版第14 (1) 5区 旧別館部分土層断面(A-A') (北西から)
(2) 5区 旧別館部分土層断面(B-B'南側) (南西から)
(3) 5区 旧別館部分土層断面(B-B'中央) (南西から)
- 図版第15 (1) 5区 旧別館部分土層断面(B-B'東側) (南西から)
(2) 5区 旧本館部分土層断面(D-D'東側) (南から)
(3) 5区 旧本館部分土層断面(D-D'中央) (南東から)
- 図版第16 (1) 5区 断ち割り1(E-E') (南西から)
(2) 5区 断ち割り2(F-F') (南西から)
(3) 5区 旧本館部分土層断面(D-D'東側) (南東から)
- 図版第17 (1) 5区 旧別館部分 遠景(北西から)
(2) 5区 旧本館部分 遠景(北東から)
(3) 5区 旧本館部分 遠景(南西から)
- 図版第18 (1) 5区 井戸SE01 半裁状況(南西から)
(2) 5区 井戸SE01 重機断ち割り状況(南西から)
(3) 5区 溝SD02 埋土堆積状況(北東から)
- 図版第19 (1) 5区 重機による断ち割り1 (西から)
(2) 5区 断面観察(南西から)
(3) 5区 重機による断ち割り2 (北東から)
- 図版第20 (1) 1～4区出土遺物1
(2) 1～4区出土遺物2
- 図版第21 (1) 1～4区出土遺物3
(2) 1～4区出土遺物4
- 図版第22 (1) 1～4区出土遺物5
(2) 1～4区出土遺物6

- 図版第23 (1) 1～4区出土遺物 7
(2) 1～4区出土遺物 8
- 図版第24 (1) 1～4区出土遺物 9
(2) 1～4区出土遺物10
- 図版第25 (1) 1～4区出土遺物11
(2) 1～4区出土遺物12
- 図版第26 (1) 5区出土遺物 1
(2) 5区出土遺物 2
- 図版第27 (1) 5区出土遺物 3
(2) 5区出土遺物 4
- 図版第28 (1) 5区出土遺物 5
(2) 5区出土遺物 6

1. 樋ノ口窯跡群第2次発掘調査報告

1. はじめに

樋ノ口川は、福知山市域の中央に広がる福知山盆地の北西の山間部を流れる由良川水系の支流の一つである。樋ノ口川流域の周辺は、国道9号と国道175号が合流する交通の要所であり、地域医療施設や人家が存在する。流域内には土石流対策施設が整備されておらず、土砂災害から地域の安全を確保するために、樋ノ口川通常砂防(防災・安全)事業として砂防堰堤の整備が計画された。

今回、砂防堰堤建設予定地内で工事中に新たに発見された遺跡について、京都府中丹西土木事務所と京都府教育委員会でその取り扱いについて協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けた。

現地調査にあたっては、牧自治会にご高配を賜った。また、京都府教育委員会、福知山市教育委員会に指導・助言をいただいた。

〔調査体制等〕

〈現地調査〉

調査責任者	調査課長	高野陽子
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第2係主任	名村威彦

調査場所 福知山市牧

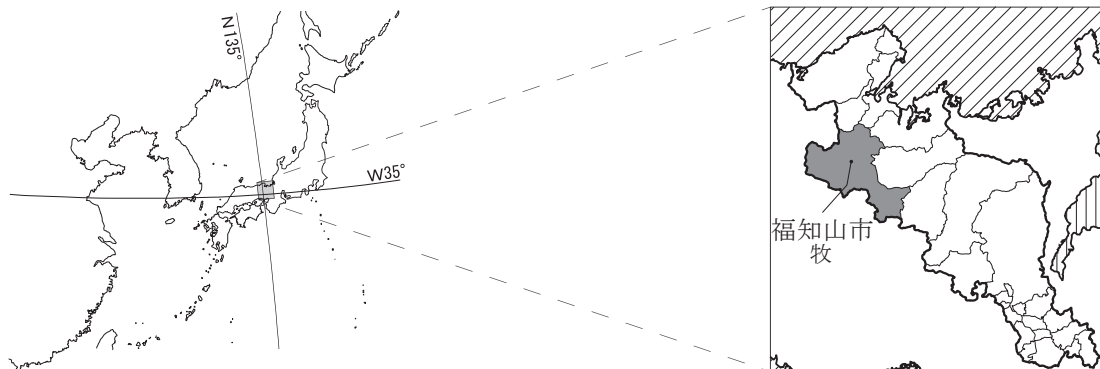
現地調査期間 令和7年7月24日～令和7年10月15日

調査面積 320㎡

〈整理作業〉

責任者、担当者は現地調査と同じ

整理作業期間 令和7年12月1日～令和8年3月31日



第1図 福知山市の位置

2. 位置と環境^(注1)

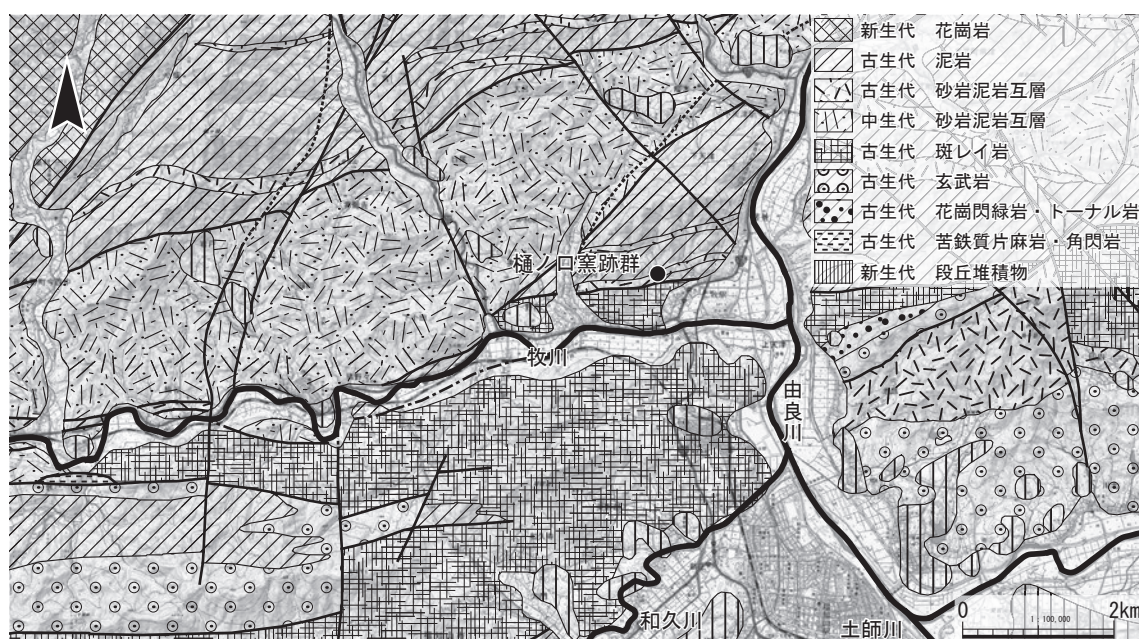
1) 地理的環境

福知山市は、京都府の北部に位置する内陸の都市で、市域は264.43km²の広さをもつ。北は宮津市・与謝郡与謝野町・兵庫県豊岡市、西は兵庫県朝来市、東は綾部市、南は船井郡京丹波町・兵庫県丹波市・兵庫県丹波篠山市と隣接する。市域のほぼ中央から綾部市にかけて福知山盆地が広がっており、樋ノ口窯跡群が所在する福知山市牧は福知山盆地の北西に位置する。

盆地周辺には北側には大江山連峰、西側には京都府唯一の火山である宝山、南側には多紀連山などの山岳地帯が広がる。盆地の北側には、砂岩・泥岩を中心とする堆積岩類からなる山岳と、斑レイ岩を中心とする火成岩類からなる山岳が存在し、南側にはチャートを含む堆積岩類からなる山岳が存在しており、福知山盆地は地質の境界地点にあたる。

福知山盆地を流れる由良川は全長約143kmで、丹波山地から日本海へと北流する京都府下最大の河川である。源流部での標高が約500mであるのに対し、福知山市域では標高10m程度となるため、福知山盆地では流れが緩やかになり、氾濫が ocorrência やすい地形となっている。福知山盆地では西からは牧川、南東からは和久川、南からは土師川が由良川に合流しており、これらの支流によって形成された沖積平野では河岸段丘が発達している。

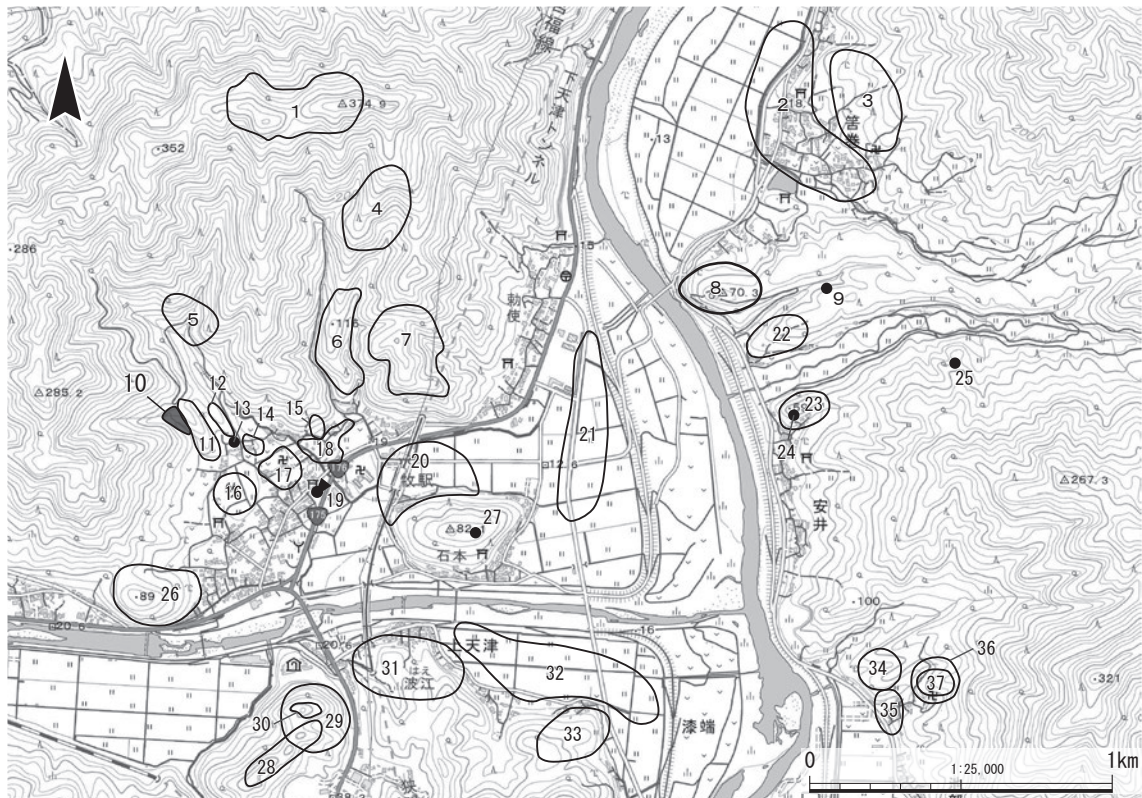
樋ノ口窯跡群が位置する福知山市牧地区は、牧川と由良川の合流地点に位置する。調査地は古生代の泥岩や砂岩泥岩互層、斑レイ岩が複雑に入り組む地点にあたる。牧川の上流に広がる夜久野高原をこえて兵庫県朝来市にいたる経路は、現在でも国道9号が通るなど主要経路となっており、牧地区は福知山市域側の出入り口にあたる交通の要衝である。また、福知山市の南東側に隣接する兵庫県丹波市氷上町には、日本海側にそそぐ由良川水系と瀬戸内海側にそそぐ加古川水系をわける、本州で最も標高の低い分水界があり、瀬戸内地域と日本海地域の結節点に隣接する地域としても重要な地点である。



第2図 調査地周辺の地質図(S=1/100,000)

2) 歴史的環境

稚児野遺跡では約3万年前の始良丹沢火山灰を含む層より下位から、定形石器や剥片類が出土した。縄文時代の遺跡としては、武者ヶ谷遺跡で縄文時代草創期と考えられる刺突文小型丸底土器が出土したほか、上野平遺跡や半田遺跡では縄文時代後期の土器片が出土しており、由良川流域の河岸段丘面や自然堤防上での活動が推定される。弥生時代には興・観音寺遺跡、宮遺跡、ケシケ谷遺跡などで中期の遺跡が確認される。興・観音寺遺跡では弥生時代中期後半の環濠とみられる溝や竪穴建物が確認されており、中核的な集落と考えられる。古墳時代には前期初頭に寺ノ段2号墳が築造される。一辺15mの方墳で、方格規矩鏡片や内行花文鏡片が出土した。古墳時代前期については、景初四年銘をもつ盤龍鏡が出土した広峯15号墳が著名である。埴輪や葺石、段築などの外表施設はもたない全長40mの前方後円墳である。古墳時代中期には妙見1号墳が築造される。一辺約43m、高さ約5.5mの二段築成の方墳で、葺石と埴輪を備える。円筒埴輪のほか甲冑形埴輪と推定される破片が出土している。石本遺跡では古墳時代後期の竪穴建物が16棟検出されており、これらの建物を取り囲むように大溝が確認された。大溝から祭祀用具と思われる木製品も多数出土しており、当該時期の中心的集落と考えられる。樋ノ口窯跡群の周辺に広がる古墳群としては平石古墳群、岩田古墳群、弁財古墳群、道勘山古墳群、樋ノ口古墳群などが挙げられる。このうち弁財1号墳は直径約25m、高さ6mの円墳で、南に開口する無袖か片袖式の横穴



- 1: 堂屋敷城跡 2: 高野平遺跡 3: 狐塔古墳群 4: 湯里北城跡 5: 平石古墳群 6: 湯里城跡 7: 湯里東城跡
 8: 菅巻城跡 9: 稲葉古墳 10: 樋ノ口窯跡群 11: 樋ノ口古墳群 12: 道勘山古墳群 13: 八幡古墳 14: 弁財古墳群
 15: 岩田古墳群 16: 牧氏居館跡 17: 寺浦遺跡 18: 薬師遺跡 19: 牧正一古墳 20: 石本遺跡 21: 石本東遺跡
 22: 安井北古墳群 23: 安井城跡 24: 安井古墳 25: 赤土田古墳 26: 牧城跡 27: 沢浪古墳 28: 狭間西古墳群 29: 狭間城跡
 30: 狭間城下層墳墓群 31: 波江古墳群 32: 波江遺跡 33: 波江東古墳群 34: 池部城跡 35: 池部観音寺遺跡
 36: 池部観音寺城跡 37: 池部観音寺古墳群

第3図 周辺遺跡分布図

式石室をもつ。金銅製の馬具、八鈴鏡などが出土しており、当地域の有力墓と目される。道勘山1号墳は大正8年に発掘されたと伝わるが詳細は不明である。岩田古墳群は詳しい調査が行われていないが、両袖式の横穴式石室が確認されている。牧正一古墳は昭和10年に石室が発見され、京都大学によって調査が行われた。このとき、馬具や須恵器子持ち台付壺が出土している。その後の調査で3基の横穴式石室を内包することが明らかとなり、全長34～37m程度の前方後円墳と推定されている。後円部にある両袖式の横穴式石室は、全長約12mで玄室幅約3m、玄室長約5m、玄室高約2.5mの規模をもつ京都府北部では最大級の横穴式石室である。古代には福知山市域は丹波国天田郡に相当する。古代寺院である和久寺廃寺の寺域はおよそ100m四方にわたり、塔跡、金堂跡、僧坊跡のほか工房跡や井戸が検出された。多保市廃寺では巨大な礎石が残されている。詳しい調査は行われていないが、周辺から出土した瓦から平安時代から鎌倉時代にかけての寺院と考えられている。夜久野末窯跡群では、飛鳥時代から平安時代にかけての窯跡群が130基以上確認されている。北近畿でも最大級の窯跡群で、8世紀代に最盛期を迎えたと考えられている。中世の遺跡としては城館跡が見ついている。大内城跡は、多数の掘立柱建物や中国製陶磁器が見つかり、平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての居館があったことが明らかとなった。平安時代末期に、この地域に六人部荘があったことが『吾妻鏡』に記されており、居館は莊園を管理する荘官の館であった可能性が考えられている。樋ノ口窯跡群の周辺では寺浦遺跡で13世紀代の掘立柱建物が5棟検出されており、中世の集落の一端が明らかとなっている^(注2)。また、詳細な時期は不詳であるが、周辺には城館跡が確認されている。堂屋敷城跡は、城域は南北約35m、東西約95mで、山頂に続く東西尾根上に堀切を設けて城域を画す。湯里北城跡では比較的広い曲輪が3地点と、小規模な曲輪が複数あるほか、土壇や土塁が確認されている。湯里城跡は南北約110m、東西約160mの城域で、中心となる曲輪の周囲に土塁があり、東側には帯曲輪が確認されている。湯里東城跡は、谷を挟んで湯里城跡の東側に位置する。南北約110m、東西約160mの城域があり、曲輪の周辺には明確な切岸が確認されていないが畝状堅堀は設けられている。牧氏居館跡は、牧集落の氏神、一宮神社の北側に位置する。幅約5m、長さ約50mほどの横堀と思われる遺構が窪地として認められる。牧城跡は、牧川北側の独立丘である愛宕山にあり、大手口は牧の集落に東面する。東西約95mの横堀をもつ山城であり、ほかに曲輪、土塁、堀切が確認されている。『塩見系図』には牧伊織介利明が城主と伝わる。狭間城跡は、牧川右岸の丘陵上にあり、牧集落とは牧川を挟んだ対岸に位置する。平成9年の福知山市教育委員会によって発掘調査が行われ、丘陵の頂部の曲輪と東側の尾根に階段状に続く曲輪が6段確認されている。

なお、文献史料では、寛政年間(1789～1801)に成立した『丹波志』に鎌倉時代における「牧六人衆」の記載がみられる。牧周辺は鎌倉時代初期までは大野村あるいは小野村とよばれていたが、駿河国から牧氏が来住してから牧村と改めたと伝えられている。牧に鎮座する一宮神社は、牧氏の故地である駿河の一宮に由来し、浅間大社を勧請したとされており、牧氏が支配する以前の領主であった河口氏の氏神であった吉備神社を現在地に移し、その跡に創建した。また、河口氏の館跡に菩提寺として永明寺を建立したとされる。

3. 調査の経緯と方法

1) 調査の経緯

樋ノ口窯跡群は、樋ノ口川通常砂防(防災・安全)事業に伴う発掘調査として、令和6年8月30日から令和6年9月6日まで京都府教育委員会による第1次調査が行われた。第1次調査では6世紀末から7世紀にかけての2基の須恵器窯跡が確認された。第1次調査の成果を受けて、事業地内の谷底付近に窯跡に関連する遺構が広がる可能性があったため、2基の窯跡の周辺を中心に2か所の面的な調査区(A・B地区)を設定し、調査を実施した。調査の結果、A地区で遺物包含層が確認されたことから、貯水池として利用されていた谷奥側の遺構面の有無を確認するために、地表下約2.0mまで重機で小規模な断ち割りを行った。断ち割りでは、湧水が激しく、河川堆積による砂礫の層の下に1m以上の湿地の粘土堆積が確認された(写真図版第8(3))。遺物が出土せず、安定地盤も確認できなかったため遺構面は存在しないと判断した。

また、谷部斜面に須恵器窯跡が存在する可能性があったことから、遺構の有無を確認するために6か所の小規模調査区(1～6トレンチ)を設定し、調査を実施した。

調査期間は令和7年7月24日から令和7年10月15日までで、調査面積は320㎡である。

2) 遺構略号について

調査で検出した遺構は、地区ごとに1から遺構番号を付した。それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使用した略号は以下の通りである。

NR：自然流路、SL：焼土坑

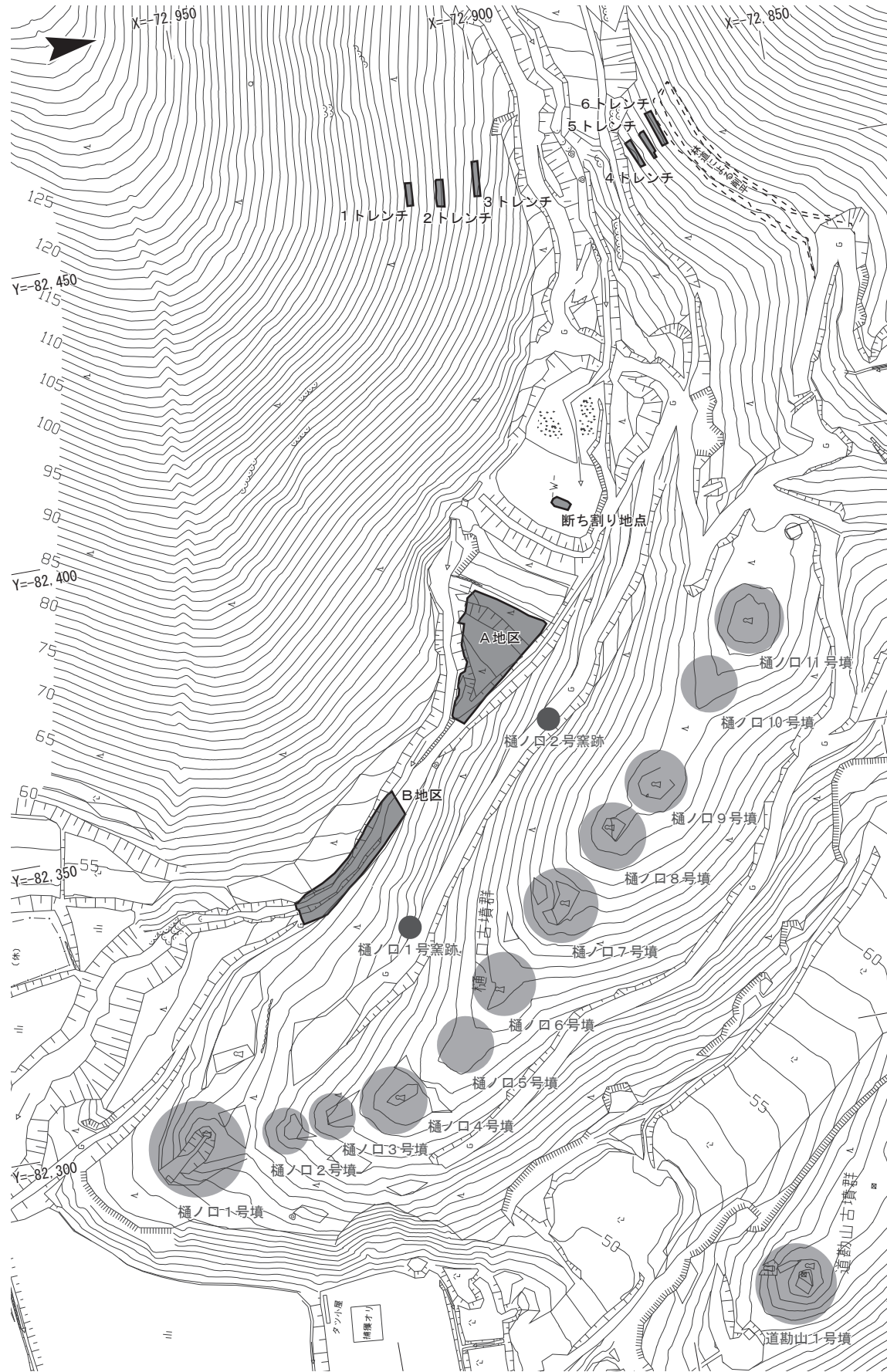
3) 出土遺物について

本報告では、古墳時代の須恵器については『須恵器大成』(田辺昭三1981 角川書店)を、平安時代の土器については「土師器再考」(平尾政幸2019『洛史 研究紀要』第12号 京都市埋蔵文化財研究所)を、中世の土器については「中世土器の編年」(伊野近富1995・1996『京都府埋蔵文化財情報』第57・59・60号 京都府埋蔵文化財調査研究センター)を、中世の輸入陶磁器については「中世前期の貿易陶磁器」(山本信夫2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社)を、近世陶磁器については『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会事務局編2000九州近世陶磁学会)を参照した。なお、土器の地域的特色等により、上記の文献を参照することが適切ではない場合もある。本報告の記載内容について解釈や事実の誤認があった場合、その責はすべて筆者にある。

4. 小規模調査

1) 調査の概要

調査区は樋ノ口川の南側丘陵斜面に1～3トレンチを、北側丘陵斜面に4～6トレンチを設定した(第5図)。1～3トレンチは谷部にある林道からの比高4～15mの範囲に、4～6トレンチは比高4～10mの範囲に等高線と並行する調査区を設定した。いずれの丘陵斜面も調査前の傾斜



第4図 樋ノ口窯跡群第2次調査区配置図(S=1/1,000)

角は約40°の急斜面であったため、作業の安全を確保するために仮設足場および仮設階段を設置して調査を実施した。調査はまず、人力で表土を掘削し、その後遺構の検出を行った。

1 トレンチ 幅約1.0m、長さ約4.0mの方形の調査区である。表土下0.4mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

2 トレンチ 幅約1.0m、長さ約6.0mの方形の調査区である。表土下0.3mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

3 トレンチ 幅約1.0m、長さ約6.0mの方形の調査区である。表土下0.3mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

4 トレンチ 幅約1.0m、長さ約4.8mの方形の調査区である。表土下0.2mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

5 トレンチ 幅約1.0m、長さ約4.8mの調査区で、仮設足場の支柱を避け、「L」字形に設定した。表土下0.6mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

6 トレンチ 幅約1.0m、長さ約6.5mの方形の調査区である。表土下0.2mで地山を確認し、遺構検出を行ったが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

2) 小結

調査の結果、1～6 トレンチではいずれも顕著な遺構、遺物は確認できず、須恵器の窯跡は谷奥部には構築されていないことが確認できた。

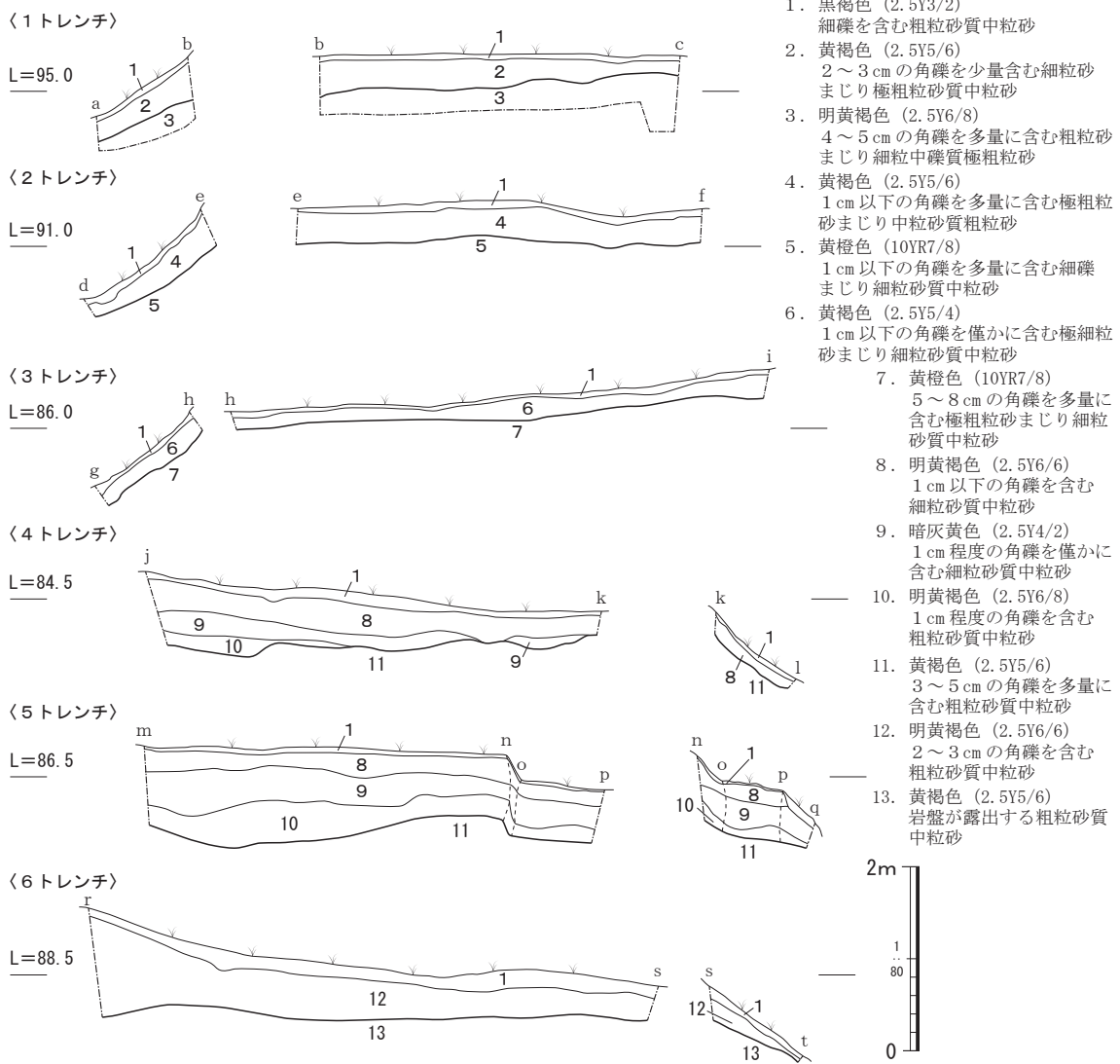
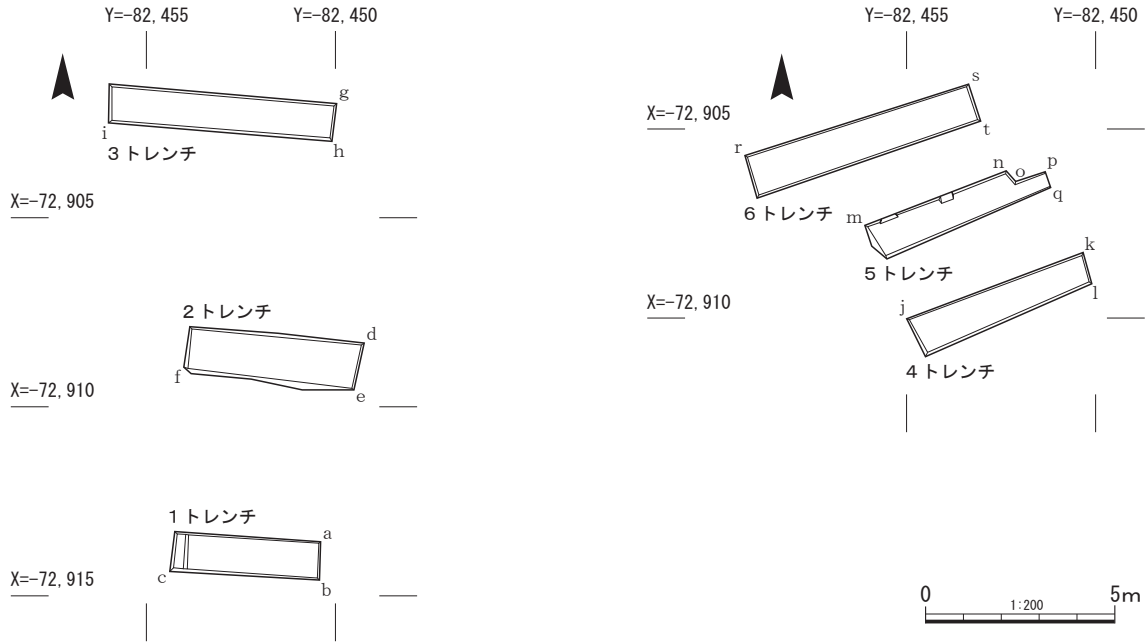
5 . A 地区 の 調 査

1) 調査の概要と基本層序

A地区は幅約2.6～13.5m、長さ約21.6mの台形の調査区である。第1次調査で確認された樋ノ口2号窯跡が位置する斜面の下位に設定した。調査ではまず、重機で工事に伴う攪乱土および表土を掘削し、その後人力によって遺構検出を行った。

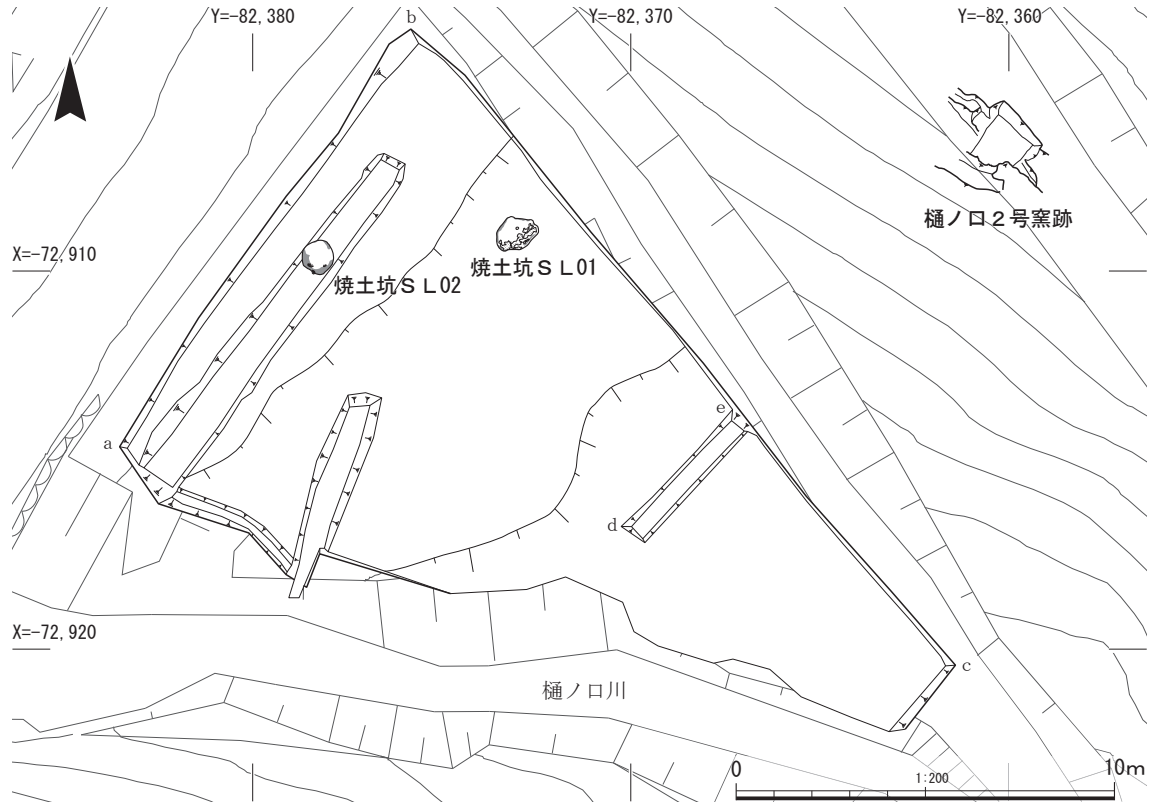
A地区北西側は、調査前の地形では緩傾斜の平坦面が広がっていた。工事に伴う攪乱土および無遺物層を除去し、安定面が確認されたところで遺構検出を行い、焼土坑を2基検出した。焼土坑の調査を終えた後に、断ち割りを行ったところ、焼土坑検出面より下位に3層の遺物包含層が堆積していたが、いずれも谷部にむかって流入した土砂に二次的に包含されたもので、下層遺構は確認できなかった。

A地区北西壁の層序(第6図)は、地表下1.2m以下で巨礫を含む地山層として11層を確認しており、現在の樋ノ口川が流れる南東側の谷部に向けて低く傾斜している。11層の上層には礫をほとんど含まない安定的な自然堆積層として10層を確認した。10層の上層に堆積する7～9層は遺物包含層で、7層は堆積状況から盛土と考えられる。9層は黒色土器、須恵器、土師器を含む古墳時代から平安時代にかけての、8層は熙寧元宝の緡銭や青磁碗の破片を含む中世以降の、7層は近世の国産陶磁器を含む。これらの遺物包含層の上面は標高65.8mで平坦になっており、この

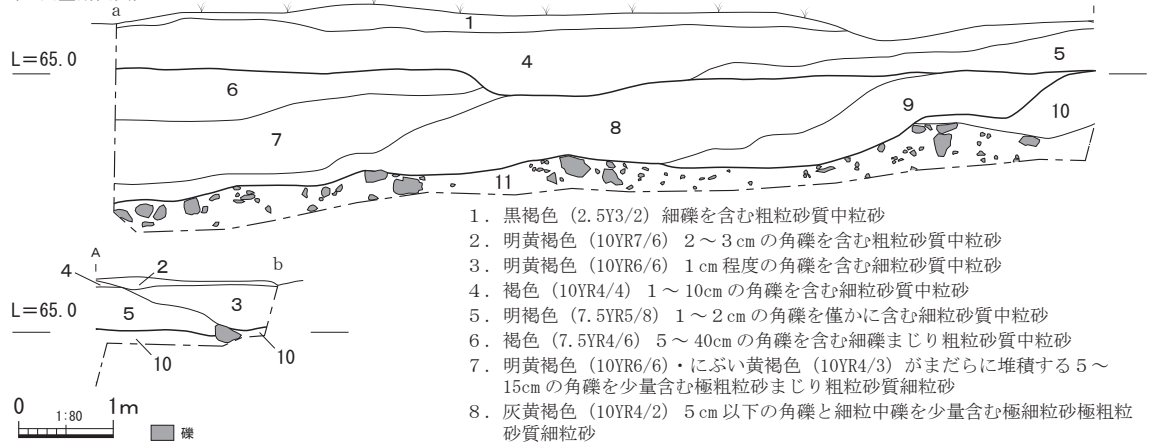


1. 黒褐色 (2.5Y3/2)
細礫を含む粗粒砂質中粒砂
2. 黄褐色 (2.5Y5/6)
2~3cmの角礫を少量含む細粒砂
まじり極粗粒砂質中粒砂
3. 明黄褐色 (2.5Y6/8)
4~5cmの角礫を多量に含む粗粒砂
まじり細粒中礫質極粗粒砂
4. 黄褐色 (2.5Y5/6)
1cm以下の角礫を多量に含む極粗粒
砂まじり中粒砂質粗粒砂
5. 黄橙色 (10YR7/8)
1cm以下の角礫を多量に含む細礫
まじり細粒砂質中粒砂
6. 黄褐色 (2.5Y5/4)
1cm以下の角礫を僅かに含む極粗粒
砂まじり細粒砂質中粒砂
7. 黄橙色 (10YR7/8)
5~8cmの角礫を多量に
含む極粗粒砂まじり細粒
砂質中粒砂
8. 明黄褐色 (2.5Y6/6)
1cm以下の角礫を含む
細粒砂質中粒砂
9. 暗灰黄色 (2.5Y4/2)
1cm程度の角礫を僅かに
含む細粒砂質中粒砂
10. 明黄褐色 (2.5Y6/8)
1cm程度の角礫を含む
粗粒砂質中粒砂
11. 黄褐色 (2.5Y5/6)
3~5cmの角礫を多量に
含む粗粒砂質中粒砂
12. 明黄褐色 (2.5Y6/6)
2~3cmの角礫を含む
粗粒砂質中粒砂
13. 黄褐色 (2.5Y5/6)
岩盤が露出する粗粒砂質
中粒砂

第5図 小規模調査区平・断面図(S=平面1/200・断面1/80)

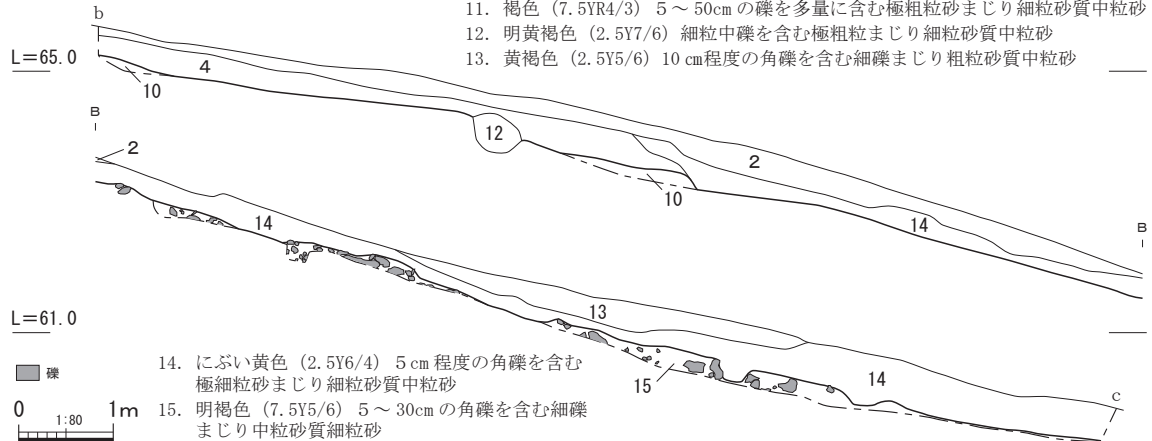


〈北西壁断面図〉



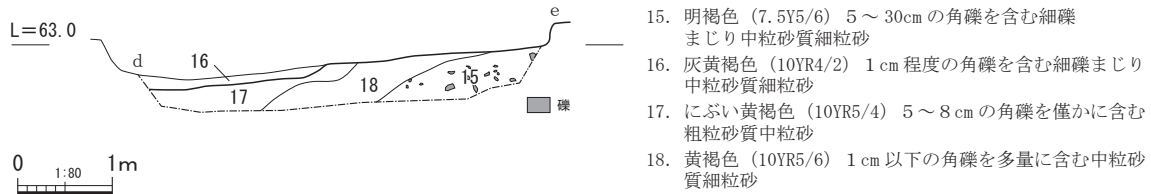
1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細礫を含む粗粒砂質中粒砂
2. 明黄褐色 (10YR7/6) 2~3cmの角礫を含む粗粒砂質中粒砂
3. 明黄褐色 (10YR6/6) 1cm程度の角礫を含む細粒砂質中粒砂
4. 褐色 (10YR4/4) 1~10cmの角礫を含む細粒砂質中粒砂
5. 明褐色 (7.5YR5/8) 1~2cmの角礫を僅かに含む細粒砂質中粒砂
6. 褐色 (7.5YR4/6) 5~40cmの角礫を含む細礫まじり粗粒砂質中粒砂
7. 明黄褐色 (10YR6/6)・にぶい黄褐色 (10YR4/3) がまだらに堆積する5~15cmの角礫を少量含む極粗粒まじり粗粒砂質細粒砂
8. 灰黄褐色 (10YR4/2) 5cm以下の角礫と細粒中礫を少量含む極細粒砂質粗粒砂質細粒砂
9. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒中礫を少量含む中粒砂質細粒砂
10. 明褐色 (7.5YR5/6) 5cm以下の角礫を僅かに含む細礫まじり中粒砂質細粒砂
11. 褐色 (7.5YR4/3) 5~50cmの礫を多量に含む極粗粒まじり細粒砂質中粒砂
12. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒中礫を含む極粗粒まじり細粒砂質中粒砂
13. 黄褐色 (2.5Y5/6) 10cm程度の角礫を含む細礫まじり粗粒砂質中粒砂

〈北東壁断面図〉



14. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 5cm程度の角礫を含む極細粒砂まじり細粒砂質中粒砂
15. 明褐色 (7.5Y5/6) 5~30cmの角礫を含む細礫まじり中粒砂質細粒砂

第6図 A地区平・断面図(S=平面1/200・断面1/80)



第7図 A地区断ち割り断面図(S=1/80)

面で焼土坑2基を検出した。焼土坑は削平を受けていると考えられ、本来は6層の上面から掘り込まれたと考えられる。6層の上層に堆積した層のうち、4・5層は無遺物層で、焼土坑が削平されたのちに堆積した層である。2・3層は工事用道路敷設の際の整地土および盛土で、1層は腐葉土を含む表土である。

A地区北東壁の層序(第6図)は地表下0.4mで大型の礫を含む自然堆積層として15層を確認している。樋ノ口2号窯跡の灰原が想定される範囲について断ち割りを行ったところ、堆積状況(第7図)から15層は調査区北西側から流入した自然堆積層と考えられる。17層の上層に堆積する16層は遺物包含層で、須恵器等の遺物が出土したが、樋ノ口2号窯跡に伴う灰原層は確認されなかった。17・18層からは遺物は出土せず、堆積状況から15層と同様に調査区北西側から流入した自然堆積層と考えられる。15層の上層に堆積する2・13・14層は工事用道路に伴う整地土および盛土である。

2) 検出遺構(第8図)

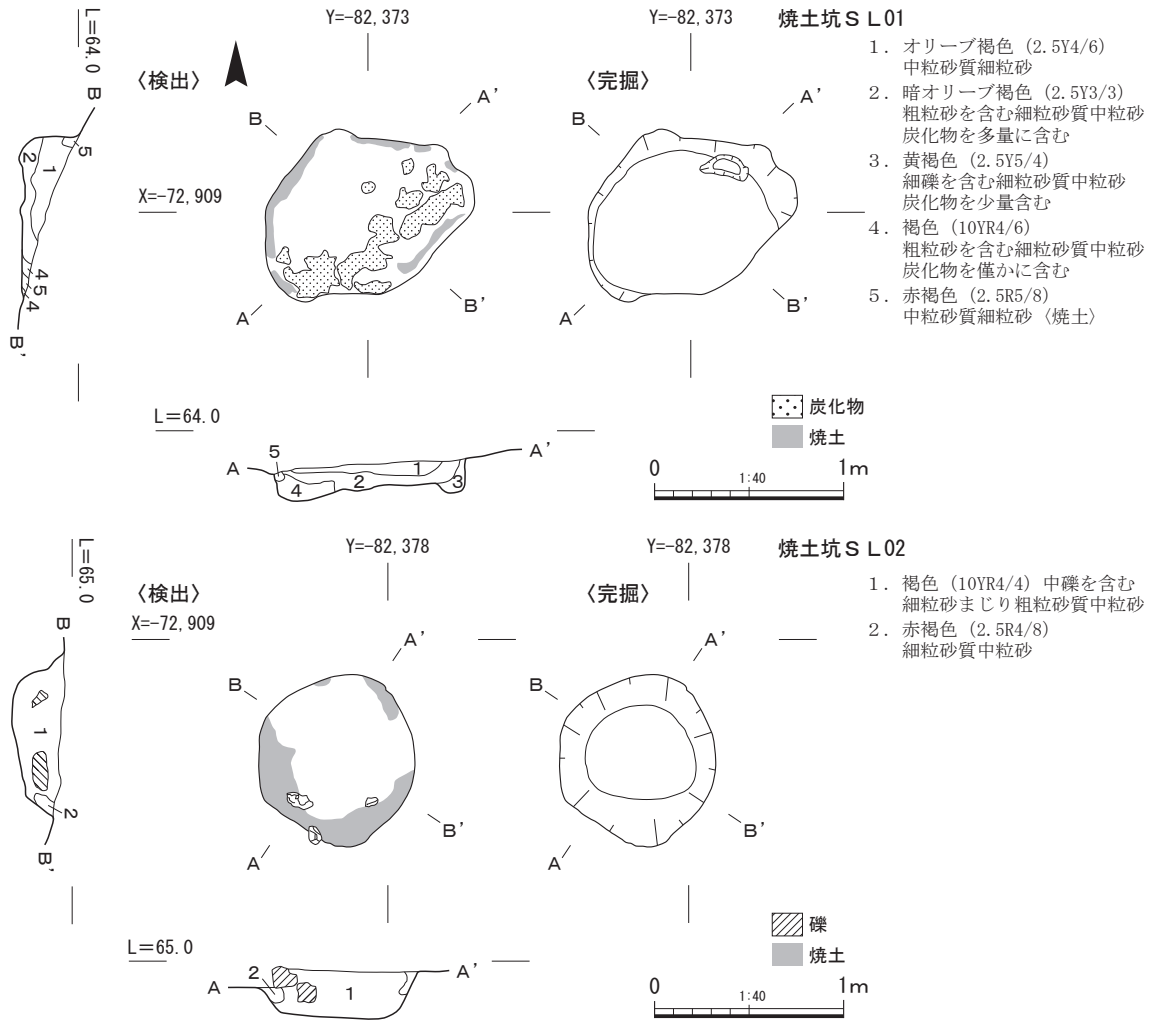
焼土坑 S L 01 A地区北西側の斜面で検出した、長軸1.0m、短軸0.8mのややいびつな楕円形の土坑で、深さは最大0.3m残存していた。検出時には土坑の輪郭に沿うように焼土が確認でき、炭化物が一部露出していた。断面で確認したところ焼土は床面には広がっておらず、土坑壁面のみ被熱していたようである。床面には礫を確認したが被熱痕跡はなく、遺構に伴うものではない。遺物は須恵器杯や甕、磁器の細片が出土しており(写真図版第13-(1))、埋没時に周辺から流入したもので遺構の時期を示すものではない。

焼土坑 S L 02 A地区北西側で検出した、径0.8mの円形の土坑で、深さは0.2m残存していた。検出時には土坑の輪郭に沿うように焼土が確認できたが、炭化物は確認できなかった。断面で確認したところ焼土は床面には広がっておらず、土坑壁面のみ被熱していたようで、埋土の内部にも炭化物はほとんど確認できなかった。埋土に大型の礫を確認したが被熱痕跡はなく、遺構に伴うものではなく、埋没時に流入したものと考えられる。

3) 出土遺物(第9・10図)

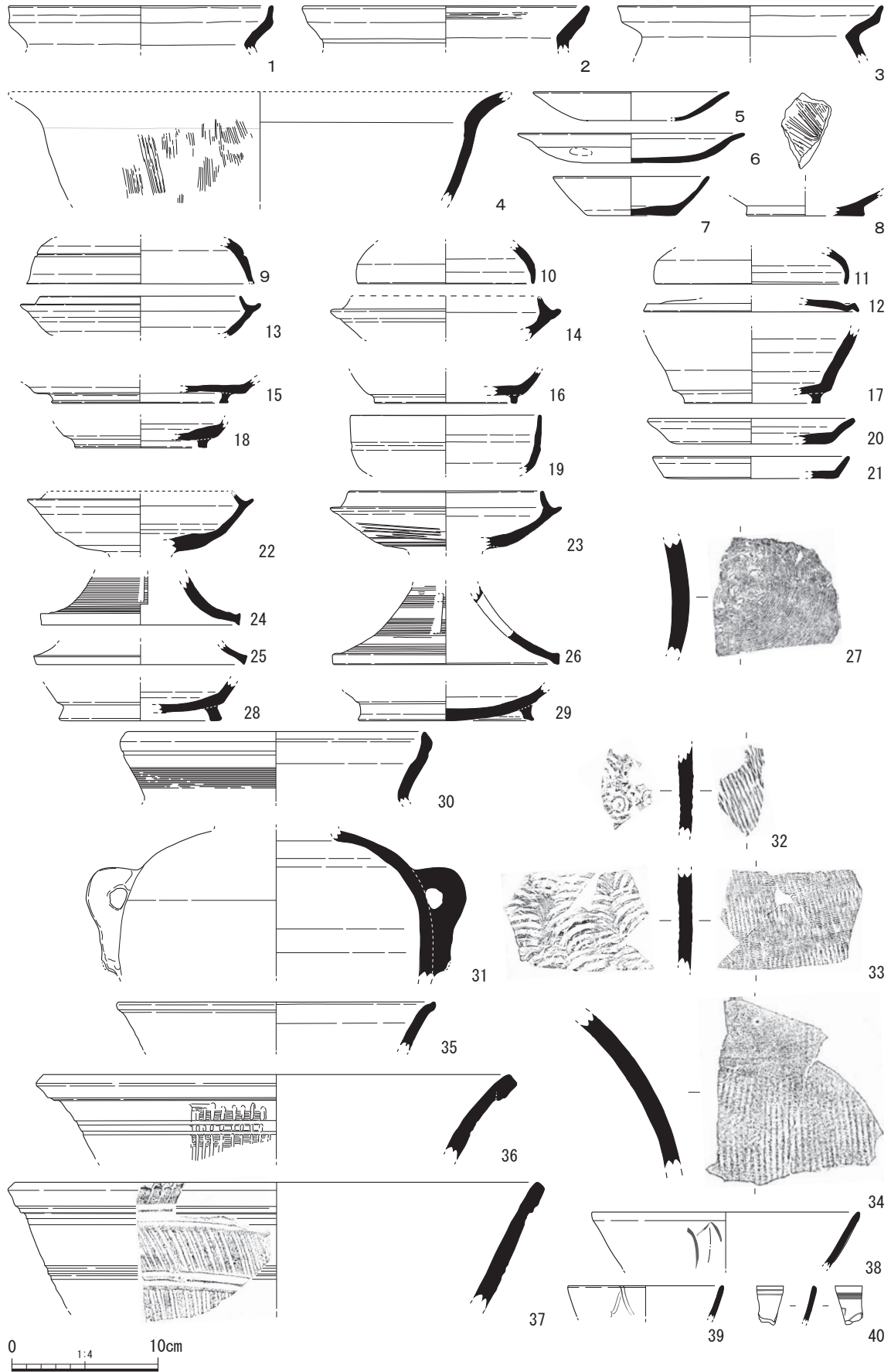
A地区では、遺構精査中および断ち割り掘削時に包含層から出土した遺物を中心にコンテナ1箱程度の遺物が出土した。

1～3は土師器の甕である。いずれも口縁部から肩部にかけて出土した。1・2は外面をナデ調整しており、口縁まで全体に煤が付着する。1の内面は摩滅が著しく、調整は不明である。2の内面は口縁部付近を板ナデで調整し、わずかに確認できる肩部内面は横方向のケズリが施される。3は内外面ともに摩滅が著しく調整不明だが、外面にわずかに煤が残る。いずれも古墳時代



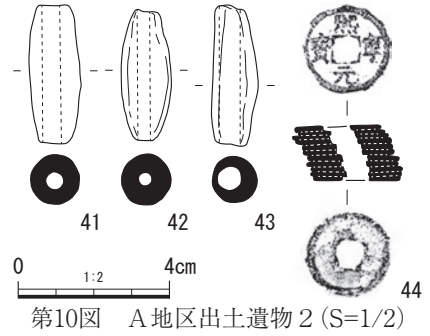
第8図 焼土坑平・断面図(S=1/40)

前期か中期と考えられる。4は土師器の鍋である。頸部から肩部にかけて残存する。頸部外面はナデ、肩部は縦方向のハケ調整である。頸部内面はわずかに横方向のハケが確認でき、ハケのちナデ調整である。肩部内面は強いナデ調整により段が残る。12世紀以降か。5～7は土師器の皿である。5は底部から口縁部までわずかに外反しながらまっすぐ伸び、口縁端部は丸く収める。胎土は白色を呈し比較的精良である。外面調整は口縁部付近では横方向のナデ、底部にかけては不定方向のケズリのちナデである。内面調整は横方向のナデである。6は底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上げ、口縁部付近で強くヨコナデし、口縁部を外反させる。口縁端部は丸く収める。胎土は橙色を呈し密である。内外面ともに底部付近で不定方向のナデ、口縁部付近はヨコナデである。5・6はいずれも9世紀後半から10世紀ごろか。7は内外面ともに摩滅が著しいが、底部外面にわずかに糸切痕が残る。平底の底部から口縁部にかけて直線的に伸び、口縁端部は丸く収める。13～14世紀ごろか。8は黒色土器の椀である。内面のみ黒色化しており、底部が出土した。外面は摩滅が著しいが底部にわずかに糸切痕が残る。内面はやや太めのミガキが施される。11世紀後半から12世紀代か。このほか図化できないが内面のみ黒色化した黒色土器の底部が出土している。内面のミガキは認められず、底部外面にわずかに糸切痕が残る(写真図版第10-(1))

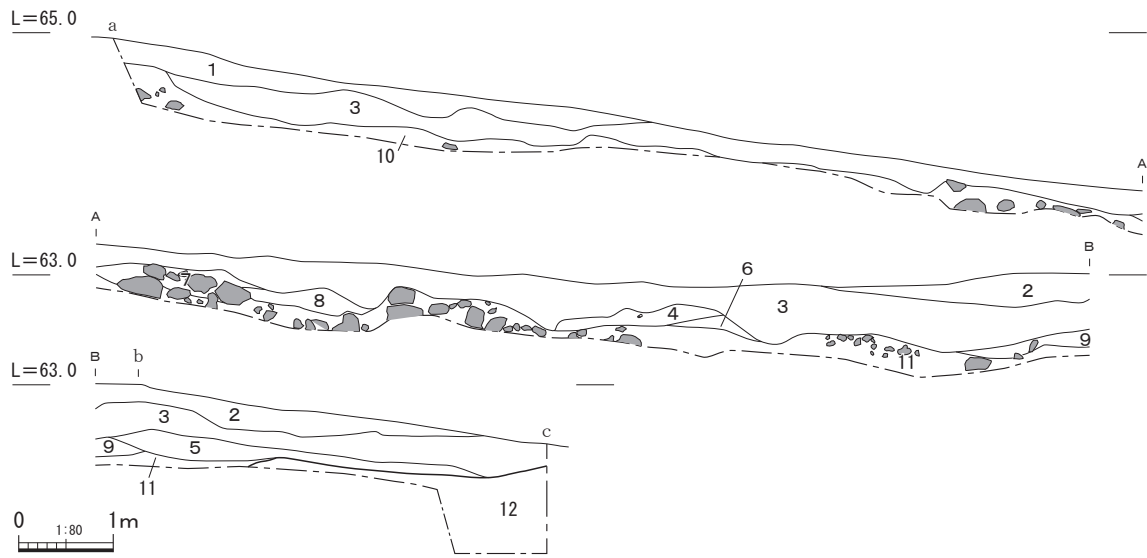
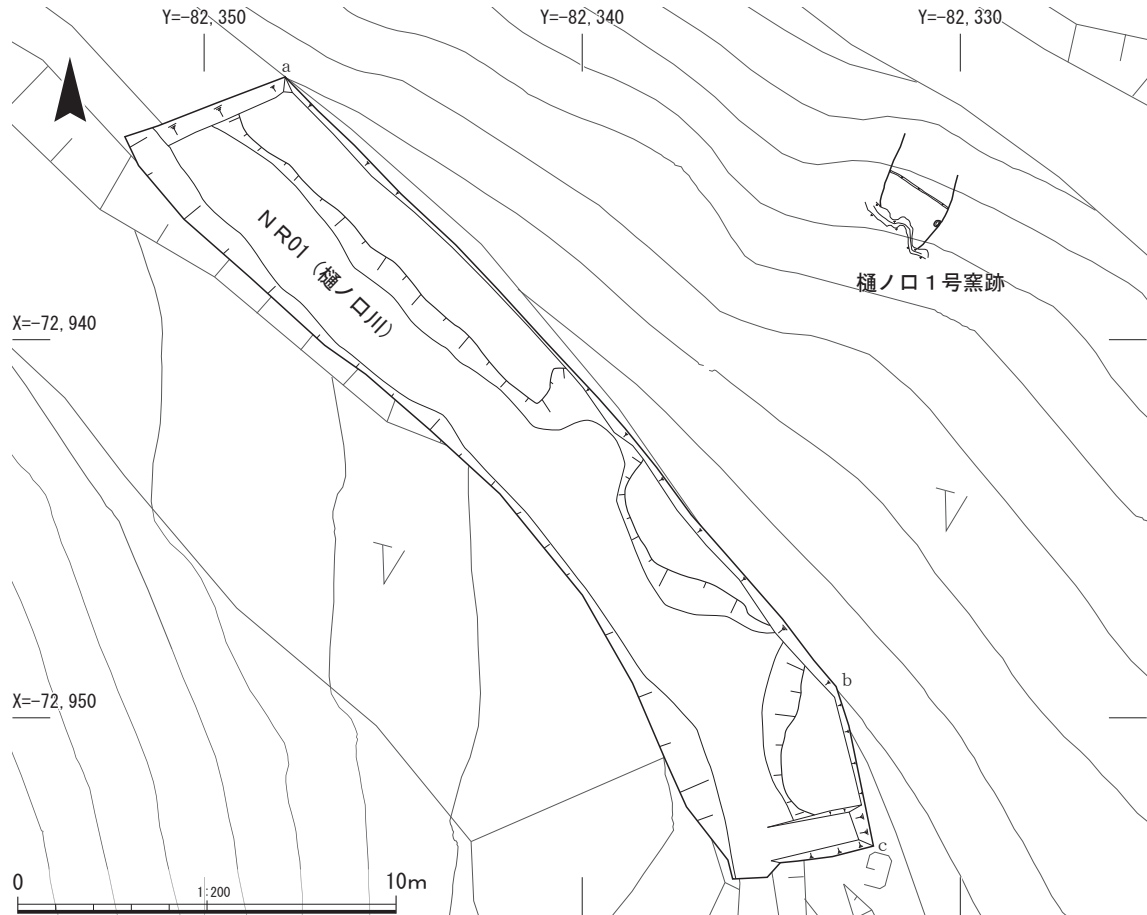


第9図 A地区出土遺物1

49)。9～12は須恵器の蓋である。9は口縁端部を欠損しており、天井部と口縁部の境界には沈線が巡る。内外面ともに回転ナデである。TK43型式である。10・11は天井部とから口縁部の境界にわずかに稜をもつ。口縁端部は丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整である。TK209型式である。12は扁平な天井部をもち、口縁端部を短く折り曲げる。内外面ともに回転ナデである。平安時代か。13～17は須恵器杯である。



13・14の口縁部は受部から斜め上方へ直線的に短く立ち上がる。13は焼け歪みによって大きく変形しており、14は口縁端部を欠損する。13・14はTK43型式かTK209型式である。15～18は貼付高台をもつ杯の底部である。奈良時代か。19は須恵器の椀である。体部の中位ナデによるゆるい稜をもつ。口縁端部は丸く収める。20・21は須恵器の皿である。20は平底の底部からわずかに外反しながら短く上方に伸びる口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。底部外面の調整は回転ヘラケズリである。内面は回転ナデである。21は平底の底部から直線的に短く上方に伸びる口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整である。20・21は平安時代か。22～26は須恵器の高杯である。22は杯部で口縁端部をわずかに欠損しており、直線的に短く立ち上がる。底部外面の調整は反時計まわりの回転ヘラケズリと回転ナデである。内面調整は回転ナデである。23は杯部のみ出土した。口縁部は受部からわずかに外反しながら短く立ち上がり、口縁端部は丸く収める。外面にはカキメ状の工具痕が残る。内面調整は回転ナデである。このほか図化できないが脚部がわずかに残る杯部が出土している。内外面ともに回転ナデである。24～26は脚部である。24・26の外面にはカキメが施されており、透孔の痕跡が1か所のみ確認できる。25は端部のみである。焼成状態が悪くにぶい褐色を呈する。内面調整は回転ナデである。22～26はTK43型式かTK209型式である。27は横瓶か。外面にカキメが施される。28～31は須恵器の壺である。28・29は貼付高台をもつ壺の底部である。内外面ともに回転ナデ調整である。30は口縁部である。頸部から口縁部にかけてわずかに外反しており、口縁端部はナデによって内側に曲がる。口縁部と頸部の境界には沈線が巡る。頸部外面にはカキメ状のハケメが巡る。口縁部外面および内面は回転ナデである。31は耳付き壺の肩部から体部である。内外面ともに回転ナデ調整である。32～37は須恵器の甕である。32は外面に細かいタタキ、内面は青海波状のオサエ工具痕跡が顕著に残る。33は外面にタタキを施したのちにカキメ状のハケメを巡らす。内面は青海波状のオサエ工具痕跡が顕著に残る。34は肩部から胴部にかけてである。外面は肩部にカキメ状のハケメ、体部はタタキが残る。内面は肩部ではナデでオサエ工具痕跡がすり消されており、体部の青海波状のオサエ工具痕跡もナデにより凹凸が弱い。35は回転ナデによって口縁端部を短く上方へ曲げる。内外面ともに回転ナデ調整である。36は頸部に縦方向の凹線を連続的に施したのちに横方向の沈線を2条巡らす。焼成が悪く、赤茶色を呈する。37は頸部外面に斜め方向の連続的な斜線文を施したのちに沈線を巡らす。口縁端部には刻み目文が施される。内面は回転ナデ調整である。38は龍泉窯系青磁椀である。体部外面に蓮弁文が施され、蓮弁の中心には鑄を有する。内面は無文で



- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 5～10cmの角礫を含む細礫まじり粗粒砂質中粒砂</p> <p>2. 黄橙色 (10YR7/8) 5～10cm、40cm程度の角礫を含む細礫まじり中粒砂質粗粒砂</p> <p>3. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 10cm程度の角礫を少量含む細礫・極粗粒砂まじり中粒砂質細粒砂</p> <p>4. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細礫まじり粗粒砂質中粒砂</p> <p>5. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 5cm程度の角礫を含む中粒砂質極細粒砂</p> <p>6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細礫まじり中粒砂質細粒砂</p> <p>7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 50cm程度の角礫を含む中粒砂質細粒砂</p> <p>8. 褐色 (10YR4/4) 5～10cmの角礫を少量含む極粗粒砂まじり中粒砂質細粒砂</p> | <p>9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 5～15cmの角礫を含む細礫まじり細粒砂質中粒砂</p> <p>10. 黄褐色 (2.5Y5/3) 15cm程度の角礫を含む極粗粒砂まじり粗粒砂質中粒砂</p> <p>11. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 5～60cmの角礫を多量に含む細礫まじり粗粒砂質極粗粒砂</p> <p>12. 明黄橙色 (10YR6/6) 2～3cmの角礫を含む中粒砂質細粒砂</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第11図 B地区平・断面図(S=平面1/200・断面1/80)

ある。13世紀前半である。39・40は肥前磁器碗である。39は外面に二重網目文が施される。17世紀末から18世紀の波佐見焼か。内面は無文である。40は外面には口縁部付近に太い圈線が1条めぐり、体部には草花文かと思われる模様が残る。内面は口縁部付近に圈線が2条めぐり、上位がやや太い。41～43は土錘である。胴部がやや膨らみをもつ、管状土錘^(注3)である。44は熙寧元寶の緡銭である。11枚が連なっている。真書体で、やや铸上がりが悪い。初铸年代は1068年である。

6. B地区の調査

1) 調査の概要と層序

B地区は幅約4.5m、長さ約26.2mの調査区で、第1次調査で確認された樋ノ口1号窯跡が位置する斜面の下位に設定した。調査ではまず、重機で工事に伴う攪乱土および表土を掘削し、その後人力によって遺構検出を行った。

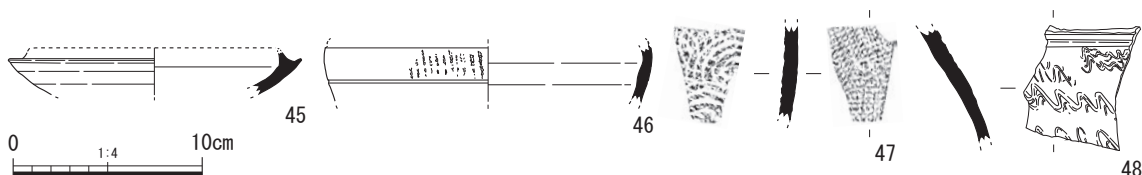
B地区では、現在の樋ノ口川によって形成された河川堆積が、調査区のほぼ全面に厚く堆積しており、南東側にわずかに安定地盤が確認できたが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。また、樋ノ口1号窯跡の灰原が想定された範囲については、河川堆積が確認されたのみで灰原層は確認できなかった。

調査区の層序(第11図)については、調査区南東側で確認された12層は安定面として確認できたが、遺構は検出されなかった。表土下0.7m以下の11層は大型の礫を含む河川堆積層で、樋ノ口川が12層を浸食しながら堆積した層であり、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。12層の上層のうち、7層および9層からわずかに遺物が出土しており、二次的に堆積した遺物包含層である。また6・8・10層からは遺物は出土しなかった。4・5層からは塩化ビニル管等を確認しており、近現代の攪乱土層である。1～3層は工所用道路に伴う整地土及び盛土である。

2) 出土遺物(第12図)

B地区では、包含層から出土した遺物を中心にコンテナ1箱の遺物が出土したが、図化できたものはわずかである。

45は須恵器の杯である。口縁端部は欠損しており、受部から斜め上方へ直線的に立ち上がる。TK209型式以降か。このほか図化できないが杯蓋の破片が出土している(写真図版第13-(2)-50)。46は須恵器の壺である。体部が出土しており、2条の沈線の上に刺突文が施される。47・48は須恵器の甕である。47は体部の破片である。外面は格子状のタタキのちに不定方向のカキメ状のハケメを施す。内面は青海波状のオサエ工具の痕跡が顕著である。48は肩部とみられる破片で、粗い波状文が施される。このほか図化できないが、焼成の不十分な橙色を示す甕体部の破片は数多く出土している(写真図版第13-(2))。



第12図 B地区出土遺物

7. まとめ

樋ノ口窯跡群第2次調査では、6か所の小規模調査と2地点の本調査を実施した。小規模調査は谷部斜面に窯跡に関連する遺構の有無を確認するために実施したが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。調査地は傾斜角が40°前後の急傾斜であること、狭隘な谷部に作業空間の確保が困難であること、表土直下で岩盤が露出する地点もあることなど、窯を築造することが困難な地理的、地質的条件であったと考えられる。本調査では第1次調査で確認された窯跡周辺の調査を実施したが、窯跡に関連する遺構や灰原の広がりには確認できなかった。一方、包含層出土遺物には焼成失敗品とみられる須恵器の破片があり、樋ノ口窯の操業に伴う須恵器と推定される。これらはTK43型式からTK209型式が大半を占める。このほか、A地区では焼土坑を2基検出した。これらの焼土坑は近世の遺物を含む遺物包含層を削平して整地された平坦面から掘り込まれたと考えられ、近世以降の遺構と推定される。また、A地区では調査前に緩傾斜の平坦面が確認されており、調査の結果、この平坦面は近世以降の遺物を包含する盛土によって形成されたものであることが明らかになった。A地区の調査区外、北西側の谷部には調査前に農業用貯水池があり、高さ約2.0mの土堤が構築されていた。近世以降の築堤時に谷部を一定程度埋め立てたと考えられる。盛土の下層では古墳時代から平安時代の遺物包含層と、中世の遺物包含層を確認した。古墳時代前期、あるいは中期と考えられる土師器の破片や奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器が一定数、周辺から流入しており、何らかの形で土地利用されていたことが指摘できるが、樋ノ口窯跡群周辺では当該時期の遺跡は乏しく、注意すべき遺物といえる。包含層出土遺物のうち、特に13世紀代の龍泉窯青磁碗や熙寧元寶の緡銭は特筆される。福知山市内では大内城跡や、上ヶ市遺跡などの在地有力者の居館で中国製陶磁器が出土しているほか、樋ノ口窯跡群と近接する寺浦遺跡でも龍泉窯青磁碗の破片が出土しており、当該時期に山間部の谷部まで含めて土地利用が広がっていたことを示唆する。このほか、由良川流域のうち、福知山市と綾部市にまたがる福知山盆地では京都府下でも備蓄古銭が集中する地域である。これらはいずれも銭緡に通した状態で丘陵裾に埋納されており、周辺の山城との関連性や、由良川を介した商品流通や貨幣経済の発達を反映した可能性が指摘されている。樋ノ口窯跡群も周辺に山城が多く、由良川と牧川の合流地点からほど近い谷部に位置することから、緡銭の状態^(注4)で出土した熙寧元寶は備蓄古銭であった可能性がある。

以上のように、樋ノ口窯跡群周辺では中世を中心とした時期に土地利用が推定されるが、貯水池として利用されていた地点の地表下の確認では自然堆積層が厚く、谷奥については樋ノ口川の浸食、堆積作用によって周辺の遺構は削平された可能性が高い。一方で、平野部には時期不詳であるが牧氏居館跡や鎌倉期に伝承をもつ一宮神社、室町時代中期に創建されたとされる永明寺が造営されること、周辺山稜頂部には、時期不詳であるものの堂屋敷城跡、湯里北城跡、湯里城跡、湯里東城跡、牧城跡などの山城が集中しており中世以降の土地利用が推定され、周辺が13世紀以降の開発によって、現在の牧集落の基礎が築かれた可能性が指摘できる。 (名村威彦)

- 注1 位置と環境の執筆にあたっては個別の発掘調査報告書のほか、以下の文献を参考にした。
 石崎善久・岸岡貴英・高橋成計・中居和志・永恵裕和・西尾孝昌・福島克彦・松崎健太・八瀬正雄2013「1
 天田郡」『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊－丹波編－ 京都府教育委員会
 海老瀬敏正・石井清司・常盤井智行1983「妙見古墳群」『丹波の古墳』Ⅰ 山城考古学研究会
 根本惟明・木下禮次監修1998『福知山・綾部の歴史』郷土出版社
 福知山市史編さん委員会1976『福知山市史』第一巻、福知山市役所
 福知山市史編さん委員会1982『福知山市史』第二巻、福知山市役所
- 注2 濱 喜和子・北山大熙2025『寺浦遺跡・薬師遺跡発掘調査報告』京都府教育委員会
- 注3 谷 正俊2021「神戸市内の土鍾について－古墳時代から鎌倉時代まで－」『神戸市立博物館研究紀要』
 第36号 神戸市立博物館
- 注4 杉原和雄・森島康雄1993「京都府出土の備蓄古銭」『撰河泉文化資料』第42・43号 撰河泉文庫

付表1 出土土器観察表

()復元値 [] 残存値

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土
1	土師器	甕	A地区	包含層	(17.8)	[3.0]	-	1/12以下	橙 (7.5YR7/6)	密 (1～5mmの白色・赤色砂粒)
2	土師器	甕	A地区	包含層	(19.4)	[2.9]	-	1/12	にぶい黄褐 (10YR5/4)	密 (1～3mmの白色・茶褐色・赤色砂粒)
3	土師器	甕	A地区	包含層	(18.0)	[3.5]	-	1/12以下	橙色 (5YR7/6)	密 (1～2mmの白色・灰色・赤色砂粒)
4	土師器	鍋	A地区	包含層	-	[6.8]	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 (1～2mmの赤色・白色・黒褐色砂粒)
5	土師器	皿	A地区	包含層	(13.2)	[2.0]	-	3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 (1mmの淡赤色・赤色砂粒)
6	土師器	皿	A地区	包含層	(15.4)	[2.1]	-	3/12	橙 (5YR7/6)	密 (1mmの赤色、4mmの灰色砂粒)
7	土師器	皿	A地区	包含層	(10.6)	[2.7]	-	1/12以下	明赤褐 (5YR5/6)	密 (1mmの白色砂粒)
8	黒色土器	椀	A地区	包含層	-	[1.7]	(7.8)	2/12	橙 (5YR6/6)	密 (1～2mmの白色・灰色・橙色砂粒)
9	須恵器	杯蓋	A地区	包含層	(15.5)	[3.1]	-	-	内部：灰 (N6/0) 外部：灰 (5Y4/1)	密 (1mm以下の白色砂粒)
10	須恵器	杯蓋	A地区	包含層	(12.0)	[2.8]	-	1/12	灰 (N6/0)	密 (1mmの白色・黒色砂粒)
11	須恵器	杯蓋	A地区	包含層	(13.0)	[2.3]	-	1/12以下	灰 (N5/0)	密
12	須恵器	杯蓋	A地区	包含層	(14.6)	[0.9]	-	2/12	灰 (N5/0)	密 (1mmの白色砂粒)
13	須恵器	杯H身	A地区	包含層	(13.6)	[2.8]	-	2/12	灰白 (N7/0) 灰 (N5/0)	密 (1mm以下の白色・黒色砂粒)
14	須恵器	杯H身	A地区	包含層	(12.8)	[2.9]	-	-	灰 (N5/0)	密 (1mm以下の白色・黒色砂粒)
15	須恵器	杯身	A地区	包含層	-	[1.6]	(12.0)	1/12	灰 (N6/0)	密 (1～2mmの白色砂粒)
16	須恵器	杯身	A地区	包含層	-	[2.75]	(9.6)	2/12	灰白 (10YR8/2)	密 (1～2mmの白色・半透明・赤色砂・茶褐色砂粒)
17	須恵器	杯身	A地区	包含層	-	[5.1]	(9.2)	1/12	灰 (N6/0)	密 (1～3mmの白色・黒色砂粒)
18	須恵器	杯身	A地区	包含層	-	[1.9]	(9.0)	2/12	灰 (N6/0)	密 (1～5mmの白色砂粒)
19	須恵器	椀	A地区	包含層	(13.0)	[4.0]	-	1/12	灰白 (5Y7/1)	密 (1mmの白色・黒色砂粒)
20	須恵器	皿	A地区	精査	(13.8)	[1.8]	-	2/12	灰 (N7/0-6/0)	密 (1～3mmの白色砂粒)
21	須恵器	皿	A地区	包含層	(13.4)	[1.5]	-	1/12以下	灰 (N5/0)	密 (1mmの白色砂粒)
22	須恵器	高杯	A地区	包含層	(12.6)	[4.1]	-	-	赤灰 (2.5YR4/1)	密 (1～2mmの白色砂粒)

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土
23	須恵器	高杯	A地区	包含層	(13.2)	[4.1]	-	3/12	灰 (N6/0)	密 (1mm以下の白色砂粒)
24	須恵器	高杯	A地区	包含層	(13.6)	[3.4]	-	1/12	灰 (N6/0)	密 (1~2mmの白色砂粒)
25	須恵器	高杯	A地区	包含層	(14.2)	[1.4]	-	1/12以下	にぶい褐 (7.5YR6/3)	密 (1~2mmの白色・黒色砂粒)
26	須恵器	高杯	A地区	包含層	-	[5.4]	(15.4)	1/12	灰白 (N7/0)	密 (1mm以下の白色・半透明・黒色砂粒)
27	須恵器	堤瓶か横瓶	A地区	包含層	最大幅 [8.6]	最大長 [7.3]	-	-	灰白 (5Y7/1)	密 (1~2mmの白色・黒色砂粒)
28	須恵器	壺	A地区	包含層	-	[2.6]	(10.8)	2/12	灰 (N6/0)	密 (1~3mmの白色砂粒)
29	須恵器	壺	A地区	包含層	-	[2.4]	(11.8)	4/12	灰白 (N7/0)	密 (1~3mmの白色・黒色砂粒)
30	須恵器	壺	A地区	包含層	(20.4)	[4.7]	-	1/12以下	内:オリーブ灰 (2.5GY6/1) 外:緑灰 (7.5GY5/1)	密 (1mm以下の白色砂粒)
31	須恵器	耳付き壺	A地区	包含層	幅 (21.4)	[10.0]	-	-	内:灰 (5Y5/1) 外:灰 (N6/0)	密 (1mmの白色・黒色砂粒)
32	須恵器	甕	A地区	包含層	最大長 [6.0]	最大幅 [3.8]	-	-	灰 (N4/0-5/0)	密 (1mmの白色砂粒)
33	須恵器	甕	A地区	包含層	最大幅 [10.1]	最大長 [6.5]	-	-	灰 (5Y5/1)	密 (1mmの白色砂粒)
34	須恵器	甕	A地区	包含層	最大長 [10.6]	最大幅 [11.4]	-	-	灰 (N5/0)	密 (1mmの白色・黒色砂粒)
35	須恵器	甕	A地区	包含層	(21.6)	[3.3]	-	1/12以下	灰 (7.5Y6/1)	密 (1mmの白色砂粒)
36	須恵器	甕	A地区	包含層	(31.0)	[5.8]	-	1/12以下	にぶい赤褐 (5YR5/3)	密 (1mmの白色・半透明砂粒)
37	須恵器	甕	A地区	包含層	(35.8)	[8.7]	-	1/12以下	灰 (N5/0) (5Y5/1)	密 (1~2mmの白色・透明砂粒)
38	磁器 (龍泉窯系)	椀	A地区	精査	(18.2)	[3.9]	-	1/12以下	露胎部:灰白 釉調:灰オリーブ (7.5Y6/2)	-
39	磁器	椀	A地区	包含層	(10.5)	[2.1]	-	1/12	露胎部:灰白 (7.5Y8/1) 釉調:灰白 (7.5Y7/1)	-
40	磁器	椀	A地区	包含層	-	[2.4]	-	1/12以下	露胎部:白 釉調:(透明・紺)	-
41	土製品	土錘	A地区	包含層	幅(1.3)	最大長(3.7)	-	-	橙 (5YR6/8)	密 (1~2mmの白色・灰色砂粒)
42	土製品	土錘	A地区	精査	幅(1.3)	最大長(3.5)	-	1/12以下	橙 (5YR6/6)	密 (1mmの白色砂粒・赤色斑粒)
43	土製品	土錘	A地区	包含層	幅1.3	高さ3.8	-	完形	橙 (7.5YR6/6)	密 (1mm以下の白色砂粒)
45	須恵器	杯H身	B地区	精査	-	[2.5]	-	1/12以下	灰白 (7.5Y8/1)	密 (1mmの白色砂粒)
46	須恵器	壺	B地区	精査	(17.4)	[2.9]	-	-	灰 (N4/0)	密 (1mmの白色・褐色砂粒)
47	須恵器	甕	B地区	精査	最大幅 [3.4]	最大長 [5.0]	-	-	灰 (N5/0)	密 (1mmの白色・半透明砂粒)
48	須恵器	甕	B地区	包含層	-	[5.8]	-	-	灰 (N4/0)	密 (1mmの白色砂粒)

付表2 錢貨観察表

番号	錢貨名	国	初鑄年	地区	遺構	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
44	熙寧元寶	北宋	1068	A地区	包含層	2.4	1.5	34.4	11枚重ね・緋銭

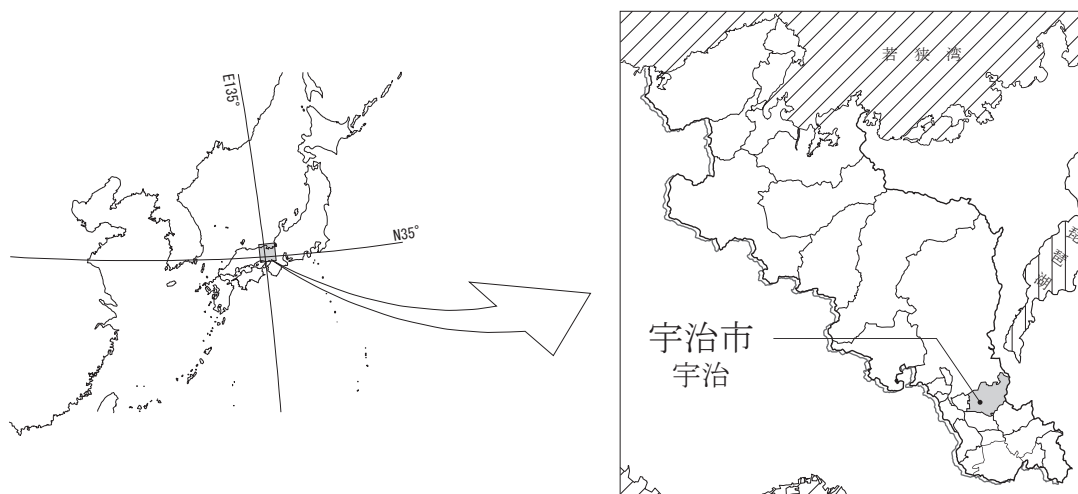
2. 宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告

1. はじめに

琵琶湖を發した瀬田川は、名前を京都府内で宇治川と変えて宇治田原町から宇治市東部の山間部を蛇行しながら幽谷を刻んでいる。京都府第二の都市である宇治市の市街地は、この宇治川が山地から初めて平地へと流れ出る場所に形成されている。この一帯は、南都から木津川右岸を北上し京や東国へと至る通路として重要視されてきており、宇治川に架かる宇治橋は日本三古橋に数えられている。藤原道長が得た宇治院は、頼通の手によって永承7(1052)年に平等院として創立される。以降、宇治橋周辺は貴族の別業地として発展し、とくに宇治橋から西の中宇治地域では街区の形成が顕著である。現在ではこの一帯は宇治市街遺跡に指定され、その広さは54万㎡を擁する。広大な面積を有する同遺跡は、宇治川を境に川西地区と川東地区に区分されている。

ここに報告するのは宇治警察署の新庁舎建設に伴う、宇治市街遺跡(川西地区)の発掘調査である。宇治警察署が開かれたのは1954年である。国鉄宇治駅に近い宇治橋通り(府道15号)と本町通りの合流地点からやや北の場所で、当時は現敷地の北東隣に位置していた。その後、府道15号のバイパス道路が整備され、車通りも多い繁華な場所となっている。建て替えの対象となった旧本館は1968年、旧別館は1975年に完成しているが、老朽化と施設が狭隘である点が課題となっていた。新庁舎建設事業のうち、第1期棟は2024年に完成しすでに供用が開始している。今後第2期棟が整備され、事業の完結をみる予定である。

現地調査にあたっては宇治市教育委員会、京都府教育委員会にご指導・ご協力を頂くと共に、地元近隣の皆様にご高配を頂いた。また杉本宏氏(京都芸術大学)、増田富士雄当調査研究センター理事(京都大学名誉教授)に現地指導を頂いた。



第1図 宇治市の位置

なお調査にかかる経費は京都府警察本部が全額負担した。

本文は現地調査を担当した調査課の森島康雄・村田和弘・加藤雅士が執筆した。

[現地調査体制]

令和3年度

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

現地調査担当者 調査課課調査第2係長 高野陽子

同 調査第2係主任 加藤雅士

調査場所 宇治市宇治字文字

現地調査期間 令和3年12月16日～令和4年2月28日

調査面積 410㎡

令和4年度

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第2係長 高野陽子

同 調査第2係主任 加藤雅士

調査場所 宇治市宇治字文字

現地調査期間 令和4年4月25日～令和4年8月24日

調査面積 480㎡

令和7年度

現地調査責任者 調査課長 高野陽子

現地調査担当者 調査課調査第1係長 森島康雄

同 調査第3係主査 村田和弘

調査場所 宇治市宇治字文字

現地調査期間 令和7年7月24日～令和7年11月27日

調査面積 740㎡

[整理作業体制]

整理作業責任者 調査課長 高野陽子

整理作業担当者 調査課調査第1係長 森島康雄

同 調査第1係主査 加藤雅士

同 調査第3係主査 村田和弘

整理作業期間 令和7年4月1日～令和8年3月31日

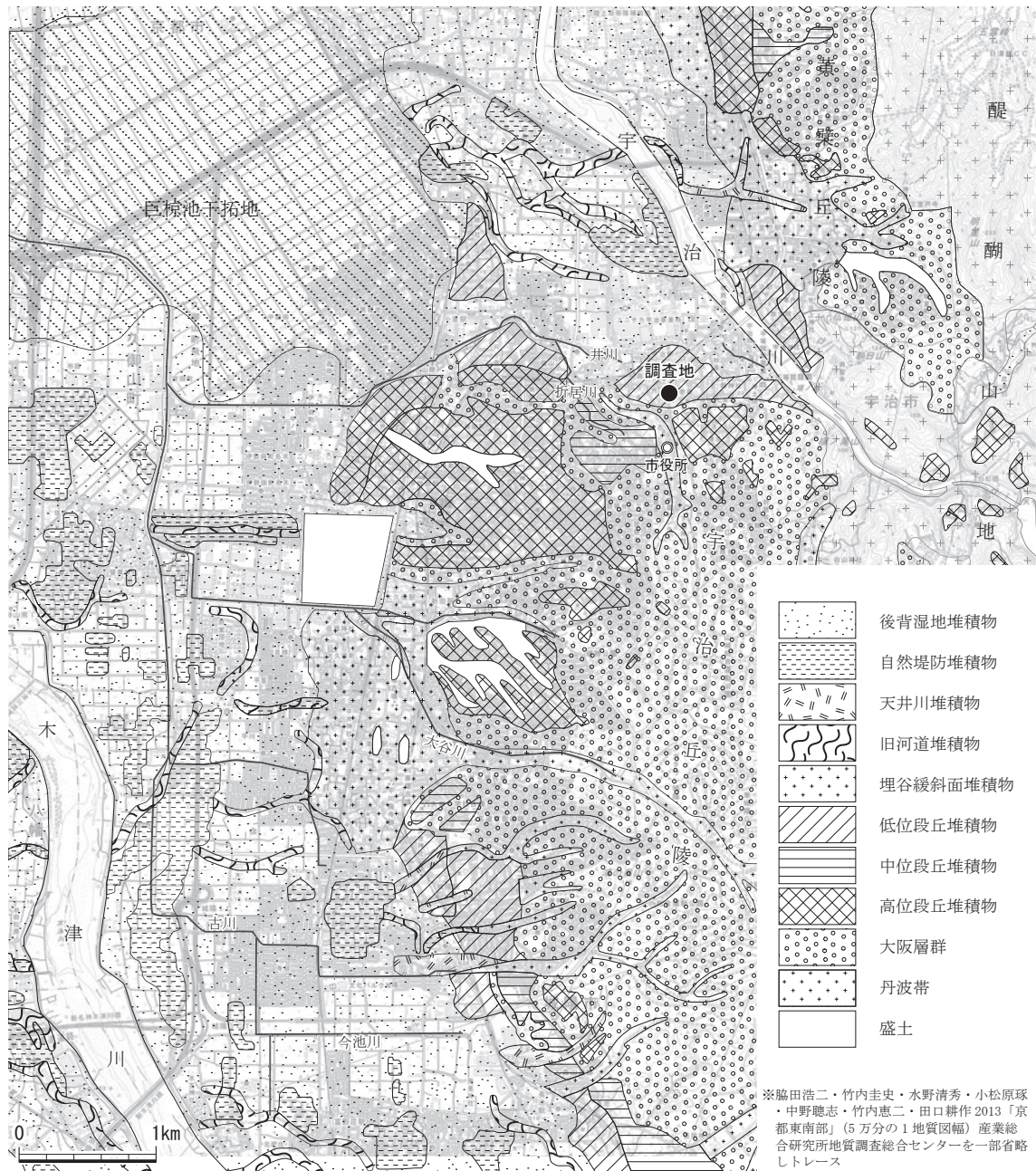
2. 位置と環境

1) 地理的環境

宇治市は京都府南東部に所在し、東は滋賀県大津市に接している。北は京都市伏見区、西は久御山町、南は城陽市・宇治田原町に接しており、市の西半を占める平野部は京都盆地の東縁にあ

たる。一方の宇治市の東半を占める山地は醍醐山地と名付けられており、滋賀との府県境である京都市山科区にある音羽山(標高593m)から宇治田原町の大峰山(標高506m)まで、南北方向約7kmにわたって峰々が並んでいる。醍醐山地と京都盆地の間は標高300m以下の丘陵地帯となる。大阪層群で構成される丘陵地帯は、宇治川の南では宇治丘陵と称する。宇治丘陵の西端部では高位段丘堆積物が広く分布するとともに、宇治傾動帯による影響を受けている。

調査地付近を詳細にみると、宇治丘陵から北側の平野部に向かって舌状に延びる地形があり、その中央部に今回の調査地である宇治警察署が位置する。宇治市史や池田・植村1980^(注1)では扇状地とされており、この場合、当地は扇央に該当するであろう。一方、産業総合研究所の地質分類図^(注3)では低位段丘に分類されており、扇状地が低位段丘化したものと判断されているようである。



第2図 周辺地質分布図

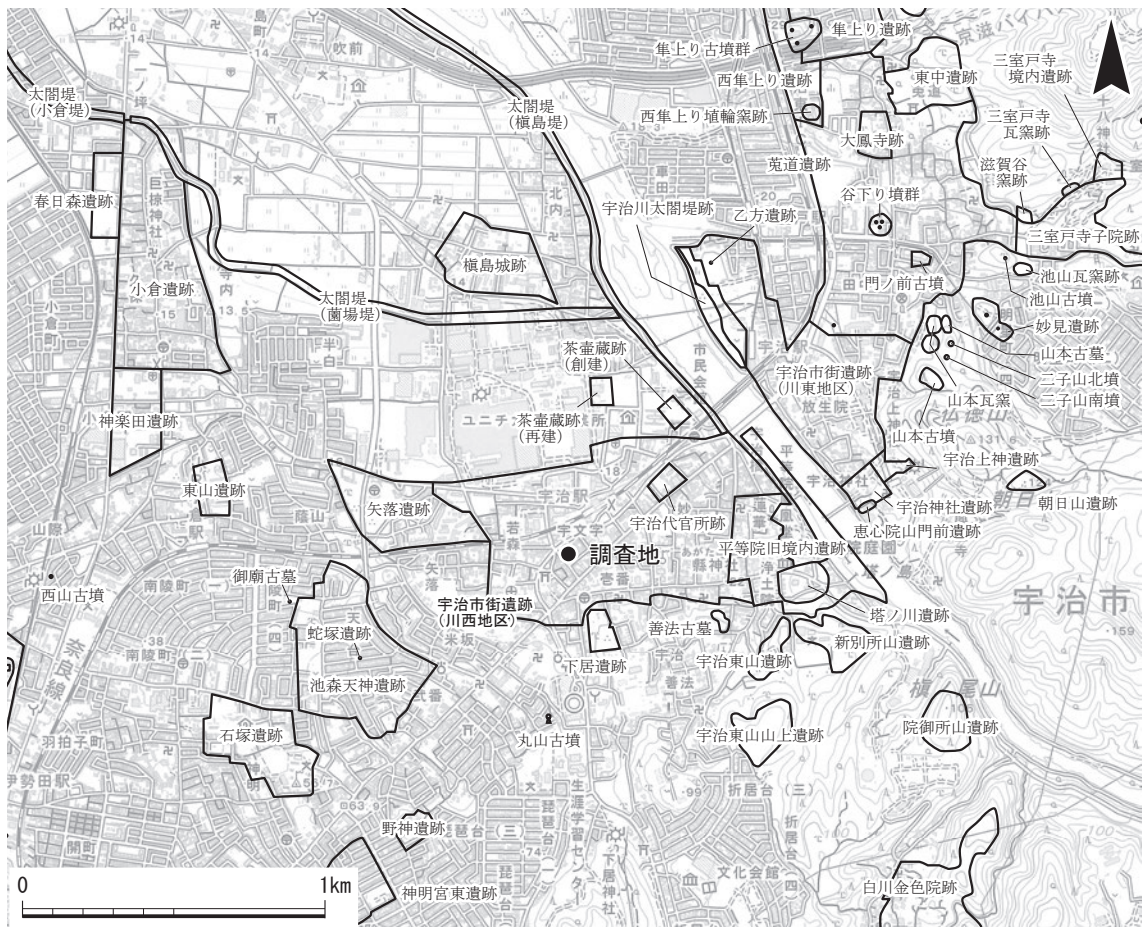
このすぐ南には、折居川が作った谷地形がある。現在では一部暗渠化されているものの、谷地形が宇治丘陵に対して南北方向に入り込んでおり、近世段階には「中川原」と呼ばれる湿地であったという。現在の折居川は谷を出た後、調査地の西側に流れるが、これは人為的な流路の改変と考えられている。本来の折居川は真っすぐ北に延びて直接に井川と合流するものに復元されており、この考えでは元々の折居川は今回の調査地付近を通るものとされている。

2) 周辺遺跡

旧石器・縄文時代 宇治市内で確認されている旧石器時代の資料としては、二子山古墳で見つかったナイフ形石器^(注5)や西隼上り遺跡で出土した有茎尖頭器がある。縄文時代の遺構としては、寺界道遺跡で晩期後半の貯蔵穴が検出されている^(注7)。遺物では、平等院旧境内遺跡・塔の川遺跡^(注8)で中津式や北白川上層式の土器がまとまって出土しているほか、西隼上り遺跡^(注9)でも少量ながら押型文土器と突帯文土器の出土がある。

弥生時代 乙方遺跡^(注10)では弥生時代中期、若林遺跡^(注11)では弥生時代中期以降の竪穴建物跡や墓域がそれぞれの遺跡で調査されている。弥生時代後期では羽戸山遺跡^(注12)や乙方遺跡^(注13)で竪穴建物跡が見つかっていて、このうち羽戸山遺跡はその立地から高地性集落と考えられている。

古墳時代 古墳時代前期から後期にかけて宇治川右岸に観音山古墳、二子山北墳、二子山南墳、瓦塚古墳、二子塚古墳^(注14)が造られる。これらは首長墳と考えられており、宇治古墳群として国史跡



第3図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000)

となっている。集落では西浦遺跡^(注15)や寺界道遺跡^(注16)で竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが調査されている。妙楽55で実施した宇治市街遺跡の発掘調査では古墳時代の溝（S D 302）がみつき、初期須恵器や木製品が出土している。木製品の伐採年代は、年輪年代法でAD389年の数値が出ている。

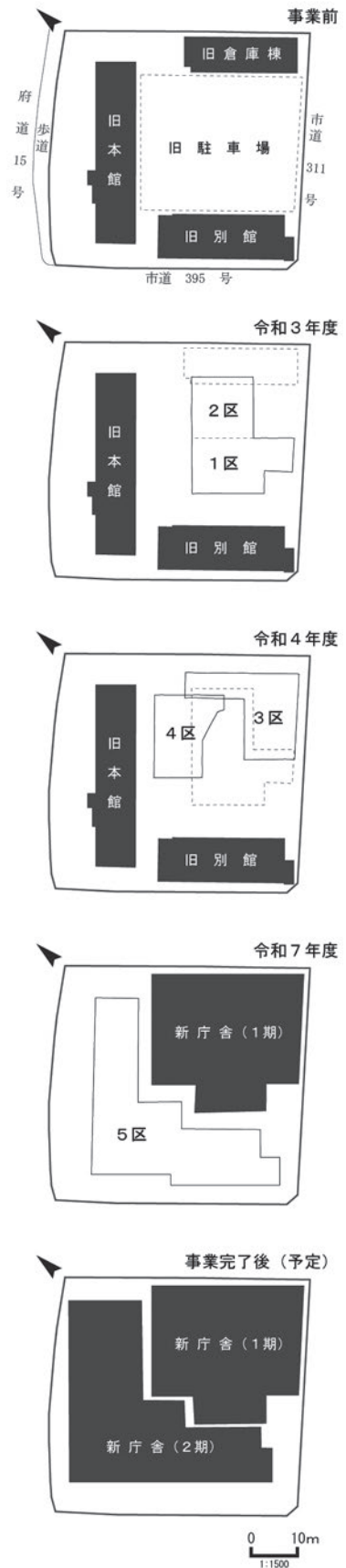
古代以降 隼上り瓦窯跡は7世紀前半に瓦と須恵器の生産が行われている^(注17)。飛鳥地域との繋がり強く、国史跡となっている。平安時代以降は貴族の別業地なるが、とくに永承7（1052）年の平等院創建以降に宅地や街区が発展し、近世以降へ受け継がれてゆく。

3. 調査の経過

令和3年度は、1期新庁舎予定地である旧駐車場を対象に調査を実施した。宇治市街遺跡第35次調査にあたる。調査依頼者側による駐車場のアスファルト舗装の除去工事が調査に先立って行われ、引き続き旧倉庫棟の解体工事が実施された。発掘調査は旧倉庫棟解体工事の終盤に開始した。解体工事側と作業ヤードを分けるため、調査予定地の南半を1区として先行して調査を開始した。解体工事完了後に調査区を拡張して2区とし、1・2区を一体として調査を完了させた。排土置場を調査地内で賄えなかったため、調査で発生した排土の大部分は場外へ搬出後、仮置きした。

令和4年度は1期新庁舎予定地のうち、昨年度調査が及んでいない場所を対象に発掘調査を実施した。宇治市街遺跡第36次調査にあたる。一部は旧倉庫棟跡地にあたる部分である。調査地内での反転調査のため、3区での調査を終了後に埋戻しを行い、4区の調査を実施した。調査の終了後、令和3年度の調査で仮置きした排土も含め、全て場内へ埋め戻した。なお、令和3・4年度調査中は、本館と別館が宇治警察署として継続して使用された。

令和7年度の調査は、1期新庁舎が完成・共用開始後に本館・別館が解体されたのを受け、2期新庁舎予定地を対象に実施した。宇治市街遺跡第40次調査にあたる。新庁舎の北西側（旧本館部分）と南西側（旧別館部分）および、旧駐車場の一部が調査対象地となる。なお、調査対象地のうち、府道15号バイパス

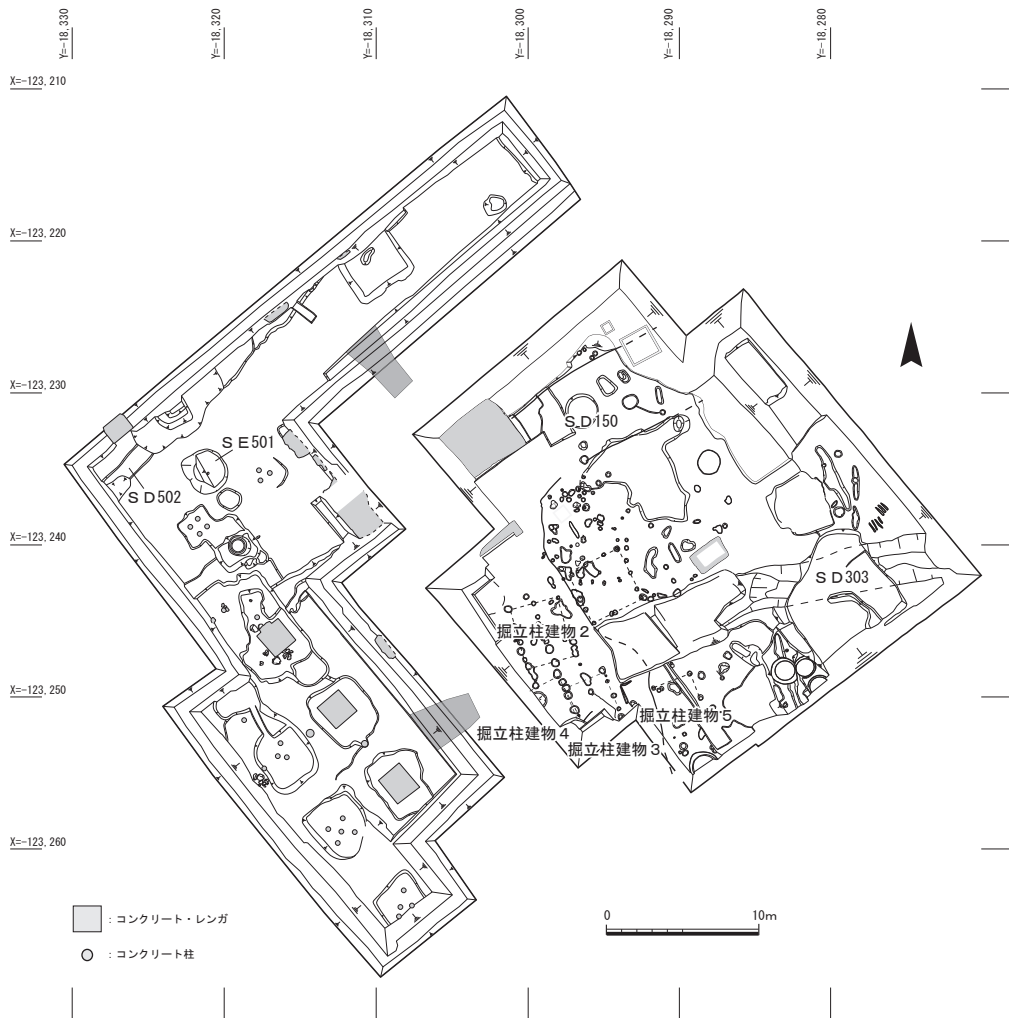


第4図 年度別調査区配置図

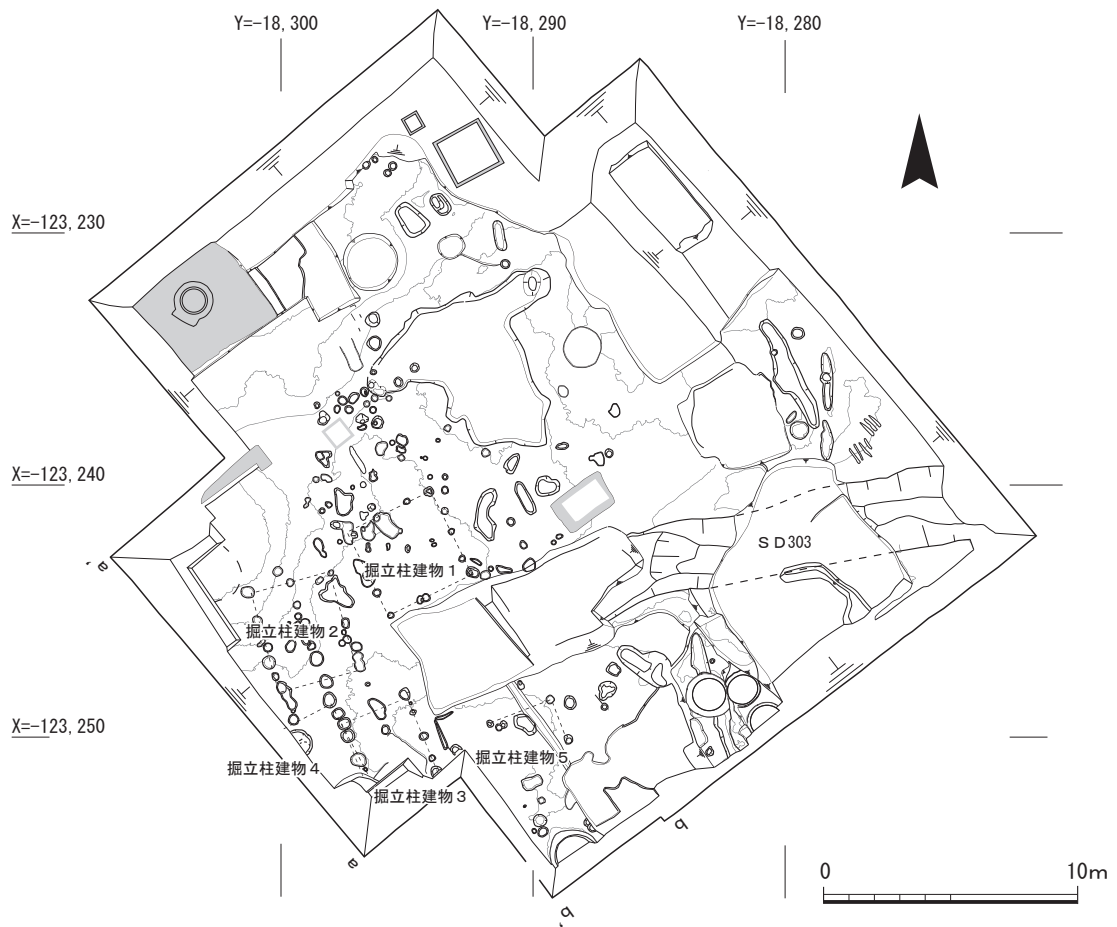
宇治淀線沿いの来庁者用駐車場にかかる部分については、府道249号宇治小倉停車場線沿いに新しい来庁者駐車場を造成した後に拡張する予定で調査を開始したが、調査の結果、拡張予定部分周辺には遺構が確認できず、攪乱があるばかりで、来庁者用駐車場側にも攪乱が及んでいると予測されたことから、協議の結果、調査区の拡張は取りやめ、京都府文化財保護課による立会対応となった。これにともなって、調査面積は、当初予定の990㎡から740㎡に減少することとなった。

調査対象内に新庁舎建物や周囲の万能堀からの安全な控えをとって「L」字形の調査区を設定し、調査区名は「5区」とした。計画段階では、掘削土置場を確保するために調査区を二つに区分して反転調査を行う予定であったが、協議の結果、掘削土を場外へ搬出し処分することで調査期間を短縮することとなった。掘削土には旧庁舎の基礎コンクリートや鉄筋のほか、レンガ等が多く混じっているため、これら産業廃棄物を分別のうえ、残りの土砂を公共残土として搬出・処分した。

また、令和3年度に検出したものの、遺構が調査区外に及ぶため、溝の東肩であるのか、西側に下がる谷の肩部であるのか確定できなかったS D150とした遺構が、調査の過程で、溝の肩である可能性が高まったために、その南側の肩を確認を目的に、旧別館の北東側に、S D150と直



第5図 1～5区平面図(S=1/500)



第6図 1~4区全体平面図(S=1/300)

交する方向の断ち割りを行ったほか、旧本館側でも令和3年度調査区との間の調査が及ばない部分に断ち割りを行った。

発掘調査終了後は埋戻しを実施せず、そのまま用地を引き渡した。

よって、以下の調査成果報告は、1期(1～4区)・2期(5区)の順に行う。なお、運用中の警察署内での発掘調査であるため、いずれの年度においても無人機を使用した空中写真撮影は実施しなかった。

4. 1 ～ 4 区 調 査 の 概 要 (1 期 調 査)

1) 基本層序

1区の地表高は南西壁でみると25.75～25.55mであり、地形に沿って北に下る傾斜をしている。地表から0.2mの厚さは旧駐車場のアスファルト舗装(第1層)と、アスファルト舗装に伴う造成層(第2層)である。造成層下は0.2～0.48mの厚さでレンガ片を含む層(第5～7層)となっている。国土地理院による昭和36年修正・昭和40年発行の2万5千分の1地形図によると、当時の警察署は、現在の北東隣の場所に確認できる。現在の位置には工場の地図記号が示されており、レンガ片はこの工場を解体する際に生じたものであると考えられる。4区の西端部で検出した金属加工に関わると考えられる現代の構造物もこの時代のものであろう。レンガ片を含む層の下位には、にぶい黄褐色ないし褐色を呈する層(第17・20層)が0.4～0.55mの厚さで存在している。細片化した土師器を含むと共に、色調が暗く有機化しているのが特徴である。近世～近代にかけて、宇治市の現在の市街地においても茶の栽培が行われており^(注18)、その頃の茶畑の耕作土層であると考えられる。遺構検出は、この茶畑耕作土層を除去した高さで実施した。調査区南西辺においては、SD150の埋土にあたる第26層が広く展開しており、この第26層上面での遺構検出となった。その他の場所では地山面での遺構検出となった。地山は淡黄色系の細粒砂である。折居川による扇状地形成に伴って、宇治丘陵の大阪層群が運搬され再堆積したものである。1区の南東壁面では、地山の検出高は標高25.45m付近である。

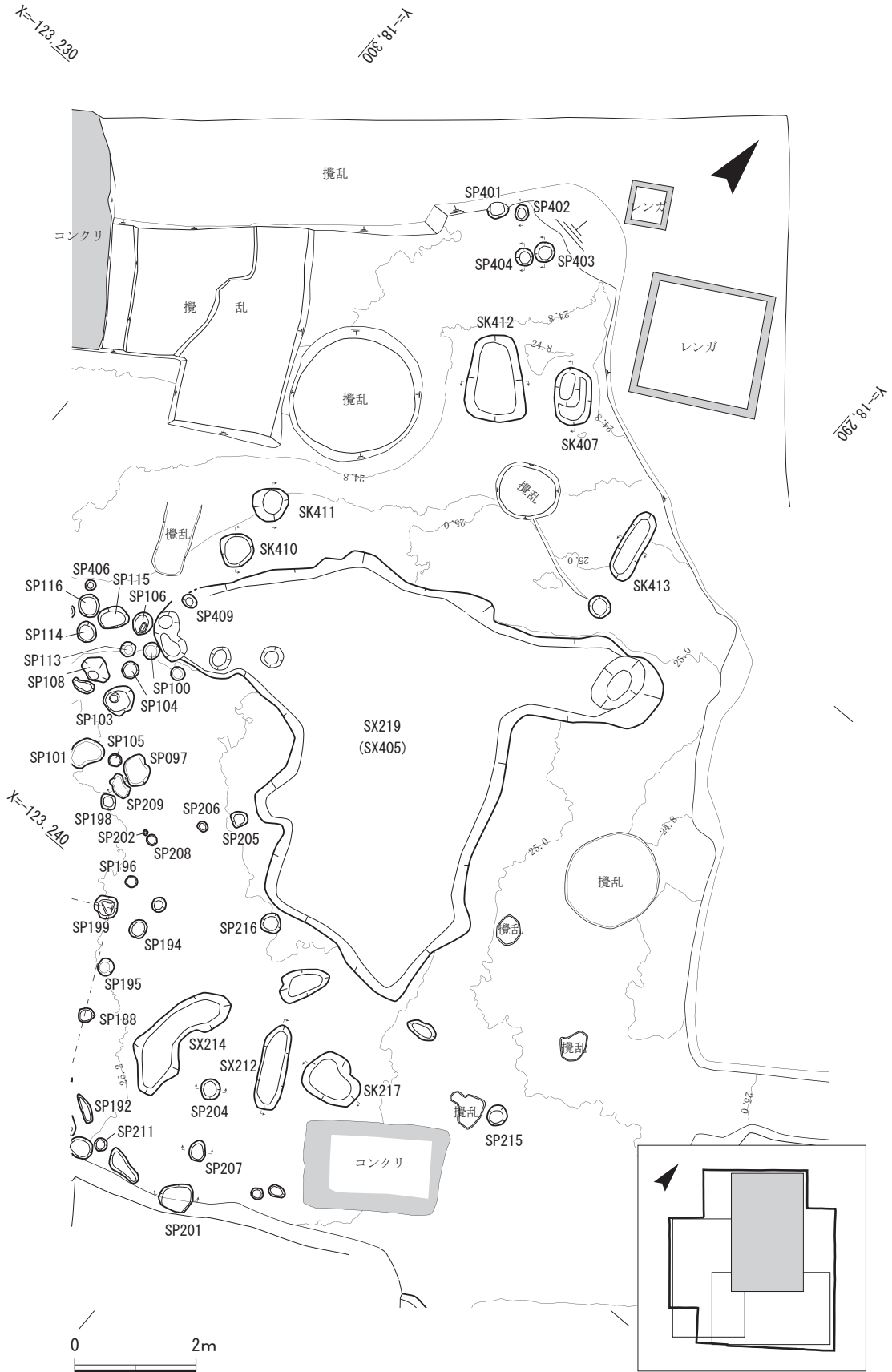
2) 検出遺構

調査区の南西部分において、多数のピットを検出した。ピットは大きさ0.2～0.5m、深さ0.2m程度で円形ものが多く、一部では列状に密集して検出された。ピットの底面には根石と考えられる平石が据えられる場合もあり、多くは掘立柱建物の柱穴であると考えられる。このうち、その配置から5棟の掘立柱建物跡を復元できた。

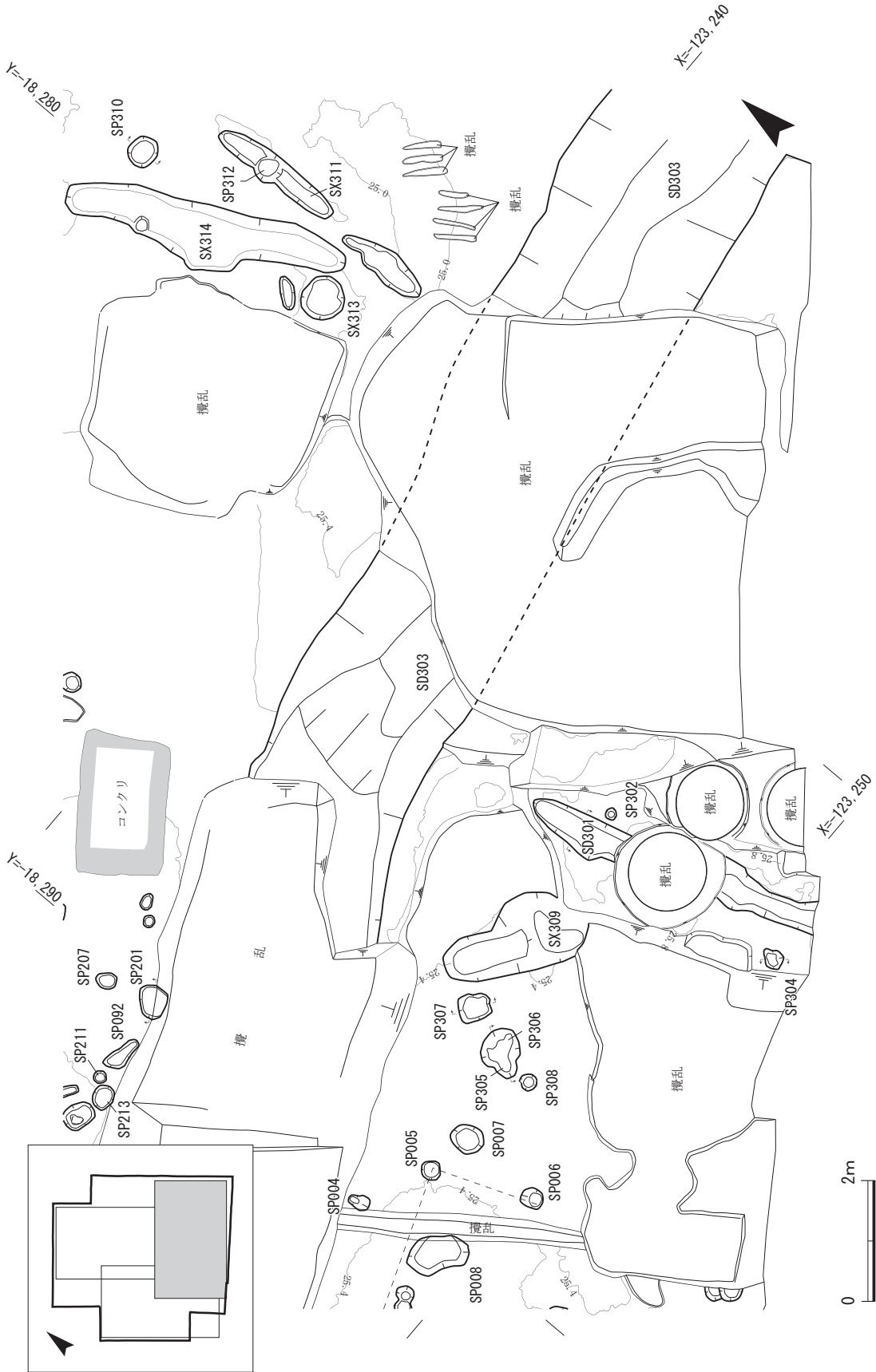
掘立柱建物 1 1区で検出した3間×4間の掘立柱建物である。北東隅から時計回りにSP099・SP095・SP088・SP071・SP075・SP070・SP067・SP048・SP072・SP082・SP077・SP087で構成される。規模は3.6m四方で、柱間は東西4尺、南北3尺に復元されるが柱間は等間ではない。また東側で柱通りが悪い。方位は北で112°西へ振れる。SP070・075・099の底部からは径0.1～0.2mの平らな石が出土しており、一部柱穴のみに根石を使用する建物であったとみられる。



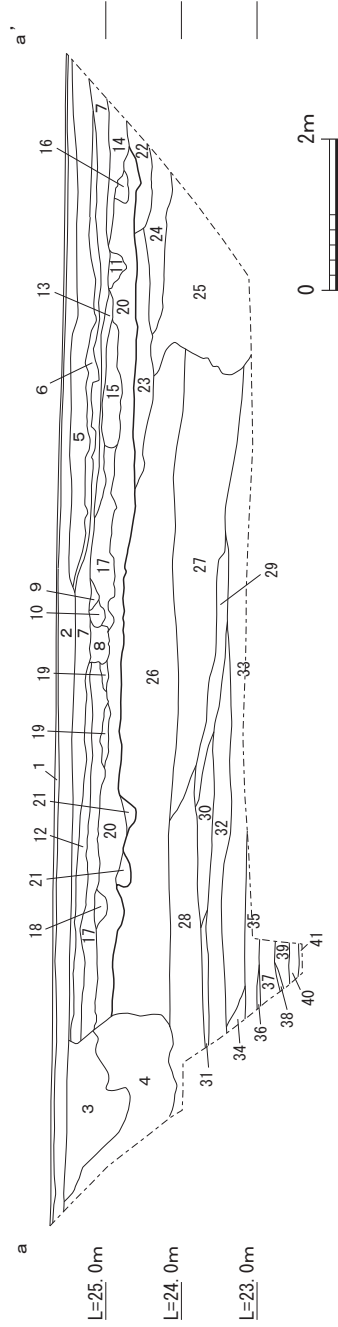
第7図 1～4区平面図1 (S=1/100)



第8図 1～4区平面図2 (S=1/100)

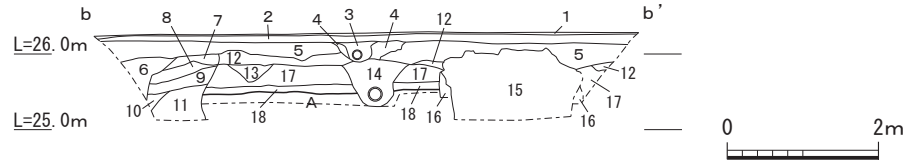


第9図 1～4区平面図3 (S=1/100)



- | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 褐灰色 (7.5YR6/1) 中粒砂<アスファルト舗装の整地> 造成層>
 3. 黒褐色 (10YR3/1) 径0.5cm大の炭化物が充満する 径30cm大のコンクリートガラが混じる
 <攪乱>
 4. 褐灰色 (10YR6/1) 中粒砂<攪乱>
 5. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂 径2~10cm大の礫・レンガ片を非常に多く含む 径0.5cm大の炭化物を多く含む
 6. 淡黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂混じり細粒砂 いわゆる砂層<整地か>
 7. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 径0.5~1cm大の礫・レンガ片を少量含む
 8. 黄褐色 (10YR8/6) 極細粒砂
 9. 淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂
 10. 灰白色 (2.5Y8/2) 極細粒砂
 11. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 径1cm大の土器片をごく少量含む
 12. 浅黄褐色 (10YR8/4) 細粒砂 径0.5~1cm大の円礫をごく少量含む
 13. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂 径0.5cm大の炭化物をごく少量含む
 14. 褐色 (7.5YR4/3) 細粒砂 径0.5cm大の土器片を少量含む
 15. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂 径10cm大のコンクリート・レンガ片を非常に多く含む
 16. 8と同じ
 17. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細粒砂 径0.5~1cm大の円礫を少量含む径0.5cm大の土器細片をごく少量含む<茶畑耕作土>
 18. 灰黄褐色 (10Y6/2) 極細粒砂
 19. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
 20. 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂 径1cm大の円礫を少量含む 径0.5cm大の土器細片を多く含む
 <茶畑耕作土></p> | <p>21. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂<ビット埋土>
 22. 淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂<SE151>
 23. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 径1cm大の円礫を多く含む径0.5cm大の土器細片を多く含む<SE151>
 24. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂<SE151>
 25. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂<SE151>
 26. にぶい黄色 (10YR7/2) 細粒砂混じり極細粒砂
 27. 淡黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂混じり細粒砂
 28. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 中粒砂混じり細粒砂
 29. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 径1cm大の円礫を少量含む
 30. 浅黄褐色 (10YR8/4) 細粒砂
 31. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細粒砂
 32. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 礫 径1~3cm大の円礫で構成される層
 33. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂
 34. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 中粒砂混じり細粒砂
 35. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 中粒砂混じり細粒砂 径1cm大の垂円礫を多く含む 浅黄褐色 (10YR8/4) が径1cm大の斑状に3%混じる
 36. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 礫混じり細粒砂 径1cm大の垂角礫を多く含む 浅黄褐色 (10YR8/4) が1cmの斑状に3%混じる
 37. 黄灰色 (2.5Y4/1) 礫 径1~3cm大の円礫で構成される層
 38. 淡黄色 (2.5Y8/3) 均質な極細粒砂 粘質
 39. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂 色調が暗く有機化するか
 40. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂混じり極細粒砂 粘質
 41. 黒褐色 (2.5Y3/1) 礫混じり細粒砂 径1cm大の円礫を多く含む</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第10図 南西壁土層断面図(S=1/100)



- | | |
|------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR6/4) 中粒砂<アスファルト舗装の整地> | 8. 浅黄橙色 (10YR8/3) 細粒砂<攪乱> |
| 2. 淡黄色 (2.5Y8/4) 粗粒砂 径0.5~3cm大の円礫を非常に多く含む<アスファルト舗装の整地> | 9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂<攪乱> |
| 3. 褐灰色 (7.5YR5/1) 細粒砂 径0.5~3cm大の円礫を少量含む<土管掘形> | 10. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂<攪乱> |
| 4. 浅黄橙色 (10YR8/3) 細粒砂<土管掘形> | 11. にぶい橙色 (7.5YR7/4) 中粒砂 |
| 5. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 径1cm大の円礫・垂角礫を非常に多く含む 場所によりレンガが混じる 非常に硬い<硬化剤による改良> | 12. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 細粒砂 |
| 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂 径3cm大の垂角礫を多く含む<攪乱> | 13. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂 径0.5cm大の土器細片を非常に多く含む |
| 7. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂<攪乱> | 14. 褐灰色 (7.5YR6/1) 細粒砂 径0.5~2cm大の垂円礫を少量含む<土管掘形> |
| | 15. 黒色 (10YR2/1) 径0.5cm大の炭が詰まった層<攪乱、井戸か> |
| | 16. 淡黄色 (2.5Y8/4) 極細粒砂<攪乱、井戸裏込> |

第11図 南東壁土層断面図(S=1/100)

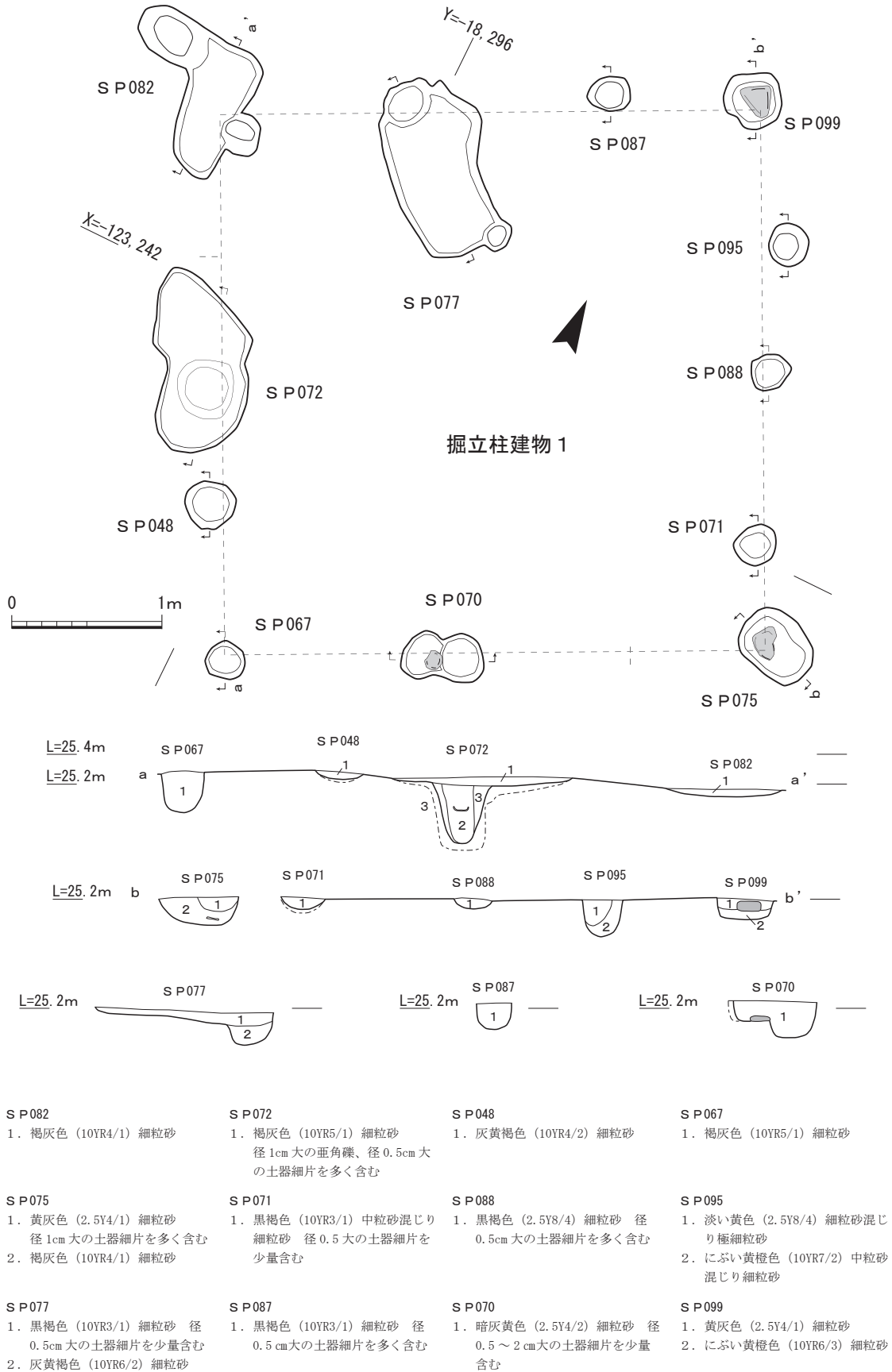
掘立柱建物2 1区で検出した2間×3間の掘立柱建物である。北東隅から時計回りにS P 064・S X060・S P036・S P033・S P032・S P043・S P045・S P052・S P054・S P057の柱穴で構成される。3.3m×3.9mの大きさで、南北棟となる。柱間は東西が5.5尺の等間隔。南北は等間とならず、北から4尺-5尺-4尺となる。方位は北で106°西へ振れる。

掘立柱建物3 1区で検出した2間×3間以上の掘立柱建物で、北半部のみを検出した。東の柱筋は北からS P027・S P021・S P081、西柱筋はS P025・S P018で構成される。規模は2.7m×3.2m以上で、南北棟となる。柱間は東西が4.5尺である。南北は等間とならず、北から6尺と5尺である。方位は北で108°西へ振れる。

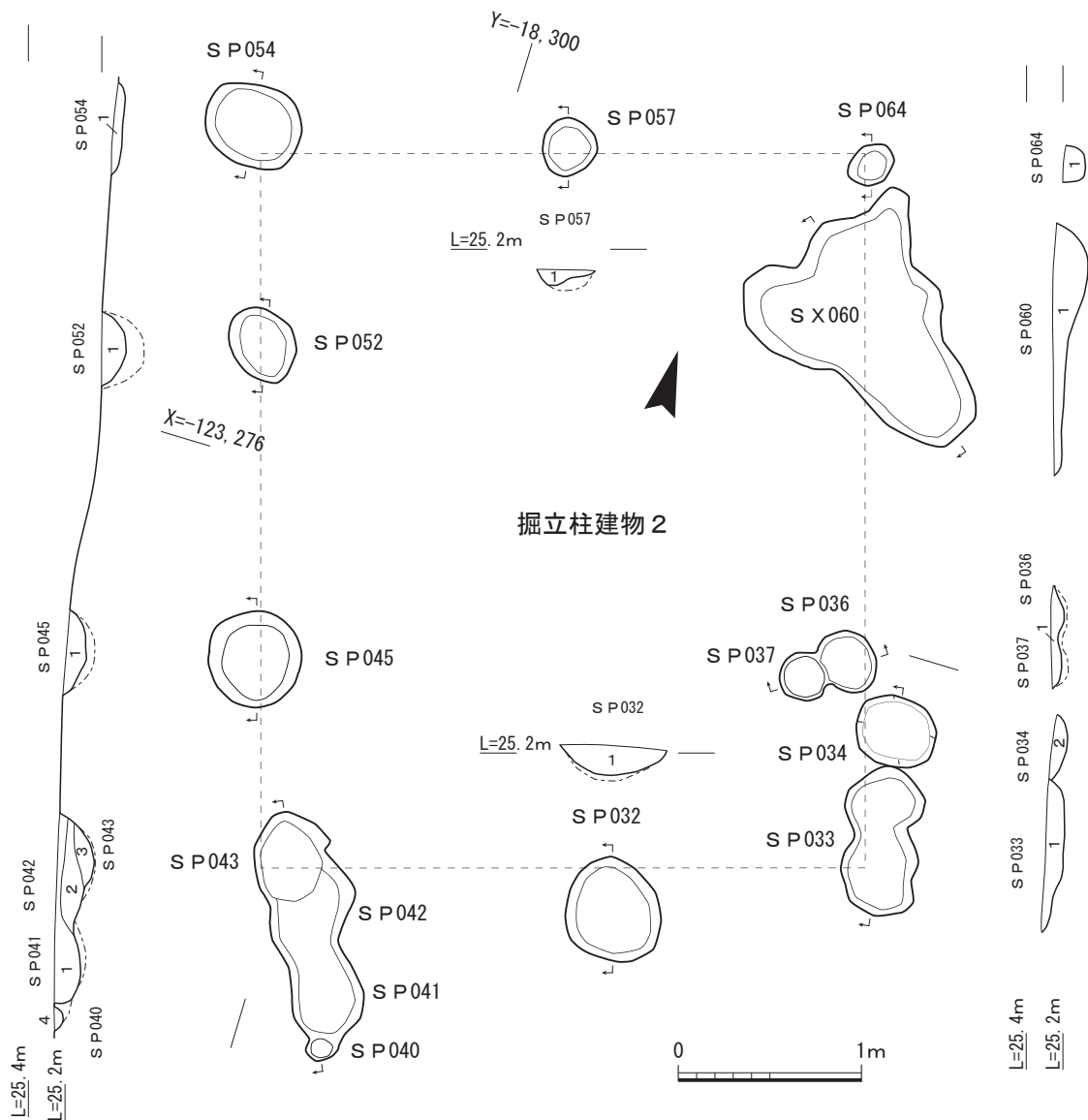
掘立柱建物4 1区において北東隅のみを検出した掘立柱建物である。S P038・S P026・S P24で構成され、それぞれ北辺と東辺の1間分にあたる。東の柱筋は柱穴の切り合いはないものの、掘立柱建物3と重複する。柱間は5尺で等間である。方位は北で118°西へ振れる。

掘立柱建物5 1区において北東隅のみを検出した掘立柱建物である。S P009・S P005・S P006で構成され、北辺および東辺の各1間分にあたる。方位は北で110°西へ振れる。

東西溝S D303 3区で検出した東西方向の溝である。方位は東で9°北へ振れる。検出部分の中央部は攪乱で大きく削平されている。また溝の西側も大きく攪乱を受けておりS D150と交差する状況を確認できないが、S D150の埋土上で平面的にS D303は検出されず、調査区南西壁でもS D303は確認されなかった。ただし出土遺物から13世紀後半遺構の土器を含むことから、S D150(S D420)や掘立柱建物よりもあとに埋没したものと考えられる。S D303は幅1.3mで深さは0.72~0.46mである。検出部は中央に攪乱を受けて東西に分かれているが、どちらの部分でも溝底の東側が0.3m低くなる段差が設けられている。現地は北側が明瞭に低くなっているのに加え、東側にも緩く傾斜している。S D303の埋土には流水の痕跡は認められなかったが、このような段差は雨水などを東側へ流して処理しようとする意図が伺える。埋土の状況は単純な複数層で構成されており、ブロックが認められる点や土器細片が層中の上下に満遍なく混じっている点から、人為的に埋められたものと判断される。



第12図 掘立柱建物 1 実測図(S=1/40)



SP054

1. 褐灰色 (10YR5/1) 粗粒砂混じり細粒砂
径 0.5cm 大の土器細片を多く含む

SP052

1. 黒色 (10YR3/1) 細粒砂
径 0.5cm 大の土器細片を多く含む

SP045

1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂
径 0.5cm 大の土器細片を多く含む

SP040 ~ 043

1. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 <SP141>
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂 <SP142>
3. 褐灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂 やや粘質 <SP143>
4. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 <SP140>

SP057

1. 黄灰色 (2.5Y5/1) 中粒砂混じり細粒砂
径 0.5cm 大の土器細片を多く含む

SP032

1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂
径 0.5cm 大の礫を少量含む

SP064

1. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂

SX060

1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂
径 0.5 ~ 2 cm 大の円礫、径 0.5cm 大の土器細片を多く含む。

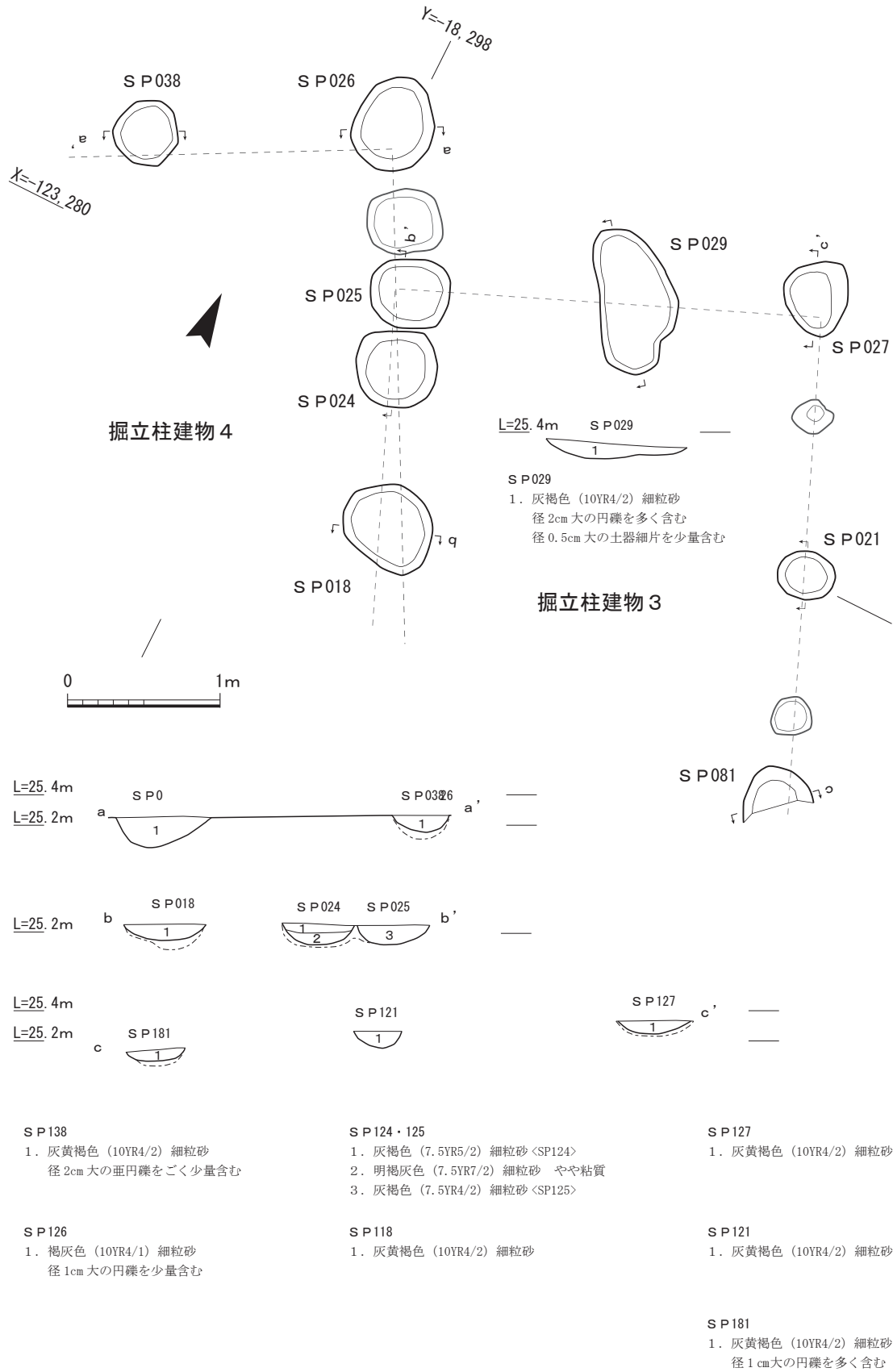
SP036・037

1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂
径 2cm 大の亜円礫をごく少量含む

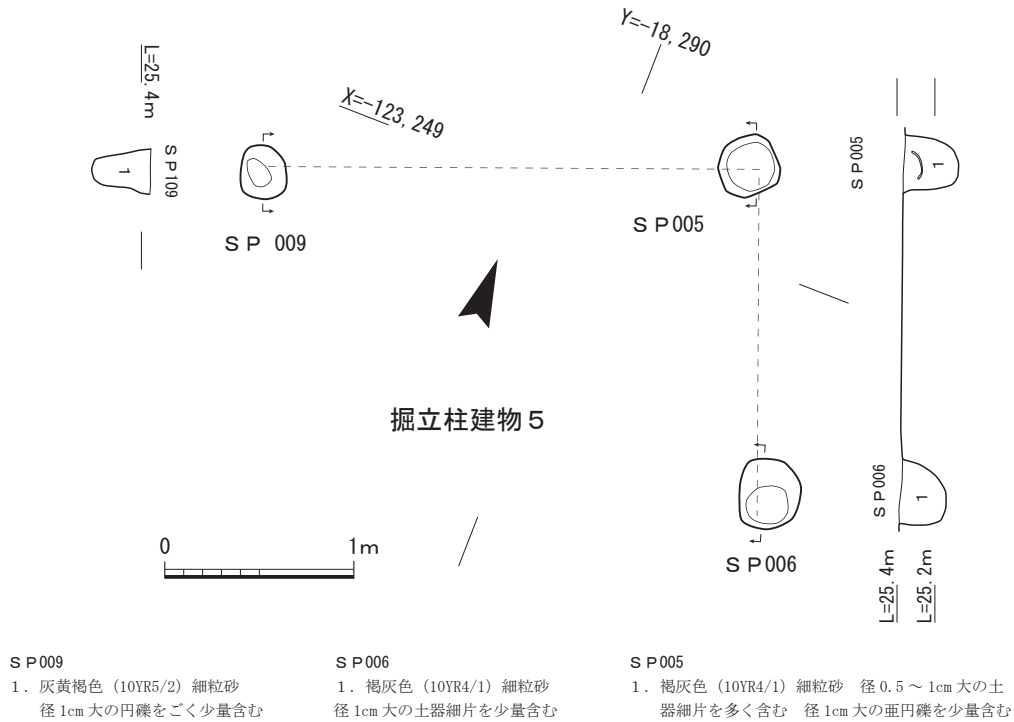
SP033・034

1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂 <SP133>
2. にぶい黄褐色 (10YR7/2) <SP134>

第13図 掘立柱建物 2 実測図 (S=1/40)



第14図 掘立柱建物 3・4 実測図 (S=1/40)

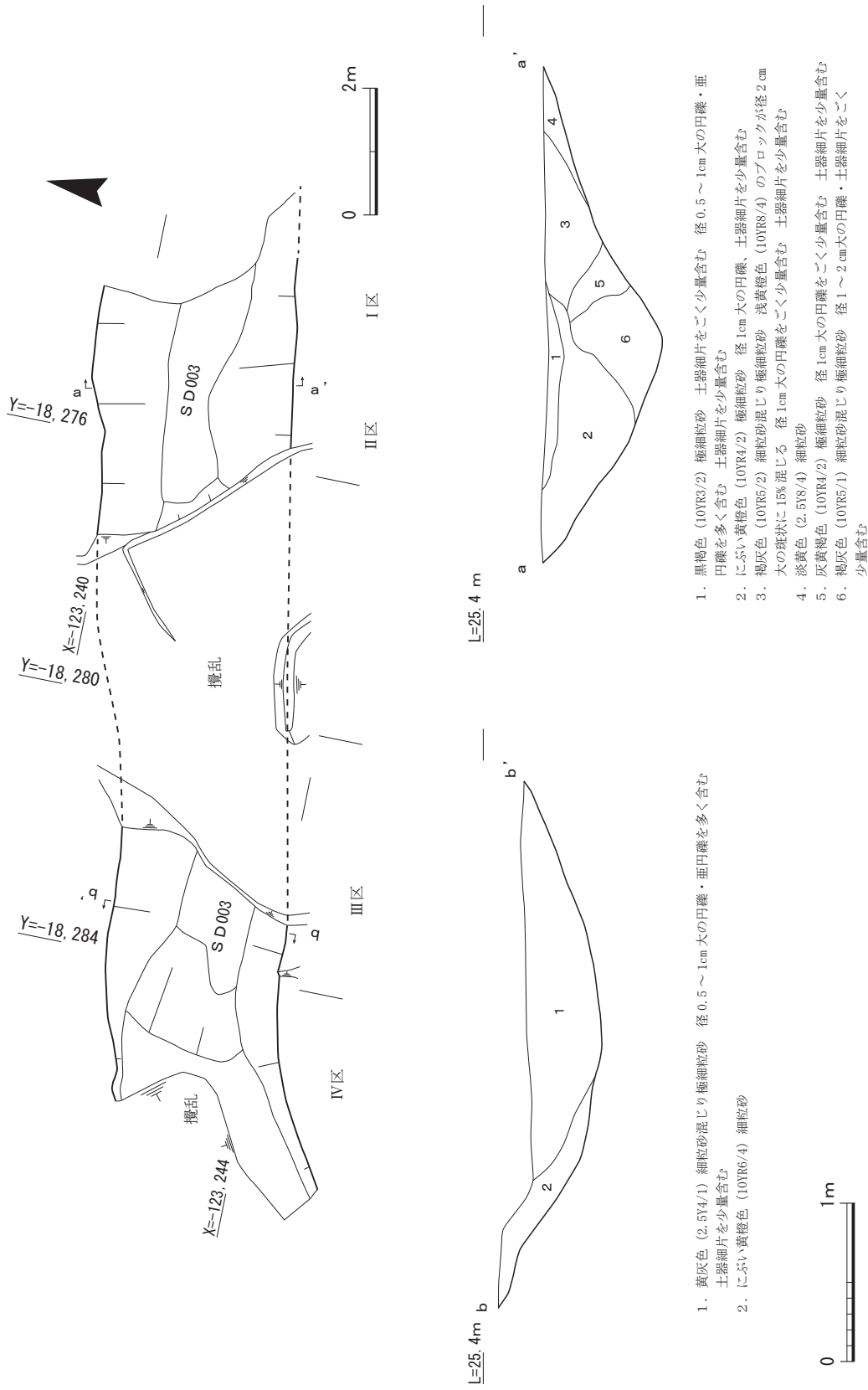


第15図 掘立柱建物5実測図(S=1/40)

区画溝SD150(SD420)

1区および4区で検出したL字形の溝である。1区で検出した南北部分および、調査時にSD420とした4区で検出した東西部分で構成されるが、それぞれ調査次数が異なるため、図上合成でL字形の溝と判明した。当初は、1区の南北部分が調査地南方にある折居川の谷地形の延長線上に位置している点から、自然の谷地形と判断していた。しかし、その後5区の調査において、明瞭に1区の南北部分や4区の東西部分に続くものと判断される溝が検出されなかったため、L字の溝であると確定した。その平面形から区画溝と考えられる。南北部分は幅7m以上で、西肩は5区との間の部分に位置すると想定される。1区の南北部分は、安全上の配慮から掘削深度が2.5mを超えた段階で調査を停止した。調査区南西隅の壁面で断面を確認すると、最初は地山面から掘り込まれている。その後、南東側から供給された複数の土砂の層があり、各層約20cmの厚さがある。これらの合計は1.25m以上の厚さとなる。この間、堆積が停止する時期が複数あったと想定され、一時的に表土となったと考えられる有機化層が5層確認される。第11・13層は、層中の全体に礫が万遍なく認められる、いわゆる淘汰の悪い層である。溝が自然に埋まり切らずに、窪地状になっていた部分を人為的に埋めた層と考えられる。また第11層は、第12層上面を掘り込んでいたため、溝の掘り直しも想定される。第11層による埋戻し層は、地山面からも0.4m高い標高まで存在しており、溝の埋戻しだけでなく調査区南西隅部分の整地を兼ねていたものと考えられる。

4区にある区画溝の東西部分(SD420)は幅5.45m、深さ2.18mとなっており、南北部分からも幅が狭い。溝の断面は放物線状を呈しており、一時的に表土となったと考えられる有機層が溝底



第16図 東西溝 S D 303 平面図・断面図 (S = 1/40)



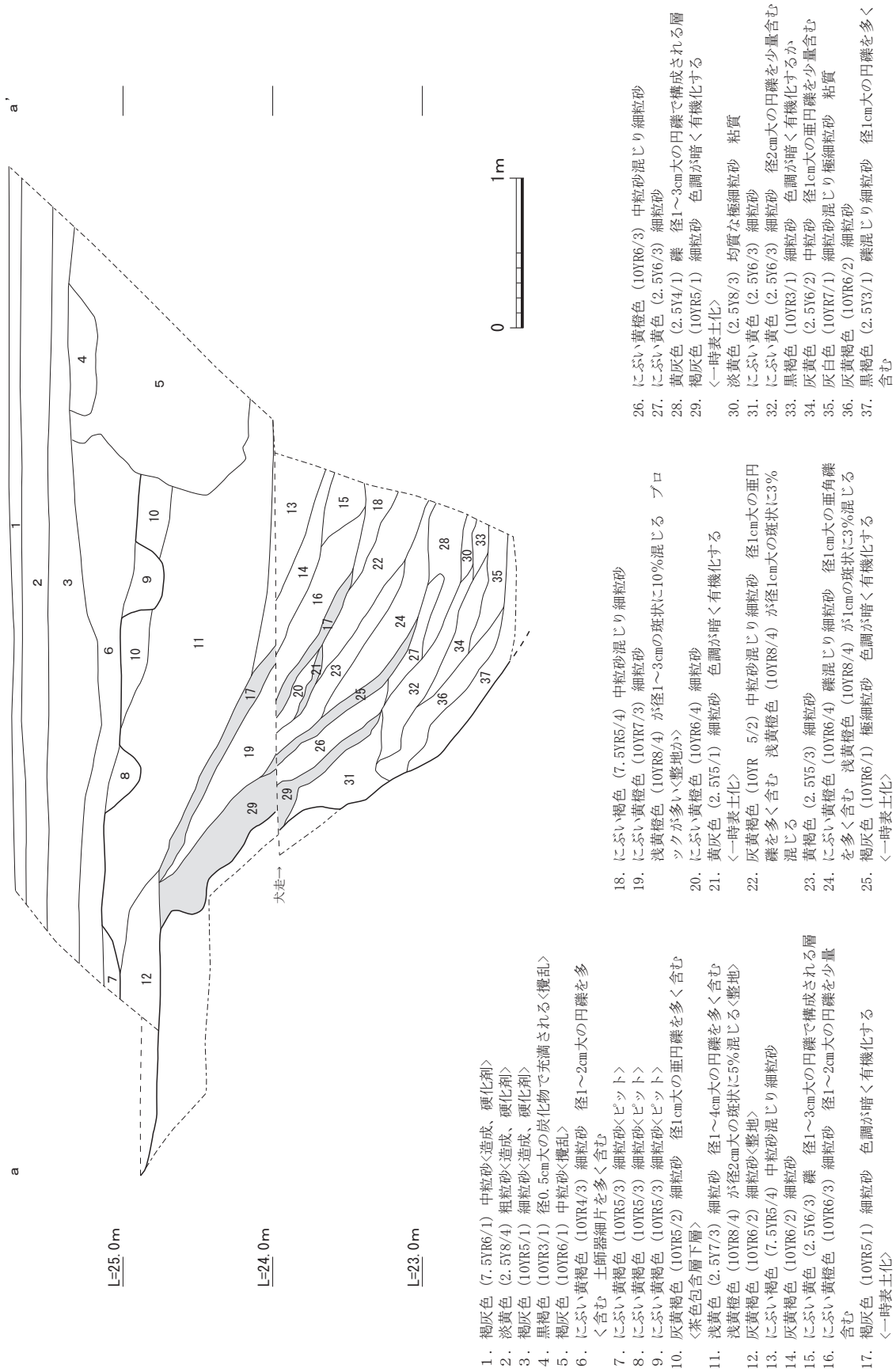
第17図 区画溝 S D150(S D420)平面図(S =1/200)

面の全体に認められる点が1区の南北部と異なっている。埋土の各層は北西下がりになっており、南東側から土砂の供給があったものと想定されるが、1区の南北部に比べて傾斜が緩く各層が厚い。特に層の厚さが0.3m程度以上ある第2～12層については、人為的に埋めた層の可能性はある。

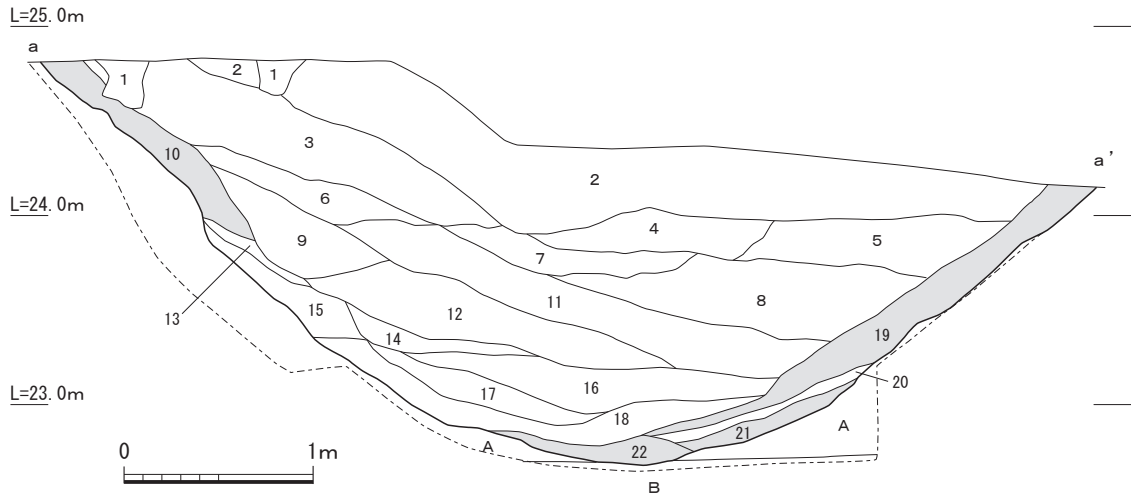
その他 現代コンクリート基礎の上に耐火煉瓦を径1.2mの円形に並べ、耐火煉瓦の外側は鉄筋コンクリートで補強する。高さ1.1mが残存しており、警察署建設以前にあった工場に関わる炉と考えられる。

3) 小結

1期調査である1～4区では、掘立柱建物跡を含む柱穴群や複数の溝を検出した。先述のとおり、これらは時間差のある遺構であり、区画溝 S D150・420が埋まったのちに、東西溝 S D303や掘立柱建物跡群が営まれたと考えられる。さらに建物跡の方位は、掘立柱建物1・掘立柱建物



第18図 区画溝SD150断面図 (S=1/40)



- | | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰白色 (2.5Y8/2) 極細粒砂 いわゆる微砂層。部分的にラミナ構造がみられる (地震痕跡か) 2. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂混じり極細粒砂 径1~4cm大の円礫が多く混じる 黄色 (5Y8/6) が径1cm大の斑状に70%混じる。 3. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) 細粒砂混じり極細粒砂 径1~4cm大の円礫がやや多く混じる 土器細片が少量混じる 4. 灰黄褐色 (10YR6/2) 極細粒砂混じり細粒砂 径1~3cm大の円礫が少量混じる 5. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂混じり極細粒砂 径1~5cm大の円礫が少量混じる 6. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 細粒砂混じり極細粒砂 径3~4cm大の亜円礫が少量混じる 7. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂混じり極細粒砂 黄色 (5Y8/6) が径1cm大の斑状に3%混じる 8. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細粒砂混じり極細粒砂 径1~3cm大の円礫が少量混じる 9. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂 鉄分の沈着である褐色 (7.5YR4/4) が径2cm大の斑状に20%混じる 10. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 有機化し色調が暗い | <ol style="list-style-type: none"> 11. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じり極細粒砂 径2~5cm大の円礫が非常に多く混じる 12. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂混じり極細粒砂 径2~5cm大の円礫が少量混じる 13. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂 14. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂 均質 (水の流れを示す層) 15. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じり極細粒砂 16. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂混じり極細粒砂 径4cm大の円礫をごく少量含む 17. 淡黄色 (2.5Y8/4) シルト混じり極細粒砂 18. 褐灰色 (10YR8/1) 均質な細粒砂<水流の痕跡か> 19. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じり極細粒砂 色調が暗く有機化する 20. 淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂 径2cm大の円礫を少量含む 21. 褐灰色 (10YR4/1) 極細粒砂 やや粘質 色調が暗く有機化する 22. 黄灰色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 やや粘質 色調が暗く有機化する A. 黄橙色 (10YR8/6) 細粒砂混じり極細粒砂 締りが強い (大阪層群の再堆積層) B. 灰白色 (7.5Y8/2) シルト 均質で粘質 (いわゆる粘質土層、大阪層群のものか) |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

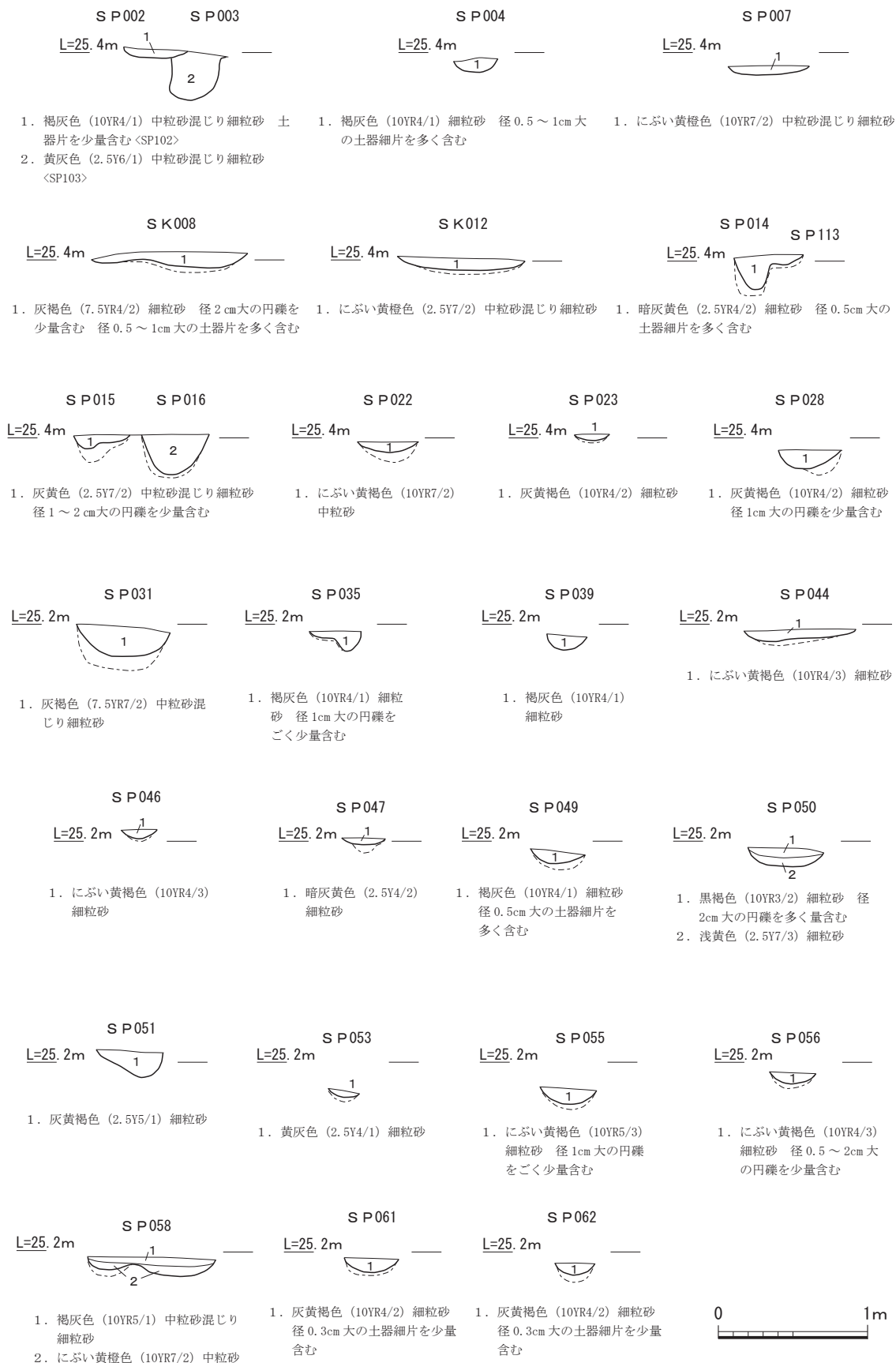
第19図 区画溝 S D 420断面図 (S=1/40)

3~5と掘立柱建物2で大きく異なっているのに加え、掘立柱建物3と掘立柱建物4は柱穴に切り合いは無いが近接しているためそれぞれの建物の時期差と考えられる。すなわち掘立柱建物跡についても最小で3時期の変遷が想定できる。(加藤雅士)

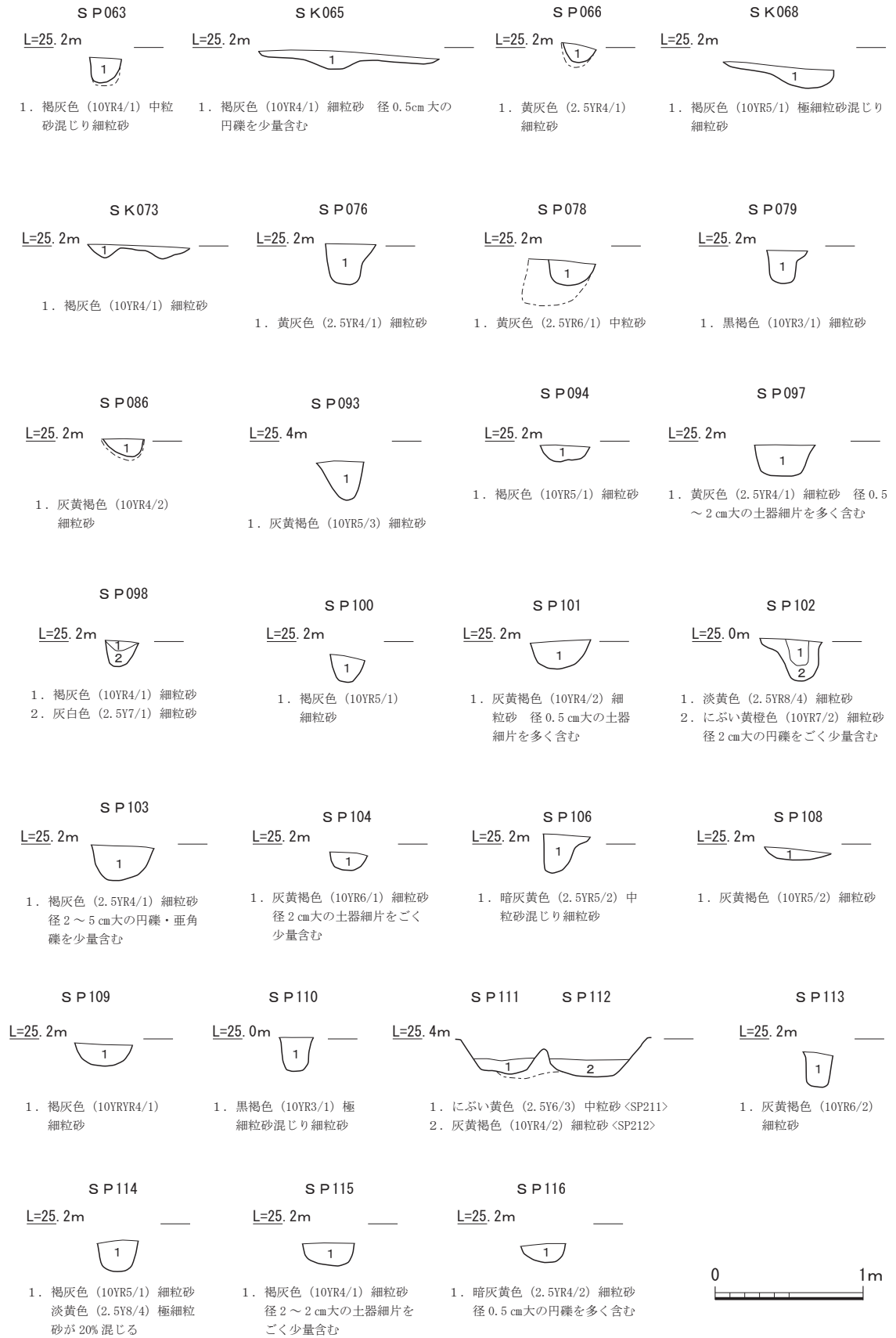
5.5 区調査の概要 (2期調査)

1) 基本層序

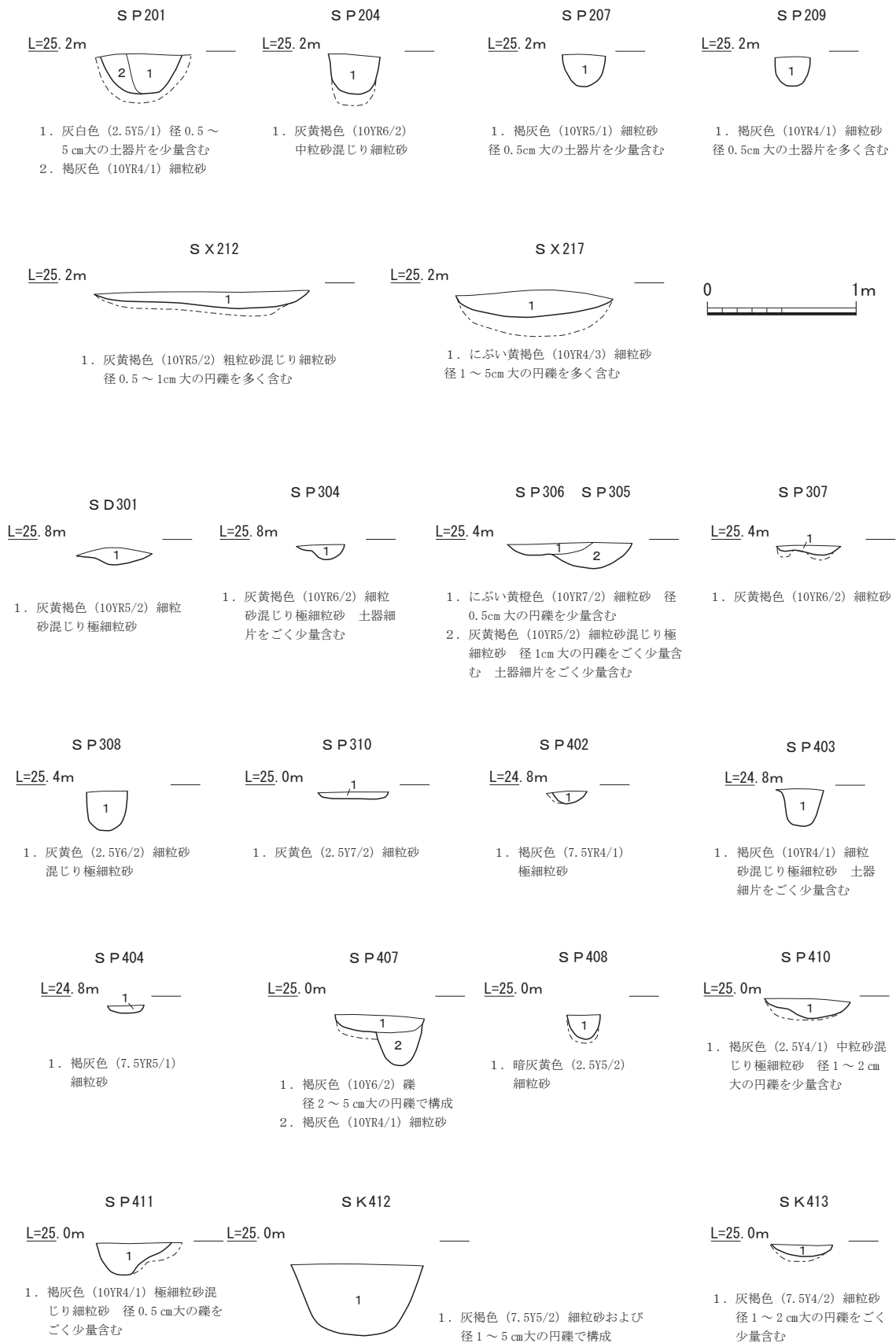
調査前は、旧本館・別館の基礎を、遺構面に影響のない高さまで解体した後、埋め戻された状態であった。重機掘削は、旧別館側の南東端 (調査前標高約26.0m) から開始した。上部は旧別館解体時の埋め戻し土で、コンクリートやレンガ・鉄筋・塩ビ管などを多く含んでいた (第24図第1・2層)。この下には、近代以降の整地土とみられる砂質土 (第24図4・5・11層) があった。令和3年度に行った1区の調査で遺構が検出されていた標高約25.0~25.2mの (第24図6層) 上面で遺構の存否を確認したが、遺構は確認されなかった。さらに掘り下げ、標高約24.6~24.8mまで掘削したところで、地山とみられる固く締まった砂質土 (第24図9層) を検出し、その上面で旧別館の正方形のコンクリート基礎や円柱のコンクリート柱を確認した。また、旧別館の北西部では、東から続く砂質土 (第26図2層=第24図第6層) の上面でレンガ積み建物の基礎やコンクリー



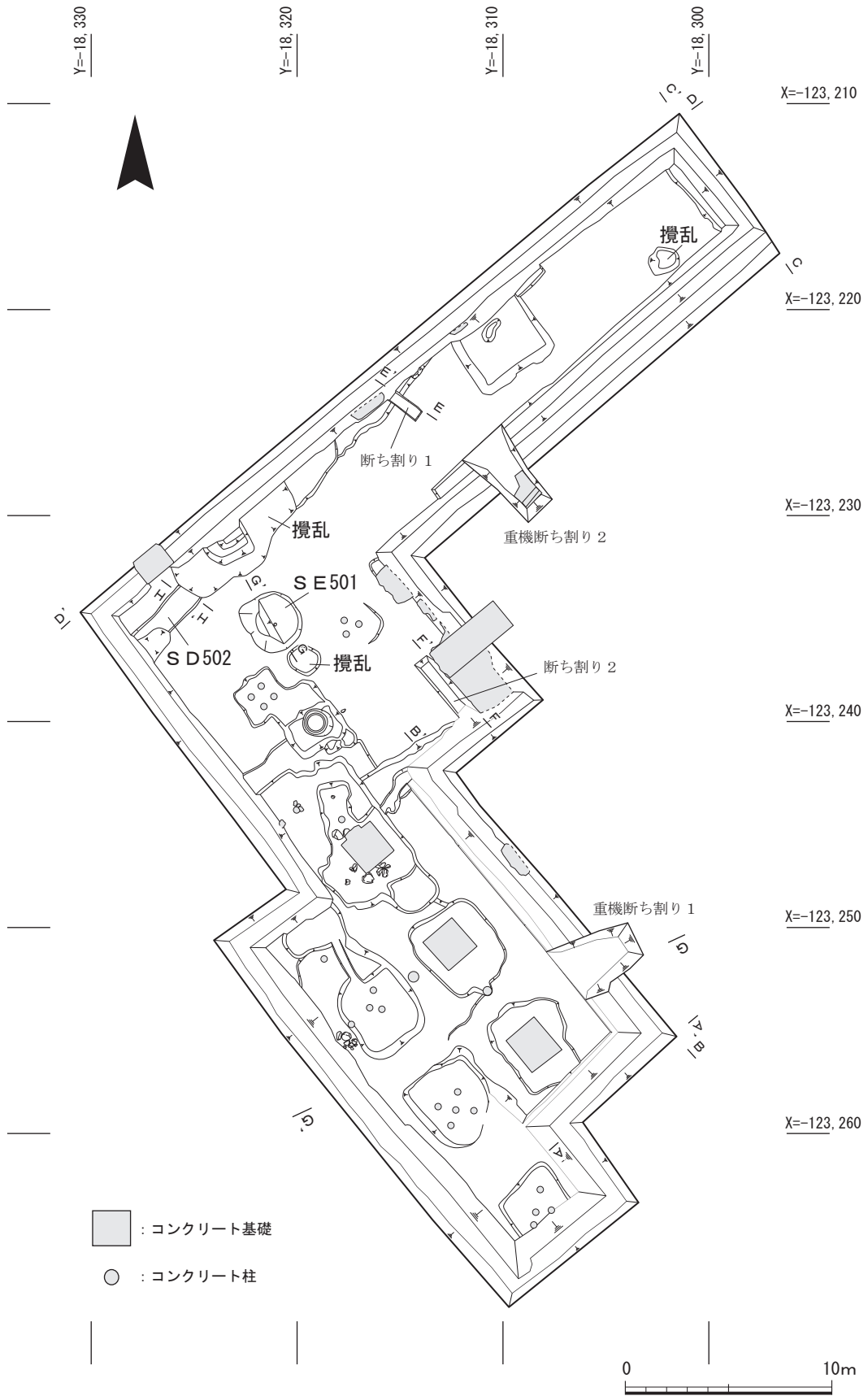
第20図 1~4区ピット断面図1 (S=1/40)



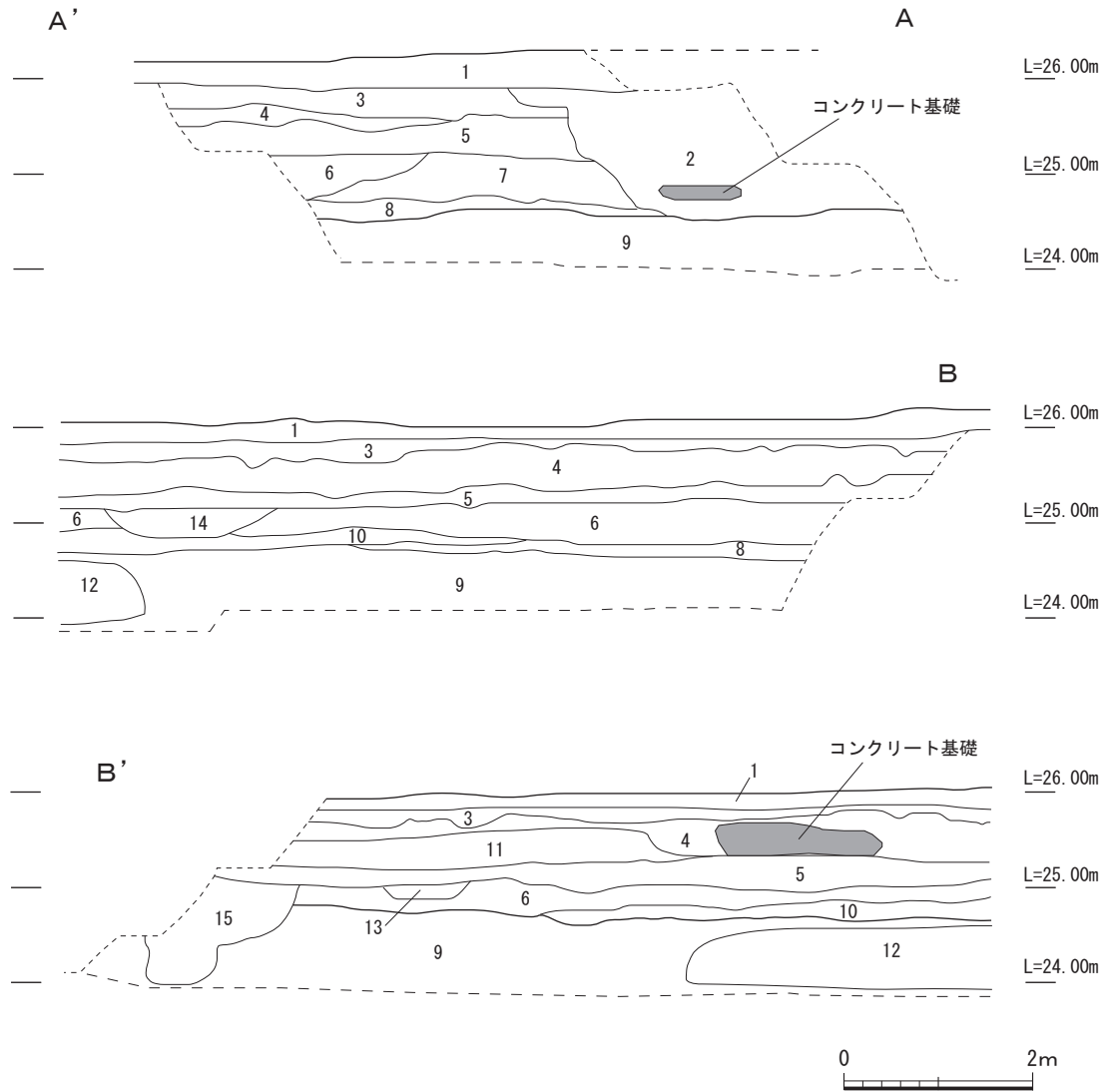
第21図 1~4区ピット断面図2 (S=1/40)



第22図 1~4区ピット断面図3 (S=1/40)

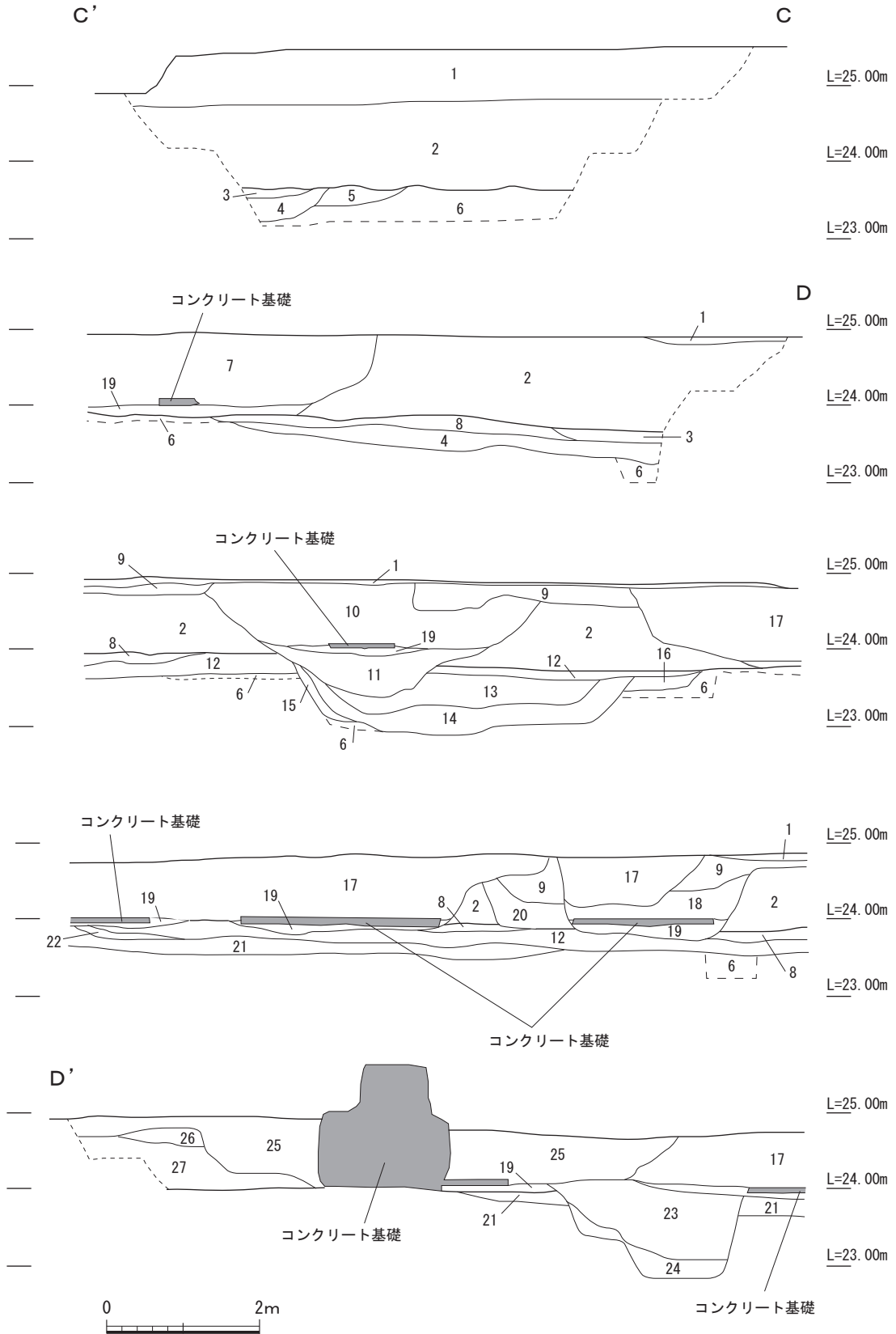


第23図 5区平面図(S=1/300)



1. 灰白色 (10YR7/1) 砂礫土 (庁舎解体埋め戻し土)
2. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂礫土 (解体時攪乱)
3. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 (3~5 cm大の礫を含む)
4. 褐灰色 (10YR6/1) 砂質土 (3~5 cm大の礫を含む)
5. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土
6. 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土 (5~10 cm大の礫を多く含む)
7. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土 (1~5 cm大の礫を多く含む)
8. 明黄褐色 (10YR7/6) 粗砂
9. 明黄褐色 (10YR7/6) 細砂 (薄い砂層と粘土層の互層、水平に堆積)
10. 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土 (1~5 cm大の礫を多く含む)
11. 褐灰色 (10YR7/1) 砂質土 (コンクリートやレンガの破片、塩ビ管理設あり)
12. 明黄褐色 (10YR7/6) 細砂混じり砂礫 (1~5 cm大の礫) 土石流跡
13. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 (鉄管埋設)
14. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質土 (攪乱)
15. 灰白色 (2.5YR7/1) 砂礫 (1~5 cm大の礫が充填、溝か)

第24図 旧別館部分 東壁・南壁土層断面図(S=1/80)

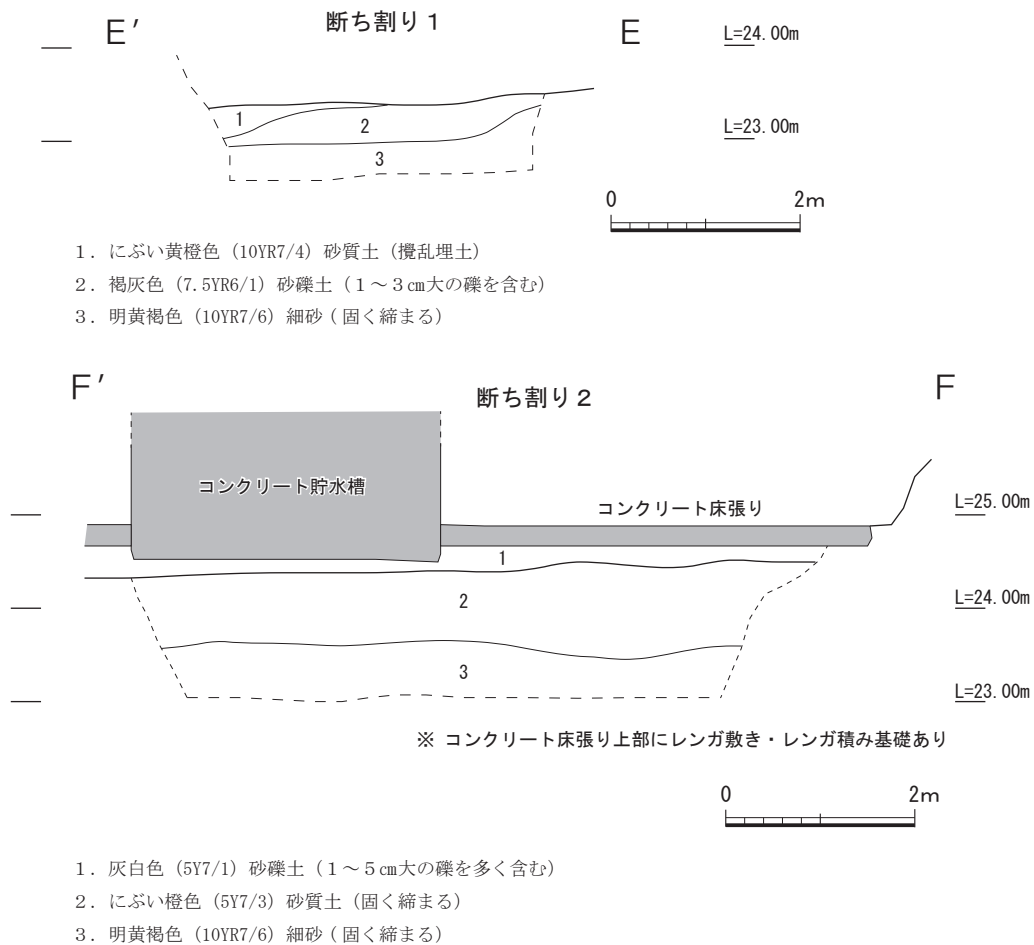


1. 暗赤色 (10YR4/1) 砂質土 (解体後埋め戻し盛土、コンクリート片・レンガ片を多く含む)
2. 暗赤色 (7.5YR4/1) 砂質土 (解体後埋め戻し土、大型のコンクリート片・レンガ片を多く含む)
3. 灰黄褐色 (10YR5/1) 細砂
4. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 細砂
5. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂

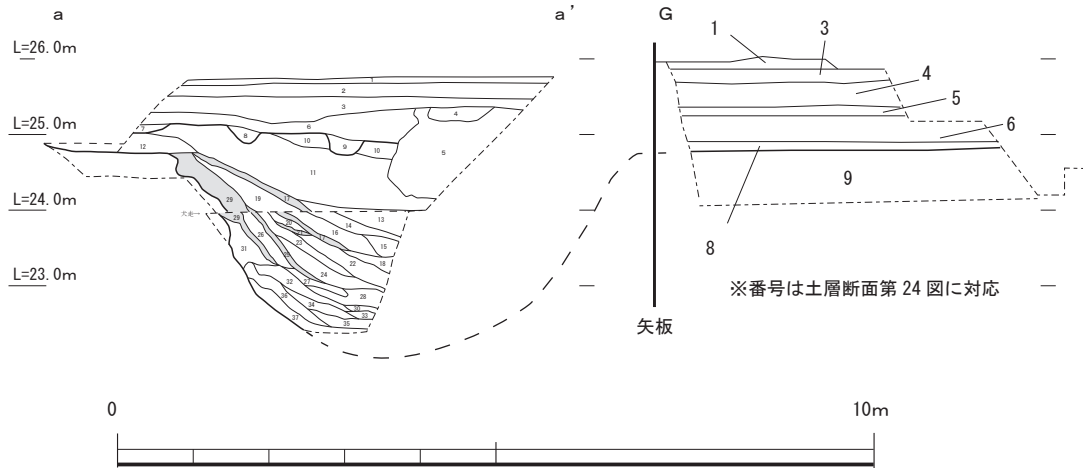
(次ページに続く)

6. 明黄褐色 (10YR7/6) 細砂 (固く締まる)
7. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
8. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (3 cm大の礫を含む、攪乱埋土)
9. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂
10. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 (大型のコンクリート片やレンガ片を多く含む)
11. 褐灰色 (10YR5/1) 砂礫土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
12. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂質土 (攪乱埋土)
13. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (近代の土器片、ガラス片などを多く含む)
14. にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 砂質土 (焼け土、近代の土器片、ガラス片などを多く含む)
15. 赤灰色 (2.5YR5/1) 砂質土
16. 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂礫土 (3～10 cm大の礫が詰まる)
17. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
18. 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
19. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
20. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
21. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 (1～3 cm大の礫を含み固く締まる)
22. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土 (SD02埋土か)
23. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を含む)
24. 暗灰色 (2.5Y5/2) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を含む)
25. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 (コンクリート片・レンガ片を多く含む)
26. 明黄褐色 (10YR6/1) 砂質土
27. 褐灰色 (10YR5/1) (コンクリート片・レンガ片を多く含む)

第25図 本館部分 北壁・北壁土層断面図(S=1/80)



第26図 断ち割り土層断面図(S=1/80)



第27図 区画溝SD150(左)、重機断ち割り1(右)合成断面図(S=1/100)

トの床張りを検出した。

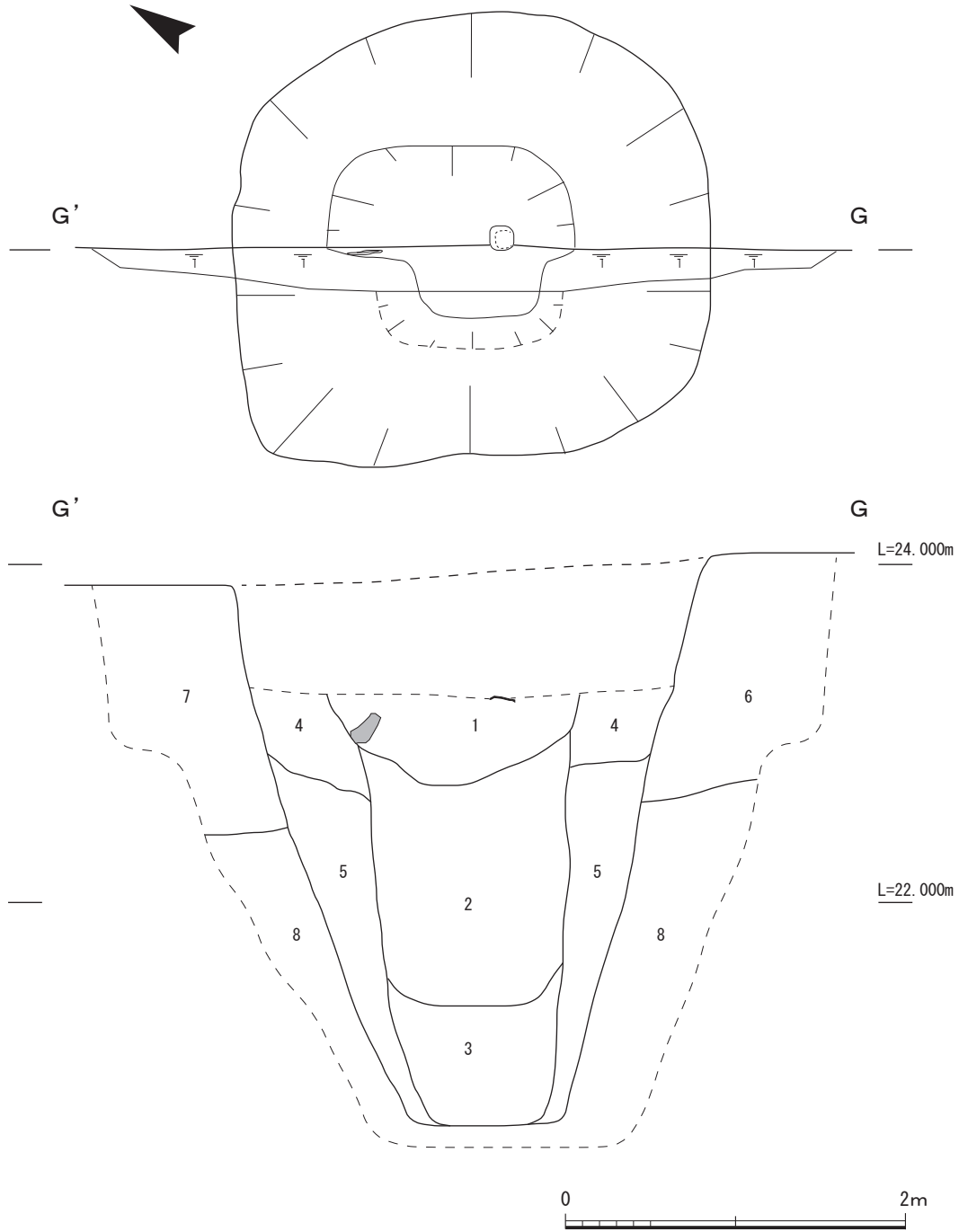
また、令和3年度の調査で東肩を検出したS D150に直交する方向の断ち割り(第23図重機断ち割り1)では、標高約24.7mで地山の水平堆積が続くことが判明した。令和3年度の調査ではS D150は標高22.3m付近まで掘削しているので、S D150が西に下がる谷ではなく、溝であることが判明した。S D150の西肩は令和3年度調査区との間の調査が及ばない部分にあると判断されるので、その幅は5～6m程度と推定される(第27図)。

旧別館部分では、中央部で、3～10cm程の礫からなる土石流の痕跡(第24図9・12層)を確認した。増田富士雄京都大学名誉教授(当調査研究センター理事)による断面観察によると、この土石流と砂の堆積は、折居川が流れる南西側から流れてきた可能性が高く、その末端部分での堆積状況を示すものである。このうち、礫層(第24図12層)は扇状地面の土砂流(土石流の末端でのより水を多く含んだ堆積物)である。また、砂質土が小さな単位で細粗の互層となって縞々状の堆積状況を示す第24図9層は、5区の広い範囲で認められる。この層は、全体的に水流で運ばれた痕跡である葉理が見られないことから、土砂流堆積物に含まれていた砂が、その後、風によって運ばれたものではないかとのご教示を得た。風で運ばれて砂漣が形成され、風の無い時には雨や日光で細かい黒っぽい薄い層を作った結果できた層であり、卓越風に直交した方向はほぼ水平に連続し、平行した方向では細かくうねることから卓越風は北北西となるとのことである。

旧本館部分は、調査地北西側にある来庁者用駐車場よりも約1m高くまで埋戻し土が盛られていた。重機掘削は北西端から開始した。厚く堆積した解体時の埋め戻し土を除去すると、標高約23.6mで固く締まった地山とみられる砂質土(第25図6層)を確認し、上面で近代の攪乱などを確認した。第25図6層は、宇治川のある北東に向かって緩やかに下る傾斜をしている。

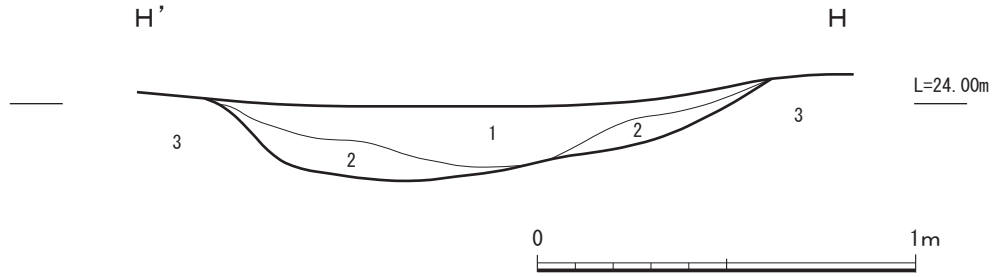
また、S D150の北西延長部にも同様に重機による断ち割り(第23図重機断ち割り2)を行ったが、解体のコンクリート基礎やコンクリート柱などが確認できるのみであった(図版第19-(3))。

また、本館部分の南西隅では、井戸の断ち割りによって、地山の砂層と礫層が北北西方向に下がる傾斜で堆積していることを確認した。



1. 褐灰色 (5YR4/1) 粘質土 (土師器皿などを多く含む、3～15 cm大の礫を含む) 井戸枠輪郭内
2. 褐灰色 (5YR5/1) 粘質土 (土師器皿などを多く含む、3 cm大の礫を含む) 井戸枠輪郭内
3. 褐灰色 (5YR5/1) 粘質土 (3 cm大の礫を含む) 井戸枠輪郭内
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (粗砂混じり) 掘方輪郭
5. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 (粗砂混じり) 掘方輪郭
6. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 (固く締まる) 地山
7. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂礫土
8. 明黄褐色 (10YR7/6) 砂層 (固く締まる)

第28図 井戸 S E 501土層断面図 (S=1/40)



1. 褐灰色（5YR4/1）砂質土（土師器片を含む）
2. 灰褐色（7.5YR5/2）砂質土（土師器片を含む）
3. 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（固く締まる）地山

第29図 溝 S D 502土層断面図(S=1/20)

2) 検出遺構

調査区のほとんどは解体時の攪乱や近・現代のレンガ建物とそのコンクリートの床張り、廃棄土坑・攪乱であった。

検出した遺構は、旧本館の南端付近で、撤去したコンクリート床の下から検出した井戸 S E 501と溝 S D 502のみである。

井戸 S E 501 東西2.6m、南北2.9mを測る隅丸方形を呈する。井戸枠は腐食し残存していなかった。当初は近現代の遺物や廃棄物が出ていたため攪乱と認識していたが、約30cm掘り下げたところで12世紀後半の土師皿片がまとまって出土したため、井戸と認識し掘削を行った。平面精査と断面観察により、井戸枠内と枠外の土色変化を確認した。底を確認するため重機により半裁したところ、検出面から約3.2mで底を確認したが、曲げ物などの水溜めの部材は確認できなかった。遺物は井戸枠内の褐灰色砂質土から集中して出土した(11世紀後半から12世紀後半)。

溝 S D 502 調査区南東隅で検出した最大幅1.3m、深さ0.2を測る。北東側は攪乱により消失しており、約4mの長さを検出した(13世紀)。

3) 小結

5区は近代の構造物や宇治警察署の旧庁舎の基礎によって大半が攪乱を受けており、遺構の残存状況は良くなかったが、令和3年度の調査で検出していた S D 150が、南西に向かって下がる谷地形の肩ではなく、溝の肩であることが判明した。これにより、S D 150は、調査時に S D 420としていた溝と一連のL字形に曲がる区画溝であると推定される。

南西隅では、11世紀から12世紀初頭の井戸 S E 501と13世紀の溝を検出した。S E 501は1～4区の区画溝 S D 150(420)と同時期に機能していたと考えられる。(村田和弘)

6. 出土遺物

1) 1～4区出土遺物

(1) 掘立柱建物 1

S P 70(1～14) 土師器皿(1～13)と黒色土器椀(14)がある。1～4は大皿、5～13は小皿である。大皿は口縁部がわずかに外反し、2段ナデは不明瞭である。小皿はいずれも口縁部を外

側に引き出して端部を上方に丸くおさめる、いわゆる「て」字状口縁皿である。14は黒色土器B類碗で、口縁内端面に沈線を有する。これらはいずれも、11世紀中葉の年代が与えられる。

S P 072 (15~19) 土師器皿が出土している。15・16は大皿である。完形の15は、直立する口縁部を2段にヨコナデする。深い箱状の器形であり、12世紀頃のものであろう。17~19は小皿で、17・18は「て」字状口縁である。

S P 075 (20~23) 土師器皿(20~22)と瓦器(23)が出土している。20・21は大皿で、口縁部を幅の狭い2段にヨコナデするものである。口縁端部は余り外反せずに斜上方に延びる。22は「て」字状口縁の小皿である。瓦器碗(23)は大和型で、見込みにジグザク状暗文を有する。高台は断面三角形で高い。これらは、11世紀末~12世紀前半に位置付けられるであろう。

S P 077 (24~29) 土師器皿(24~27)、瓦器(28)、白磁(29)が出土している。24~26は小皿、27は大皿である。24の土師器皿は口縁部外面を幅の狭い2段のヨコナデ調整をし、燈芯痕跡を1か所所有する。25は2段のヨコナデで、上段のナデが上退しているもの。12世紀中頃のものであろう。26は「て」字状口縁の小皿、27はコースター形の皿である。口縁端部は偏平な楕円形を呈しており、11世紀頃のものともみられる。瓦器碗底部(28)は低い断面三角形であるがしっかりとした高台を付けており、12世紀前半頃のものか。29は肉厚の玉縁状口縁を有する白磁。器壁が薄く、碗とみられる。11世紀後半~12世紀前半のものであろう。

S P 087 (30) 土師皿が出土している。コースター形の土師器皿とみられる細片で、口縁が上方に立ち上がっている点から12世紀~13世紀初頭のものであろう。

S P 099 (31・32) 土師器大皿(31・32)が出土している。31は口縁部外面をヨコナデし口縁上端にわずかに面を持つ、ナデ調整の口縁部下半との境に稜を有する。11世紀後半~12世紀前半のものか。

(2) 掘立柱建物2および周辺(第30図)

S P 033 (33) 土師器大皿が出土している。口縁部外面を2段のヨコナデ調整するもので、上段のナデが上退する。12世紀中頃のものであろう。

S P 040 (34) S P 040~042は直接に掘立柱建物2を構成していないが、S P 043から遺物が出土しておらず参考としてここに挙げた。土師器大皿が出土している。時期不明の口縁部の細片で、燈芯痕跡を1か所所有している。

S P 041 (35) 土師器皿が出土している。コースター形で、断面三角形の口縁を内面に折り返している点から11世紀後半~12世紀のものか。

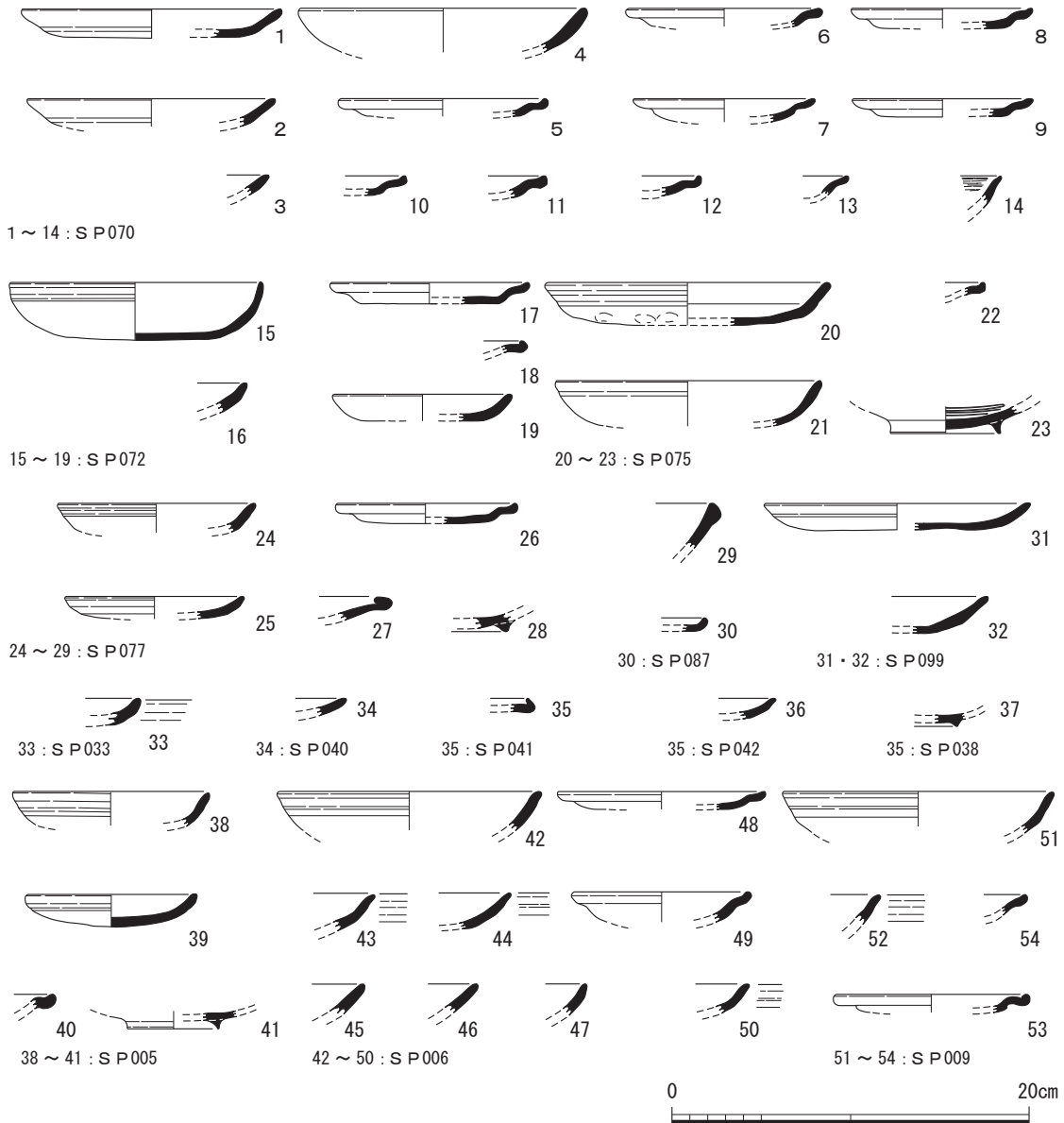
S P 042 (36) 土師器大皿が出土している。口縁部の細片で時期不明である。

(3) 掘立柱建物4(第30図)

S P 038 (37) 瓦器碗が出土している。高台は比較的しっかりとしているものの、低い断面三角形であり、12世紀後半頃のものであろう。

(4) 掘立柱建物5(第30図)

S P 005 (38~41) 土師器小皿(38~40)、瓦器碗(41)が出土している。38は摩滅しているが、



第30図 1～4区出土遺物1

口縁部外面を2段ヨコナデで調整するものである。口縁端部は丸いが内傾する弱い面を有しており、11世紀後半から12世紀前半頃のものであろう。39は口縁部外面に細い沈線状のナデ調整をするとともに、口縁端部外面が面を有する。「て」字状口縁の中でも新しく位置付けられるものとみられ、12世紀前半頃に位置付けられる。

SP006(42～50) 土師器皿(42～50)が出土している。42～47は大皿、48～50は小皿である。42・45・47・49は弱いながらも2段ヨコナデ調整するものである。47は口縁端部内面にかすかな面を有しており11世紀後半、それ以外は口縁端部が丸く11世紀末～12世紀前半頃とみられる。48・49は「て」字状口縁を有するものである。

SP009(51～54) 土師器皿(51～54)が出土している。51・52は大皿で、口縁外面を2段ヨコナデするもの。口縁の形状は丸く、11世紀末～12世紀前半頃とみられる。53・54は「て」字状口縁を有する小皿である。

(5)井戸S E 151(第31図)

55～64はS D 150の埋土掘削中に、調査区西端部で井戸状のものと認識した部分から出土したものである。土師器皿(55・56)、土師器羽釜(57・58)、瓦器椀(59～61)、白磁椀(62・63)、陶器すり鉢(64)が出土している。55は灯明皿とみられる大皿で、燈芯痕跡を有さないが内面に油煙と考えられる付着物がある。57は口径が大きいこと、胎土が精良でない点などから、鏝の破片(58)とあわせて、大和産の羽釜と判断したもの。瓦器椀(59・60)は口縁端部内面に段を有する大和型である。61は高台が高いもので11世紀～12世紀前半のものとみられる。白磁椀(62・63)は厚い玉縁を有するIV類である。11世紀後半～12世紀前半のものであろう。すり鉢(64)は無釉で、摺り目は6条を1単位としている。単位の間隔は2cm程度であり、15世紀後半以降の信楽焼であろう。

(6)区画溝S D 150(第31図)

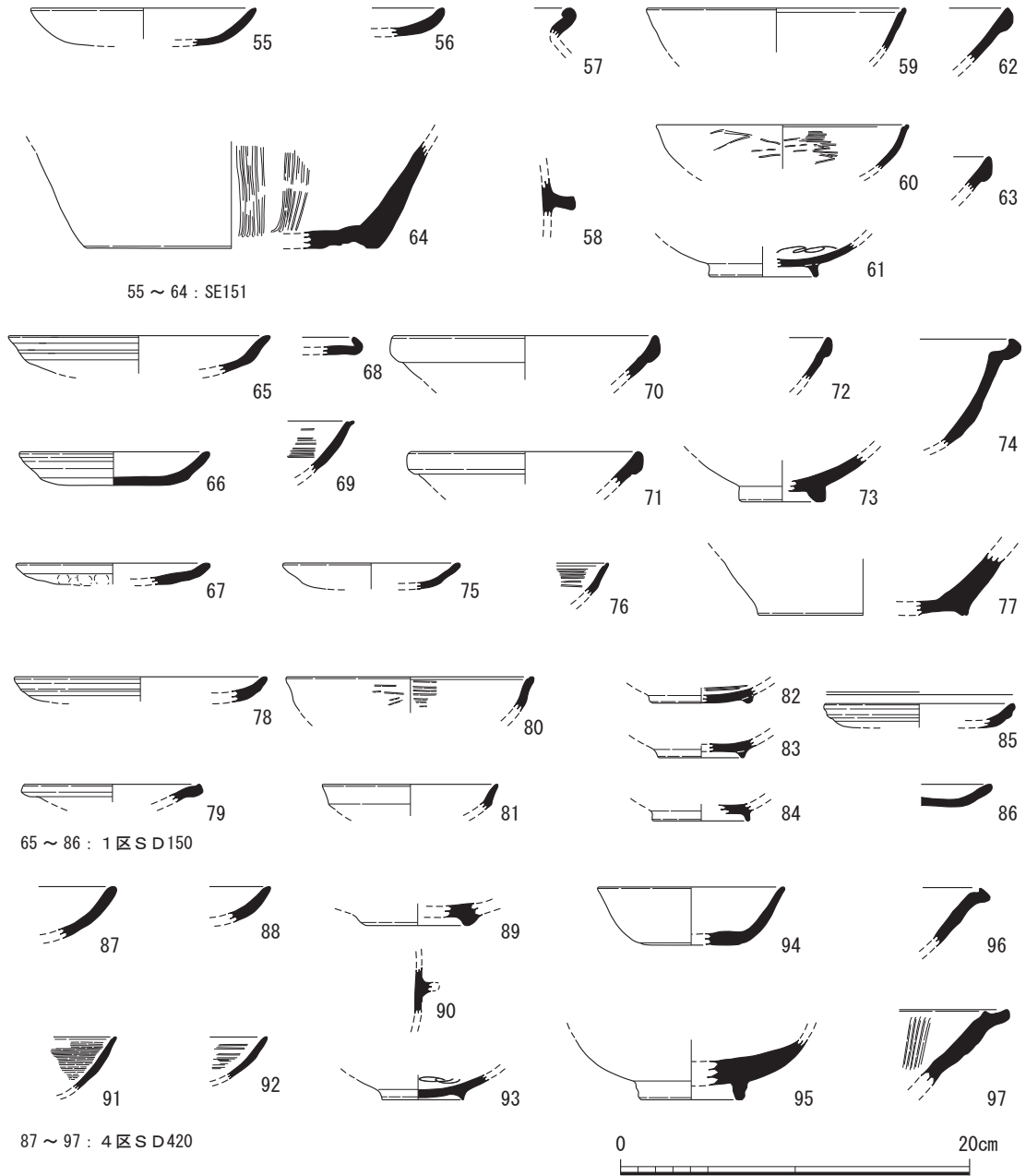
65～74はS D 150埋土のうち、1区南西壁面の第26層から出土したものである。同層は1区S D 150断面図の第11層に相当する。65～68は土師器皿である。65は大皿で、明瞭ではないが、2段ヨコナデする。66は明瞭に口縁外面を2段ヨコナデする小皿で、上段のナデが上退する。12世紀中頃のものであろう。67は1段のヨコナデ調整するものである。68はコースター形の皿で、口縁を内面に折り返す。11世紀後半～12世紀のものか。70～73は白磁椀である。70～72は厚い玉縁を有するIV類、73はII類で、11世紀後半～12世紀前半のものであろう。74は瓦質土器の鍋である。口縁の形状などから14世紀頃か。

75～77は1区南西壁面の第27・28層から出土したもの。S D 150断面図では第13層の高さに相当する。75は1段のヨコナデ調整する土師器小皿である。12世紀末～13世紀初頭のものであろう。76は大和型瓦器椀で、12世紀後葉のものである。77は信楽焼すり鉢である。使用により内面は平滑になっている。残存部分では摺り目は確認できない。

78～86は壁面付近の断割作業時に出土したもので、断面図と出土層位の対応が可能なものである。78～84はS D 150断面図の第24層から出土したもので、85・86は第26層からの出土である。78・79は土師器皿である。78は口縁外面を2段ヨコナデする大皿で、上段のナデが上退する。79は「て」字状口縁の小皿である。80・82～84は大和型瓦器椀である。80の内面には密なヘラミガキが見られ、82～84の高台は比較的しっかりしたもので背の高いものも含まれるため、11世紀末～12世紀前半のものであろう。81は瓦器皿で、口縁部内面にヘラミガキがみられる。85・86は、土師器小皿である。

87～97は区画溝のうち、4区でS D 420として掘削した部分からの出土である。

91・94・95は底部付近の第16層よりも下位で出土したもの、それ以外は第12層より上位からの出土である。87・88は土師器大皿である。89は土師器椀か。90は大和産土師器羽釜の鏝である。91は黒色土器椀で内面と口縁部外面が黒色を呈する。92は楠葉型瓦器椀で内面に粗いヘラミガキがみられる。93は大和型瓦器椀で、見込みに連結輪状暗文がみられる。94は須恵器杯で、古代の遺物の混入である。95は龍泉窯系青磁椀I類で、畳付から高台内は露胎である。96は瓦質土器鍋で、外面は指頭痕が目立つ。97は信楽焼すり鉢、5条で一単位のすり目がみられる16世紀後葉の



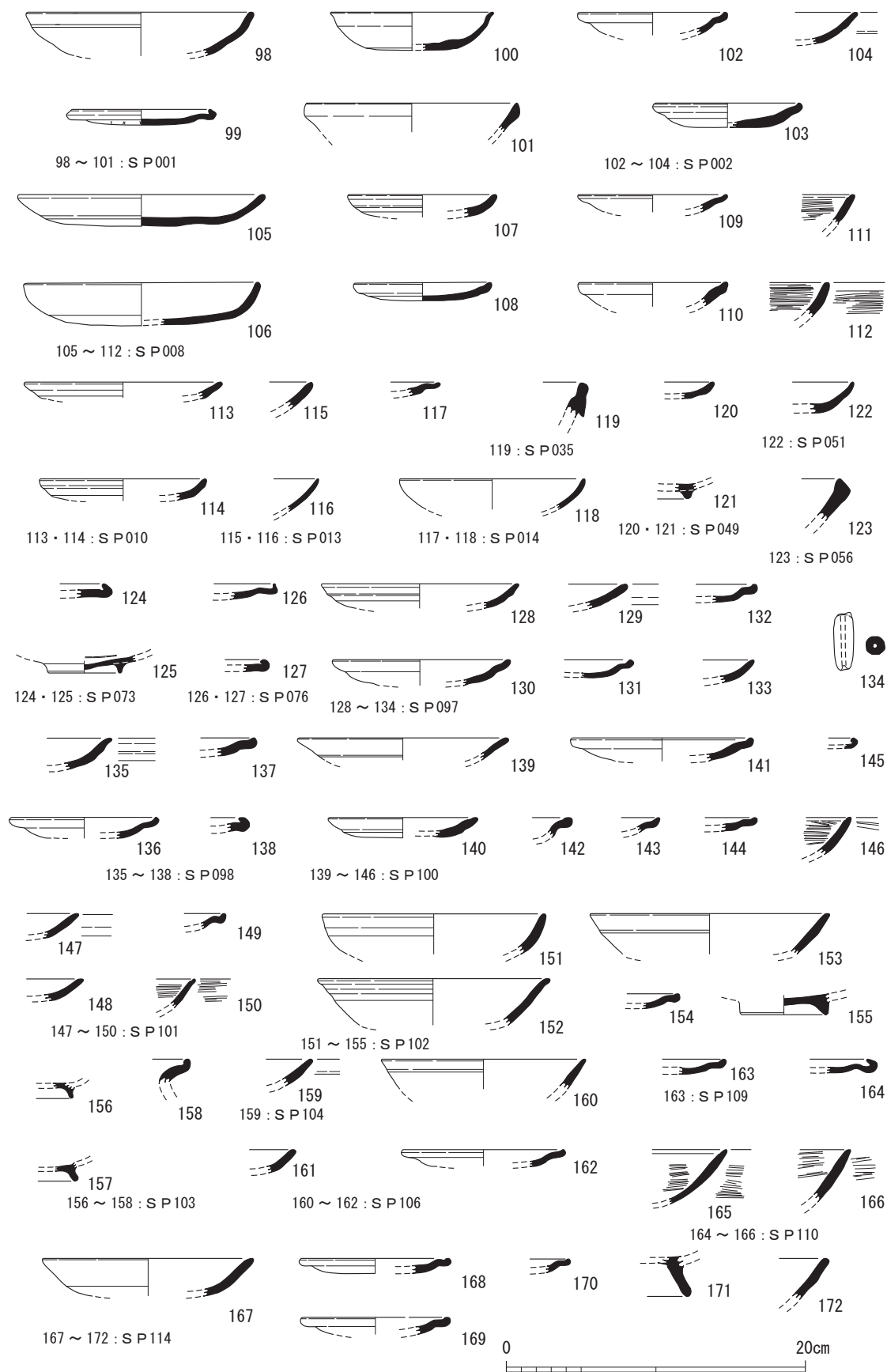
第31図 1～4区出土遺物2

もの。

(7) その他の遺構出土遺物(第32～34図)

98～252は遺構からの出土であるが、建物跡などに復元できなかったものから出土した。

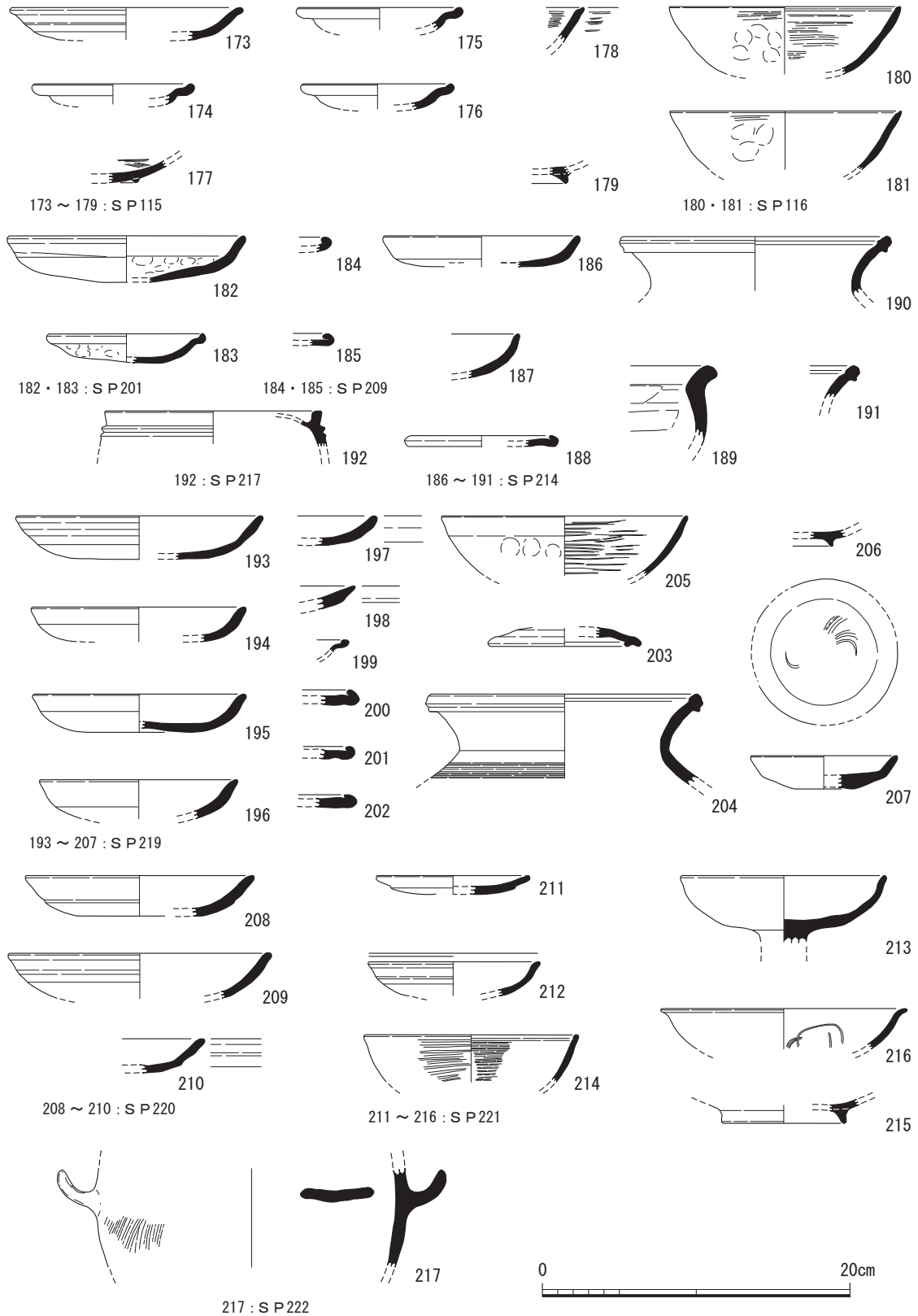
S P 001からは、土師器大皿(98)、コースター形の土師器小皿(99)、玉縁の白磁椀IV類(101)などが出土している。須恵器杯を除けば、11世紀代に位置付けられよう。S P 002からは、土師器大皿(104)、「て」字状口縁の土師器小皿(102・103)が出土している。11世紀後半頃か。S P 008からは土師器大皿(105・106)、土師器小皿(107～110)、瓦器椀(111・112)が出土している。105は口縁の立ち上がり部を強くナデ調整する。106は口縁が上方に立ち上がり、箱形の形状を呈する。107は口縁部を2段ヨコナデ調整する。108～110は退化した「て」字状口縁を有する。瓦



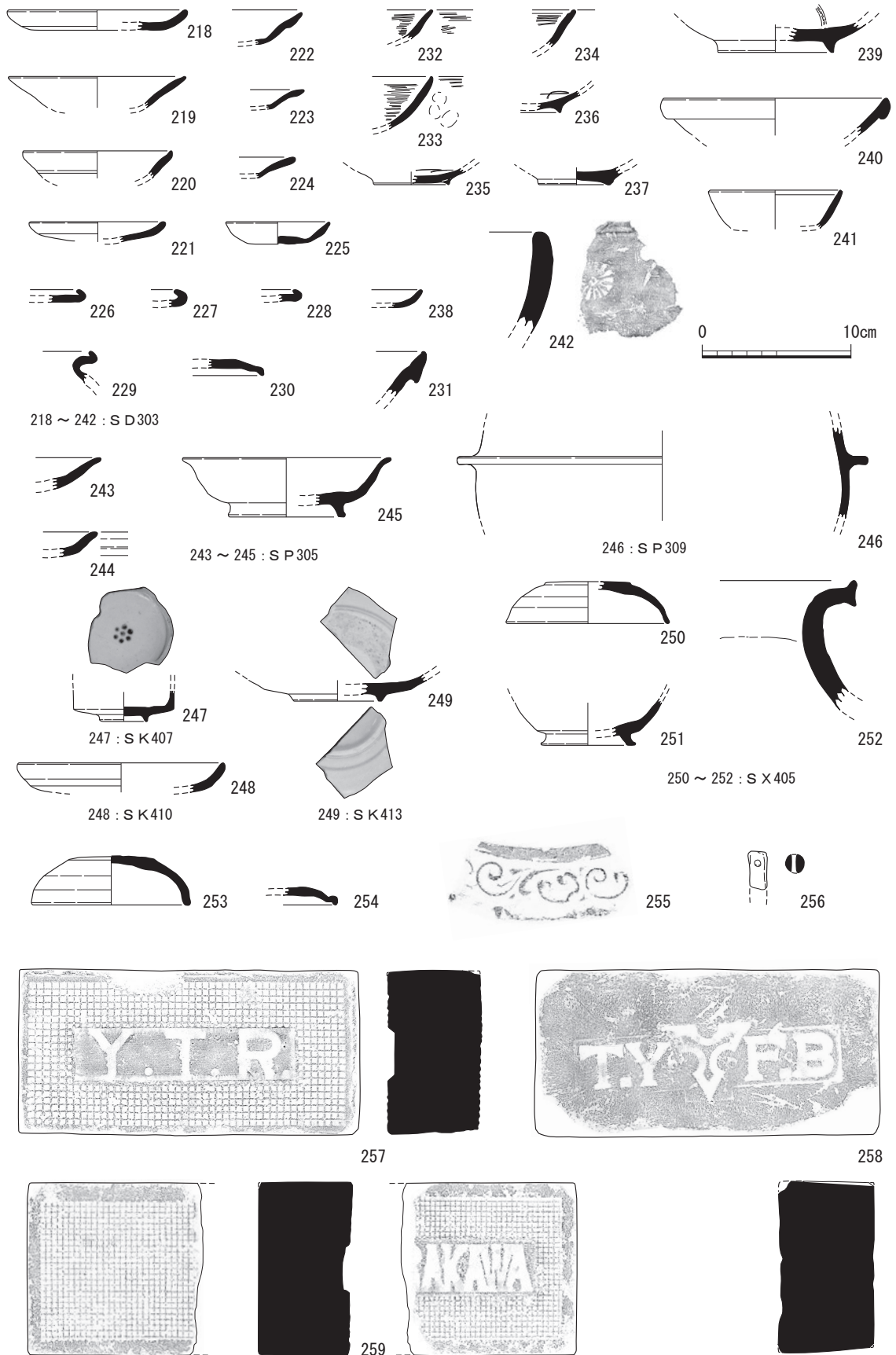
第32図 1～4区出土遺物3

器碗は大和型(111)と楠葉型(112)があり、どちらも内面のミガキが密である。11世紀後半～12世紀中頃の範囲で捉えられる。S P 010からは土師器皿(113・114)が出土している。113は口縁部1段ナデの大皿、114は口縁部の2段ナデの上段が上退する小皿である。12世紀後半であろう。S P 013は土師器大皿(115)と白磁皿(116)が出土している。S P 014は「て」字状口縁の土師器小皿(117)と白磁皿(118)が出土している。S P 035出土の119は常滑焼である。N字状の口縁を有しており、13世紀後半～14世紀半ばのものであろう。S P 049からは土師器小皿(120)と黒色土器A類碗(121)が出土している。S P 051からは土師器大皿(122)、S P 056からは須恵器鉢(123)出土している。須恵器鉢は東播系で、口縁は肥厚する玉縁状で端部が上方に延びる。12世紀後半～13世紀である。S P 073からはコースター形の土師器皿(124)と見込みに連結輪状暗文を施す大和型瓦器碗(125)が出土している。S P 076からは、土師器皿が出土している。126は「て」字状口縁のもの、127はコースター形である。S P 097からは土師器大皿(128・129)、土師器小皿(130～133)、土錘(134)が出土している。大皿は口縁部を2段ナデするものと1段ナデするものがあり、小皿は「て」字状口縁のものと1段ナデするものがある。S P 098からは、口縁部を2段ナデする土師器大皿(135)、「て」字状口縁の土師器小皿(136・137)、コースター形の土師器皿(138)が出土している。136は2段ヨコナデで口縁端部は外反する。S P 100からは土師器大皿(139)、「て」字状口縁の土師器小皿(140～144)、コースター形の土師器皿(145)、黒色土器B類碗(146)が出土している。146は口縁内端部のやや下がった位置に状に沈線がめぐらされる。S P 101からは土師器大皿(147・148)、「て」字状口縁の土師器小皿(149)、大和型瓦器碗(150)が出土している。150は内外面ともにヘラミガキが密である。S P 102からは、土師器大皿(151～154)、土師器碗(155)が出土している。151は弱く2段ヨコナデ調整する。153は2段ヨコナデし、口縁端部は外反する。S P 103からは黒色土器A類碗(156)、黒色土器B類碗(157)、土師器甕(158)が出土している。S P 104からは土師器大皿(159)が出土している。159は口縁端部のすぐ下を1段ヨコナデする。S P 106からは土師器大皿(160)、瓦器皿(161)、「て」字状口縁の土師器小皿(162)が出土している。160は口縁端部をナデ調整しており、1段ヨコナデか。S P 109からは「て」字状口縁の土師器小皿(163)が出土している。S P 110からは瓦器碗(165・166)が出土している。165・166は焼成が硬質で胎土も水簸されているようであり瓦器と判断したが、器壁が厚くミガキの幅も太い。同一個体の可能性もある。S P 114からは土師器大皿(167)、「て」字状口縁の土師器小皿(168～170)、土師器台付皿(171)、楠葉型瓦器碗(172)が出土している。172は口縁内端部からやや下がった位置に沈線が巡らされ、内外面に密なヘラミガキがみられる。

S P 115からは土師器大皿(173)、「て」字状口縁の土師器小皿(174～176)、黒色土器B類碗(177～179)が出土している。173は口縁が外反し、2段ヨコナデする。S P 116からは黒色土器B類碗(180)、大和型瓦器碗(181)が出土している。S P 201からは土師器大皿(182)、「て」字状口縁の土師器小皿(183)が出土している。182は口縁部外面に1段ヨコナデ調整するが、場所により2段になる。S P 209からはコースター形の土師器皿(184・185)が出土している。S P 214からは土師器大皿(186・187)、コースター形の土師器皿(188)、土師器甕(189)、須恵器甕(190・191)が出土



第33図 1～4区出土遺物4



第34図 1～4区出土遺物5

している。190・191は同一個体であろう。S P 217からは須恵器の圈足円面硯(192)が出土している。S P 219からは土師器大皿(193~197)、「て」字状口縁の土師器小皿(198・199)、コースター形の土師器皿(200~202)、須恵器杯G蓋(203)、須恵器甕(204)、黒色土器A類椀(205)、大和型瓦器椀(206)、龍泉窯系青磁皿I類(207)が出土している。193・197は2段ヨコナデする。204は須恵器S P 214出土の190・191と同一個体とみられる。207の内底面には櫛描き文が描かれる。S P 220からは土師器大皿(208・209・210)、S P 221からは土師器小皿(211・212)、須恵器高杯(213)、瓦器椀(214)、黒色土器B類椀(215)、白磁椀XIII類(216)が出土している。208~210は口縁部を2段ヨコナデする。211は、「て」字状口縁、212は口縁部2段ナデである。216の内面にはヘラ描き文が施される。S P 222からは把手付きの土師器甕(217)が出土している。

S D 303からは土師器皿(218~228)、土師器羽釜(229)、須恵器杯蓋(230)、東播系須恵器鉢(231)、大和型瓦器椀(232~236)、山茶椀(237)、瓦器皿(238)、緑釉陶器椀(239)、白磁椀IV類(240)、白磁皿IX類(241)、瓦質土器火鉢(242)が出土している。218・219・222~224は大皿、220・221・225は小皿、226~228はコースター形である。239は器面をヘラミガキした後、高台内を除く前面に濃緑色の緑釉を掛ける。見込みには圈線が巡る。241は口縁内端部の釉葉を掻き取る。242は外面に菊花形のスタンプが押される。S P 305からは土師器大皿(243・244)、須恵器杯(245)が出土している。S P 309からは大和産の土師器羽釜(246)が出土している。S K 407からは肥前磁器椀(247)が出土している。S K 410からは土師器大皿(248)が出土している。S K 413からは見込みに蛇の目釉ハギを施した肥前磁器皿(249)が出土している。S X 405からは須恵器杯蓋(250)、須恵器壺(251)、常滑焼甕(252)が出土している。

253~256は遺構以外から出土した特徴的な遺物を示した。須恵器(253・254)は精査中に出土したもので頂部外面未調整の飛鳥I~II(253)と8世紀後半(254)がある。瓦は近世以降のものが出土しているが、蓮華文を有するもの(255)が1点のみ、3区の攪乱から出土している。土錐(256)は1区の攪乱から出土しており、古墳時代のものであろう。

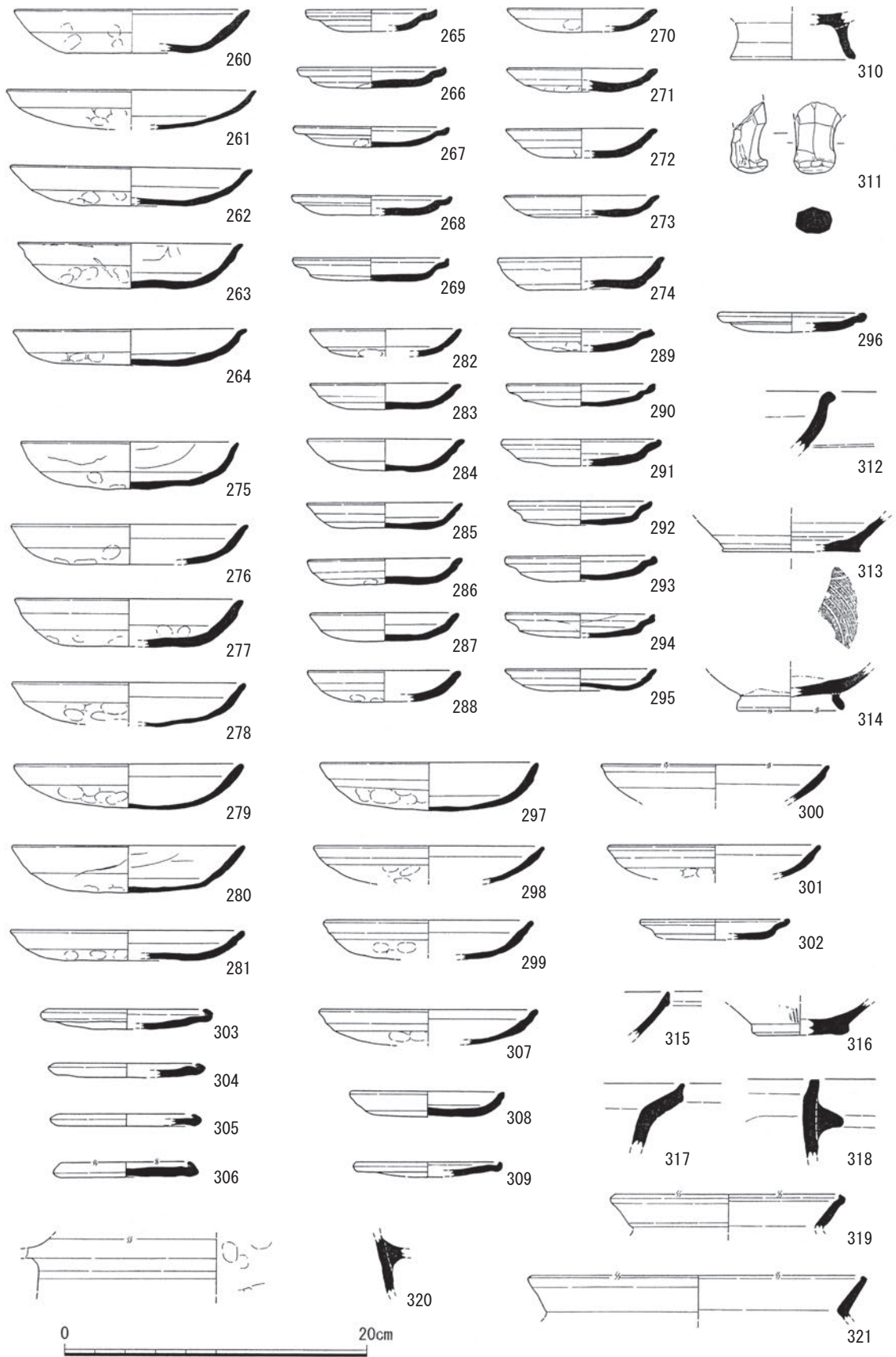
257~259は刻印のある耐火煉瓦をサンプル的に採集したもの。257は4区の工業用炉を構成していたもので、「Y. T. R.」の刻印がある。258・259は4区の攪乱から出土したもの。258は「T. Y. F. B」とあり、259は破損した1文字の後に「AKAWA」と続く。明治の近代遺産に関わる品川「SHINAGAWA」の刻印がある白煉瓦が知られるところであるが、本例の破損した1文字は「R」ないし「B」である。(加藤雅士)

2) 5区出土遺物

遺構から出土した遺物と、攪乱から出土した特徴的な遺物を報告する。土器の口径・器高・色調・調整などは観察表にまとめた。

(1) 井戸SE501出土遺物(第35・36図260~326)

260~326は井戸S E 501から出土した遺物である。なお、井戸枠内から出土した土師器の皿(第35図260~309)を分類した。平尾政幸氏による編年によると、II期の4A、4B、4C、5Bに分類される。年代は、11世紀中頃から12世紀後半頃に相当する皿と考えられる。また、N系列と



第35図 5区出土遺物 1

A系列の皿が出土している。

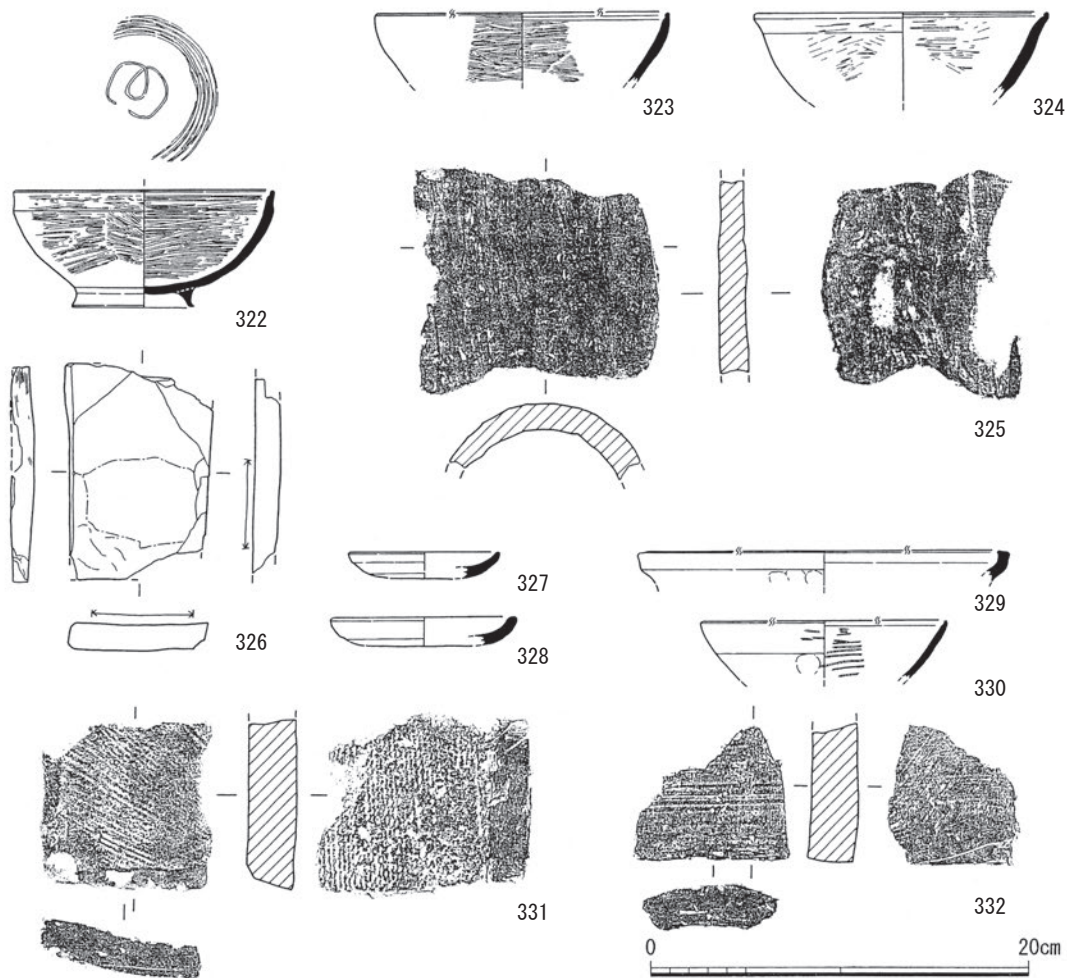
260～264は井戸枠内の上部層(第28図1層)から出土した土師器の皿である。これらはⅡ期の4 A、11世紀前期頃に相当するN系列に属し、口径は15cm前後を測り、2段ナデがみられる。265～274は、口径は10cm前後を測り、口縁部は「て」字状を呈する。同じくⅡ期4 AのA系列に分類される。

275～296は井戸枠内の上部層(第28図1層)から出土した土師器の皿である。Ⅱ期の4 B、11世紀後半頃に相当する。275～281は口径が15cm前後を測り、2段ナデがみられる。282～293は、口径が10cm前後を測り、2段ナデがみられる。289～296は、口径は10cm前後を測り、口縁部は「て」字状を呈する。これらはA系列に分類される。

297～301は口径が15cm前後を測り、2段ナデがみられる。これらはⅡ期4 CのN系列に分類される。302の口径は10cmを測り、口縁部は「て」字状を呈し、Ⅱ期4 CのA系列に分類される。

303～306は井戸枠内の上部層(第28図1層)から出土した。Ⅱ期5 Aに分類され、12世紀前期頃に相当する。口径は10cm前後を測り、コースター形であることから、A系列に分類される。

307～309は井戸枠を検出するまでに掘削した層の下部から出土した土師皿である。これらはⅡ



第36図 5区出土遺物2

期5Bに分類され、12世紀中頃に相当する。307は口径を14.3cmに復元した土師皿でN系列に分類される。308は口径が10cmを測るN系列に分類される。309はコースター形の皿でAcに分類される。

310～326は井戸SE501の掘削中で出土した遺物である。

310は土師器の台付皿の破片である。内外面ともにヨコナデがみられる。311は土師質の獣脚部分である。脚部は細かく削られ面取りがされている。1点のみの出土で、器種は不明であるが、脚部の接地面に対して斜めの取り付け面がある。312は須恵器の鉢の口縁部である。313は須恵器の鉢の底部片で、底部に糸切りの痕跡がみられる。314は灰釉陶器の底部の破片である。315は白磁碗の口縁部片である。316は白磁碗の底部片である。317は土師器の甕の口縁部片である。318は土師器の羽釜の口縁部片である。319は瓦質の甕の口縁部片である。320は瓦質の羽釜の鏝部の破片である。321は土師器の甕の口縁部片である。322は瓦器碗である。内面には圏線ミガキ、外面にはミガキが施されている。12世紀初頭に属する。323・324は瓦器碗である。325は丸瓦の破片で、凹面には布目が残り、凸面はナデによる擦り消しの痕跡がみられる。326は砥石の破片と思われる。使用痕であるすり面が一部に残る。

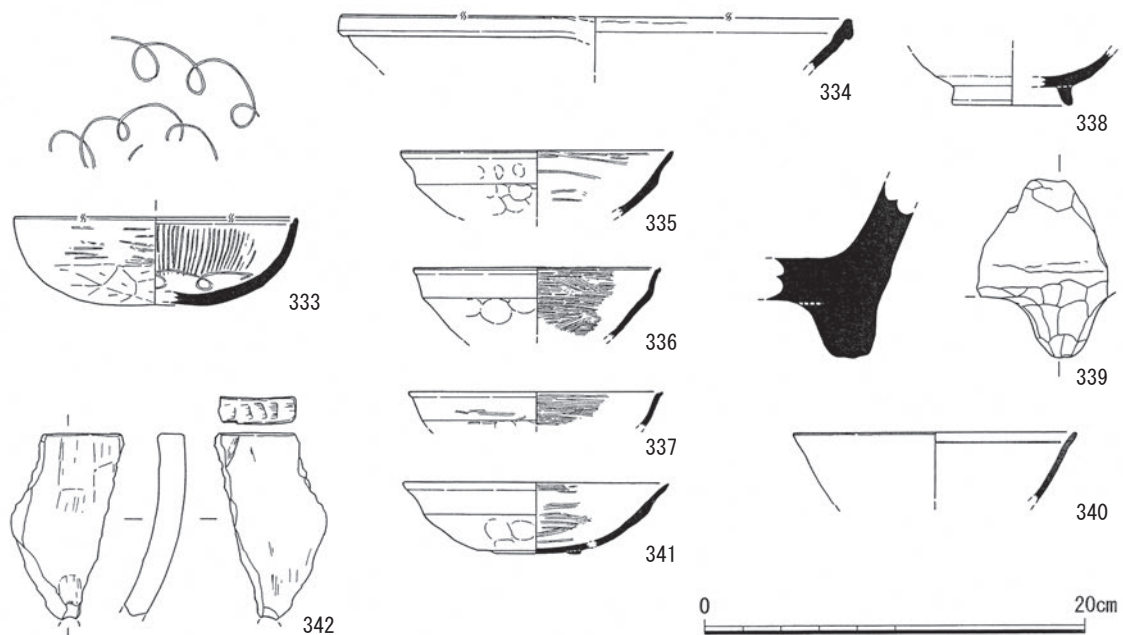
(2) 溝SD502出土遺物(第36図327～332)

溝SD502からは、13世紀代の土器片や瓦器碗片や瓦類が出土した。

327は土師器皿の口縁部である。328は土師器の皿の口縁部片である。329は瓦質の甕の口縁部片である。330は瓦器碗の口縁部片である。331は平瓦の破片で、凹面にはコビキ痕、凸面には縄目痕がみられる。332は丸瓦の破片で、凹面にはナデ、凸面には縄目痕・コビキ痕がみられる。

(3) 攪乱出土遺物(第37図333～342)

333から342は攪乱から出土した遺物である。



第37図 5区出土遺物3

333は土師器の杯の破片である。内面には暗文が施され、外面にはヨコナデと底部にケズリがみられる。334は東播系の須恵器の片口鉢の口縁部片である。335は瓦器椀の破片で和泉型と考えられる。336・337は瓦器椀の破片である。338は灰釉陶器の椀の破片で、底部に貼り付け高台が付く。339は瓦質の火鉢の底部の破片である。340は龍泉窯系の青磁椀の破片と思われる。341は瓦器椀の破片で和泉型と考えられる。342は滑石製の石鍋の破片と思われる。長さ9.9cm、幅4.9cm、厚さ1.4cmを測り、下部には穿孔された痕跡がある。のちに破片を転用し利用していた可能性がある。(村田和弘)

7. まとめ

1～4区の北西辺で幅約5.5m、深さ約2.2mのS D 150(調査時はS D 420)が検出された。南西辺に沿って検出されたS D 150は、南西に向かって下がる谷地形の肩であるのか、S D 420と同じような溝の肩であるのかが分からなかったが、5区の調査で、溝の肩であることが判明した。これらは、L字形に曲がる、一連の区画溝であると推定される。

この区画溝は、機能時の堆積層から出土した遺物から、12世紀初頭頃まで使われた後に埋没したと考えられる。掘削時期は特定できないが、溝が機能していた時期の堆積層から出土した遺物からみて、遺構の存続期間はあまり長くなかったと思われる。

この区画溝は、立地・規模・形状・時期などから、方形居館を画する溝の一部である可能性も考えられるが、区画の内側からは同時期の顕著な遺構が見つからず、一方、区画の外側にあたる5区で同時期の井戸を確認した。今後の周辺での調査の際に関連遺構が見つかる可能性がある。

これらが埋没した後に、小規模な掘立柱建物が建てられる。柱穴の出土遺物には本来はS D 150・420の埋土に含まれていたとみられる小破片が多いが、12世紀中頃までの遺物が含まれることから、掘立柱建物は、S D 150・420が埋められてからあまり時間をおかずに建てられ始め、2回ほどの建て替えを経て12世紀中頃には廃絶したとみられる。

13世紀以降にも、溝などの遺構が見ついているが、いずれも断片的で、評価は難しい。

(森島康雄)

- 注1 藤岡謙二郎1973「序章 I 宇治市の地理と歴史 1 地理的性格」『宇治市史』 1（古代の歴史と景観）
宇治市
- 注2 池田 碩・植村善博1980「南山城、木津川流域の段丘地形」『奈良大学紀要』第9号 奈良大学
- 注3 脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原琢・中野聰志・竹内恵二・田口雄作2013「京都東南部地域の地質」
『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅』京都(11)第40号 産業技術総合研究所 地質総合センター
- 注4 足利健亮・水山高幸・秋山元秀・高橋誠一・若原英弐1974「第四章 伏見築城と宇治 第二節 宇治川
の治水 折居川と井川」『宇治市史』 2（中世の歴史と景観） 宇治市
- 注5 荒川 史・中川和哉1992「宇治五ヶ庄二子塚古墳の黒曜石製ナイフ形石器」『旧石器考古学』 45 旧
石器文化談話会
- 注6 小池 寛1987「第5章 西隼上り遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊（財）京都府埋蔵文化財調
査研究センター
- 注7 猿向敏一ほか「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委
員会
- 注8 平等院鳳翔館は京都府遺跡地図（京都府・市町村共同 統合型地理情報システム）では塔の川遺跡の
範囲内にはなく、平等院旧境内遺跡内に位置している。
西村恵祥・杉本 宏・吹田直子2000『平等院境内発掘調査報告書』平等院
田代 弘・森下 衛2000「平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』
第95冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注9 前掲注6小池1987に同じ
- 注10 杉本 宏・吹田直子・内田真雄1997『乙方遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第
38集）宇治市教育委員会
- 注11 浜中ほか1998など。浜中邦弘・吹田直子・松村英之1998『若林遺跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化
財発掘調査概報 第40集）宇治市教育委員会
- 注12 長谷川達・小山雅人・大槻眞純1982「5. 羽戸山遺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第2冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 前掲注10杉本ほか1997に同じ
- 注14 荒川 史・杉本 宏1992「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第3冊 宇治
市教育委員会
- 注15 浜中邦弘・河村亜由美1996「A. 西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第35集
宇治市教育委員会
- 注16 浜中邦弘・西田倫子2002「I 寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第52集
宇治市教育委員会
- 注17 杉本 宏1989『史跡 隼上瓦窯跡』宇治市教育委員会
- 注18 杉本 宏氏の御教示による。上杉和央2023「絵画から眺める近世宇治郷」『京都を学ぶ』宇治編 京
都学研究会
- 注19 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所

付表1 1～4区出土土器観察表

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
1	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(14.5)	1.6	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
2	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(13.5)	(1.5)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
3	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
4	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(16.0)	(2.5)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
5	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(11.5)	(1.0)	—	1/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
6	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.8)	(1.0)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
7	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.0)	(1.3)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
8	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.0)	(1.1)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
9	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.0)	(0.9)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
10	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) 灰褐色 (7.5YR6/2)	内・外) ナデ
11	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
12	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
13	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
14	1区	掘立柱建物1	黒色土器	椀	—	(1.8)	—	1/12 未満	内・外) 黒色 (N1.5/0)	内) ミガキ、 外) ミガキ?
15	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	14.0	3.2	—	12/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内) ナデ 外) ナデ・ オサエ
16	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
17	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(11.8)	1.1	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ
18	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(0.6)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
19	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(9.8)	(1.5)	—	3/12	内・外) 灰白色 (7.5YR8/2)	内・外) ナデ
20	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(15.6)	(2.4)	—	2/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
21	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(14.8)	(2.6)	—	3/12	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ
22	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(0.6)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
23	1区	掘立柱建物1	瓦器	椀	—	(1.8)	6.2	底) 10/12	内・外) 灰色 (N4/4)	内) ミガキ 外) ナデ
24	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(11.0)	(1.6)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
25	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.0)	(1.2)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
26	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(10.0)	(1.1)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
27	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(1.5)	—	1/12 未満	内・外) にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ
28	1区	掘立柱建物1	瓦器	椀	—	(1.0)	(7.0)	1/12 未満	内) 灰白色 (N7/0) 外) 灰色 (N6/0)	内・外) ナデ
29	1区	掘立柱建物1	白磁	椀	—	(2.5)	—	1/12 未満	釉) 灰白色 (2.5Y8/1) 胎) 灰白色 (10YR8/2)	—

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
30	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
31	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	(14.8)	(1.5)	—	1/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
32	1区	掘立柱建物1	土師器	皿	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
33	1区	掘立柱建物2	土師器	皿	—	(1.4)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
34	1区	掘立2近く	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
35	1区	掘立2近く	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
36	1区	掘立2近く	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
37	1区	掘立柱建物4	瓦器	椀	—	(0.7)	—	1/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
38	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(10.8)	(1.2)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
39	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	9.4	1.8	—	8/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
40	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
41	1区	掘立柱建物5	瓦器	椀	—	(1.0)	(5.0)	1/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
42	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(14.5)	(1.7)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
43	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.5)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
44	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(2.0)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
45	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
46	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
47	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (7.5YR8/2)	内・外) ナデ
48	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(11.5)	(1.0)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
49	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(9.8)	(1.7)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
50	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ
51	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(15.0)	(1.9)	—	1/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
52	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
53	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	(11.0)	(1.0)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
54	1区	掘立柱建物5	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
55	1区	SE151	土師器	皿	(12.8)	(2.2)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
56	1区	SE151	土師器	皿	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
57	1区	SE151	土師器	羽釜	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内・外) ナデ
58	1区	SE151	土師器	羽釜	—	(2.1)	—	—	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
59	1区	SE151	瓦器	椀	(14.7)	(2.5)	—	1/12	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内) 摩滅 外) ナデ
60	1区	SE151	瓦器	椀	(14.3)	(2.6)	—	1/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ・ミガキ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
61	1区	SE151	瓦器	椀	—	(1.9)	(6.1)	5/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ・ミガキ
62	1区	SE151	白磁	椀	—	(3.1)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10Y8/0)	内・外) ナデ
63	1区	SE151	白磁	椀	—	(2.0)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (7.5Y8/1)	—
64	1区	SE151	信楽焼	すり鉢	—	(6.1)	(16.8)	1/12	内・外) 橙色 (2.5YR6/6)	内・外) ナデ
65	1区	SD150	土師器	皿	(14.8)	(2.1)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
66	1区	SD150	土師器	皿	(10.8)	(1.9)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
67	1区	SD150	土師器	皿	(11.0)	(1.2)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
68	1区	SD150	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) 明褐灰色 (7.5YR7/2)	内・外) ナデ
69	1区	SD150	瓦器	椀	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ・ミガキ
70	1区	SD150	白磁	椀	(15.0)	(2.5)	—	1/12	内・外) 灰白色 (7.5Y7/1)	—
71	1区	SD150	白磁	椀	(13.0)	(2.0)	—	1/12	内・外) 灰白色 (2.5Y8/1)	—
72	1区	SD150	白磁	椀	—	(2.4)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (5Y7/1)	—
73	1区	SD150	白磁	椀	—	(2.7)	(4.8)	1/12	内・外) 灰白色 (2.5Y8/2)	—
74	1区	SD150	瓦質	鍋	—	(6.1)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ナデ
75	1区	SD150 13層相当	土師器	皿	(10.0)	(1.5)	—	1/12	内・外) 灰色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
76	1区	SD150 13層相当	瓦器	椀	—	(1.8)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ・ミガキ
77	1区	SD150 13層相当	信楽焼	鉢	—	(3.5)	(11.8)	2/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
78	1区	SD150 24層	土師器	皿	(15.0)	(1.4)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
79	1区	SD150 24層	土師器	皿	(10.0)	(1.0)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
80	1区	SD150 24層	瓦器	椀	(14.0)	(2.0)	—	1/12	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
81	1区	SD150 24層	瓦器	皿	(10.0)	(1.4)	—	1/12	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内) ナデ・ミガキ 外) ナデ
82	1区	SD150 24層	瓦器	椀	—	(0.9)	(5.2)	2/12	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内) ナデ・ミガキ 外) ナデ
83	1区	SD150 24層	瓦器	椀	—	(1.1)	(4.6)	1/12	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内) ナデ・ミガキ 外) ナデ
84	1区	SD150 24層	瓦器	椀	—	(1.0)	(5.4)	1/12	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内) ナデ・ミガキ 外) ナデ
85	1区	SD150 26層	土師器	皿	(10.7)	(1.4)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
86	1区	SD150 26層	土師器	皿	—	1.3	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
87	4区	SD420	土師器	皿	—	(3.0)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
88	4区	SD420	土師器	皿	—	(2.0)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
89	4区	SD420	土師器	椀?	—	(1.3)	(5.6)	3/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
90	4区	SD420	土師器	羽釜	—	(2.6)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
91	4区	SD420	黒色土器	椀	—	(3.0)	—	1/12 未満	内・外) 黒色 (N2/0)	内) ミガキ 外) ナデ
92	4区	SD420	瓦器	椀	—	(2.4)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
93	4区	SD420	瓦器	椀	—	(1.4)	(5.2)	4/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ
94	4区	SD420	須恵器	杯	(10.6)	3.3	—	1/12	内・外) 灰色 (N6/0)	内) ロクロ ナデ、底 外) ケズリ
95	4区	SD420	青磁	椀	—	(3.5)	(5.8)	3/12	緑) 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 胎) 灰白色 (N8/0)	—
96	4区	SD420	瓦質土器	鍋	—	(3.3)	—	1/12 未満	内) 灰白色 (10YR8/1) 外) 灰色 (N6/0)	内・外) ナデ
97	4区	SD420	信楽焼	摺鉢	—	(4.3)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
98	1区	SP001	土師器	皿	(15.0)	(2.9)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
99	1区	SP001	土師器	皿	(9.2)	1.1	—	1/12	内) にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
100	1区	SP001	須恵器	杯?	(10.8)	—	—	1/12	内・外) 灰色 (N6/0)	内) ロクロ ナデ、外) ロクロナデ・ ヘラキリ
101	1区	SP001	白磁	椀	(14.0)	(1.9)	—	1/12	内・外) 灰白色 (5Y8/1)	—
102	1区	SP002	土師器	皿	(9.8)	(1.5)	—	1/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
103	1区	SP002	土師器	皿	(9.6)	1.6	—	2/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
104	1区	SP002	土師器	皿	—	(2.1)	—	1/12 未満	内) にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
105	1区	SP008	土師器	皿	(16.4)	(2.1)	—	2.5/12	内・外) にぶい橙色 (5YR7/4)	内) ナデ 外) ナデ・ オサエ
106	1区	SP008	土師器	皿	15.6	2.9	—	6/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/6)	内) ナデ 外) ナデ・ オサエ
107	1区	SP008	土師器	皿	(9.8)	(1.5)	—	2.5/12	内・外) 灰褐色 (7.5YR6/2)	内・外) ナデ
108	1区	SP008	土師器	皿	(9.0)	1.2	—	3.5/12	内・外) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内・外) ナデ
109	1区	SP008	土師器	皿	(10.0)	(1.2)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
110	1区	SP008	土師器	皿	(9.8)	(1.6)	—	3.5/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
111	1区	SP008	瓦器	椀	—	(2.0)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内) ミガキ 外) ナデ
112	1区	SP008	瓦器	椀	—	(2.3)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ミガキ
113	1区	SP010	土師器	皿	(13.0)	(1.1)	—	1/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
114	1区	SP010	土師器	皿	(11.0)	(1.4)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
115	1区	SP013	土師器	皿	—	(1.8)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
116	1区	SP013	白磁	皿	—	(2.2)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (2.5Y8/1)	内・外) ナデ
117	1区	SP014	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
118	1区	SP014	白磁	皿	(12.3)	(2.0)	—	1/12	内・外) 灰白色 (10YR8/1)	—
119	1区	SP035	常滑焼	甕	—	(2.3)	—	1/12 未満	内・外) 赤褐色 (10YR4/3)	—
120	1区	SP049	土師器	皿	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) 淡橙色 (5YR8/3)	内・外) ナデ
121	1区	SP049	黒色土器	椀	—	(1.1)	—	1/12 未満	内) 黒褐色 (10YR3/1) 外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
122	1区	SP051	土師器	皿	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
123	1区	SP056	須恵器	鉢	—	(2.9)	—	1/12 未満	内・外) 青灰色 (5PB6/1)	内・外) ロ クロナデ
124	1区	SP073	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
125	1区	SP073	瓦器	椀	—	(1.2)	(4.8)	4/12	内・外) 灰色 (N5/0)	内) ミガキ 外) ナデ
126	1区	SP076	土師器	皿	—	(1.7)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
127	1区	SP076	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
128	1区	SP097	土師器	皿	(13.0)	(1.7)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
129	1区	SP097	土師器	皿	—	(2.0)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
130	1区	SP097	土師器	皿	(11.5)	(1.7)	—	1/12	内・外) 橙色 (5YR7/6)	内・外) ナデ
131	1区	SP097	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
132	1区	SP097	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
133	1区	SP097	土師器	皿	—	(1.5)	—	1/12 未満	内・外) 橙色 (5YR7/8)	内・外) ナデ
134	1区	SP097	土製品	土錐	長さ 3.9	幅 1.3	厚さ 1.2	—	内・外) 灰白色 (7.5YR8/2)	内・外) ナデ
135	1区	SP098	土師器	皿	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
136	1区	SP098	土師器	皿	(10.0)	(1.4)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
137	1区	SP098	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
138	1区	SP098	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
139	1区	SP100	土師器	皿	(14.0)	(1.5)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
140	1区	SP100	土師器	皿	(9.8)	(1.3)	—	1/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
141	1区	SP100	土師器	皿	(12.0)	(1.6)	—	1/12	内・外) にぶい黄橙 色 (10YR7/3)	内・外) ナデ
142	1区	SP100	土師器	皿	—	(1.3)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
143	1区	SP100	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
144	1区	SP100	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
145	1区	SP100	土師器	皿	—	(0.7)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
146	1区	SP100	黒色土器	椀	—	(2.4)	—	1/12 未満	内・外) 黒色 (N1.5/0)	内・外) ミ ガキ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
147	1区	SP101	土師器	皿	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
148	1区	SP101	土師器	皿	—	(1.4)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
149	1区	SP101	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
150	1区	SP101	瓦器	椀	—	(1.9)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ミ ガキ
151	1区	SP102	土師器	皿	(14.8)	(2.7)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
152	1区	SP102	土師器	皿	(15.4)	(3.1)	—	1.5/12	内・外) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内・外) ナデ
153	1区	SP102	土師器	皿	(15.8)	(2.7)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
154	1区	SP102	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (5YR7/3)	内・外) ナデ
155	1区	SP102	土師器	椀	—	(1.4)	(5.6)	3/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
156	1区	SP103	黒色土器	椀	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
157	1区	SP103	黒色土器	椀	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 黒色 (N2/0)	内・外) ナデ
158	1区	SP103	土師器	甕	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) 灰褐色 (7.5YR5/2)	内・外) ナデ
159	1区	SP104	土師器	皿	—	(1.8)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
160	1区	SP106	土師器	皿	(13.5)	(1.9)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
161	1区	SP106	瓦器	皿	—	(1.5)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内) ミガキ 外) ナデ
162	1区	SP106	土師器	皿	(10.8)	(1.2)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
163	1区	SP109	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) にぶい黄橙 色 (10YR7/3)	内・外) ナデ
164	1区	SP110	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
165	1区	SP110	瓦器	椀	—	(3.6)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ミ ガキ
166	1区	SP110	瓦器	椀	—	(3.5)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ミ ガキ
167	1区	SP114	土師器	皿	(14.0)	(2.5)	—	1.5/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
168	1区	SP114	土師器	皿	(10.0)	(1.0)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
169	1区	SP114	土師器	皿	(9.8)	(1.1)	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ
170	1区	SP114	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内) 橙色 (7.5YR7/5) 外) 橙色 (2.5Y6/6)	内・外) ナデ
171	1区	SP114	土師器	台付 皿	—	(2.7)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (5YR7/4)	内・外) ナデ
172	1区	SP114	瓦器	椀	—	(2.7)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N5/0)	内・外) ミ ガキ
173	1区	SP115	土師器	皿	(14.8)	(2.1)	—	1/12	内・外) にぶい黄橙 色 (10YR7/2)	内・外) ナデ
174	1区	SP115	土師器	皿	(10.2)	(1.3)	—	3/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
175	1区	SP115	土師器	皿	(10.5)	(1.4)	—	3/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
176	1区	SP115	土師器	皿	(9.4)	(1.6)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
177	1区	SP115	黒色土器	椀	—	(1.4)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ミ ガキ
178	1区	SP115	黒色土器	椀	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 黒色 (N2/0)	内・外) ミ ガキ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
179	1区	SP115	黒色土器	椀	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ナデ
180	1区	SP116	黒色土器	椀	(15.0)	(4.4)	—	3/12	内・外) 黒色 (N2/0)	内) ミガキ 外) ナデ
181	1区	SP116	瓦器	椀	(15.0)	(3.8)	—	1/12	内・外) 黒色 (N2/0)	内) 摩滅 外) ミガキ・ オサエ
182	2区	SP201	土師器	皿	(15.2)	3.0	—	3/12	内・外) にぶい黄橙 色 (10YR7/3)	内) ナデ・ オサエ 外) ナデ・ 不調整
183	2区	SP201	土師器	皿	10.0	1.8	—	9/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ナデ 外) ナデ・ オサエ
184	2区	SP209	土師器	皿	—	(0.9)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
185	2区	SP209	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (10YR7/3)	内・外) ナデ
186	2区	SP214	土師器	皿	(12.6)	1	8		内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ナデ 外) ナデ・ 不調整
187	2区	SP214	土師器	皿	—	(2.8)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
188	2区	SP214	土師器	皿	(9.2)	(0.7)	—	2/12	内・外) 橙色 (2.5YR7/6)	内・外) ナデ
189	2区	SP214	土師器	甕	—	(5.3)	—	1/12 未満		内) ナデ・ ケズリ 外) ナデ
190	2区	SP214	須恵器	甕	(17.2)	(4.0)	—	1/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ロ クロナデ
191	2区	SP214	須恵器	甕	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ロ クロナデ
192	2区	SP217	須恵器	圈足 円面 硯	(13.9)	(2.4)	—	2/12	内・外) 灰白色 (5Y7/1)	内・外) ロ クロナデ
193	2区	SP219	土師器	皿	(15.8)	2.8	—	1/12	内・外) 明黄褐色 (10YR6/6)	内) ナデ・ オサエ 外) ナデ・ 不調整
194	2区	SP219	土師器	皿	(13.6)	(2.3)	—	1/12 強	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ナデ 外) ナデ・ 不調整
195	2区	SP219	土師器	皿	(13.6)	2.5	—	1/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内) ナデ・ オサエ 外) ナデ・ 不調整
196	2区	SP219	土師器	皿	(12.6)	(2.5)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
197	2区	SP219	土師器	皿	—	(1.9)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
198	2区	SP219	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
199	2区	SP219	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
200	2区	SP219	土師器	皿	—	(1.0)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
201	2区	SP219	土師器	皿	—	(0.8)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
202	2区	SP219	土師器	皿	—	(0.85)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
203	2区	SP219	須恵器	杯 G 蓋	(9.6)	(1.35)	—	1/12 強	内・外) 灰白色 (N7/0)	内・外) ロ クロナデ
204	2区	SP219	須恵器	甕	(17.2)	(5.9)	—	4/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ロ クロナデ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
205	2区	SP219	黒色土器	椀	(15.8)	(3.9)	—	1/12 強	内・外) 暗灰色 (N8/0)	内) ミガキ 外) ナデ・オサエ
206	2区	SP219	瓦器	椀	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
207	2区	SP219	青磁	皿	9.5	2.2	3.8	10/12	釉) 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 胎) 灰白色 (7.5Y8/1)	—
208	2区	SP220	土師器	皿	(14.8)	(2.6)	—	1.5/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
209	2区	SP220	土師器	皿	(16.8)	(3.0)	—	2/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ナデ 外) ナデ・不調整
210	2区	SP220	土師器	皿	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
211	2区	SP221	土師器	皿	(9.8)	(1.2)	—	3/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
212	2区	SP221	土師器	皿	(11.0)	(2.2)	—	2/12	内) にぶい橙色 (5YR6/4) 外) 褐灰色 (7.5YR5/1)	内・外) ナデ
213	2区	SP221	須恵器	高杯	(13.2)	(4.3)	—	5/12	内・外) 褐灰色 (10YR6/1)	内・外) ロクロナデ
214	2区	SP221	瓦器	椀	(13.7)	(3.1)	—	1/12	内・外) 灰色 (N6/1)	内・外) ミガキ
215	2区	SP221	黒色土器	椀	—	(1.6)	(7.9)	2/12	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ナデ
216	2区	SP221	白磁	椀	(15.8)	(2.6)	—	1/12	内・外) 灰白色 (5Y8/1)	—
217	2区	SP222	土師器	甕B	—	(6.3)	—	—	内・外) にぶい黄橙色 (10YR6/3)	内・外) ハケメ・ナデ
218	3区	SD303 I区	土師器	皿	(12.0)	1.4	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
219	3区	SD303 I区	土師器	皿	(11.8)	(2.1)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
220	3区	SD303 III区	土師器	皿	(10.0)	(1.9)	—	2/12	内・外) にぶい橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
221	3区	SD303 III区	土師器	皿	(9.0)	(1.4)	—	2/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
222	3区	SD303 I区	土師器	皿	—	(1.4)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
223	3区	SD303 II区	土師器	皿	—	(1.3)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
224	3区	SD303 II区	土師器	皿	—	(1.4)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
225	3区	SD303 II区	土師器	皿	(6.8)	1.5	—	1/12	内・外) 灰白色 (10YR8/2)	内・外) ナデ
226	3区	SD303 I区	土師器	皿	—	0.8	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内・外) ナデ
227	3区	SD303 IV区	土師器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
228	3区	SD303 I区	土師皿	皿	—	0.8	—	1.5/12	内・外) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内・外) ナデ
229	3区	SD303 II区	土師器	羽釜	—	(2.2)	—	1/12 未満	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
230	3区	SD303 II区	須恵器	杯蓋	—	(1.1)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N5/0)	内・外) ロクロナデ
231	3区	SD303 II区	須恵器	鉢	—	(3.0)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ナデ
232	3区	SD303 II区	瓦器	椀	—	(2.1)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ミガキ
233	3区	SD303 III区	瓦器	椀	—	(3.3)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ミガキ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	残存率	色調	調整
234	3区	SD303 IV区	瓦器	椀	—	(2.4)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N3/0)	内) ミガキ 外) ナデ
235	3区	SD303 I区	瓦器	椀	—	(1.1)	(5.0)	底) 3/12	内・外) 灰色 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ
236	3区	SD303 II区	瓦器	椀	—	(1.6)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内) ミガキ 外) ナデ
237	3区	SD303 IV区	山茶椀	椀	—	(1.3)	4.6	底) 11/12	内・外) 灰白色 (2.5Y8/1)	内・外) ナデ
238	3区	SD303 II区	瓦器	皿	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 灰色 (N4/0)	内・外) ナデ
239	3区	SD303 I区	緑釉陶器	椀	—	(1.9)	(7.8)	1/12 未満	釉) 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 胎) にぶい褐色 (7.5Y6/3)	—
240	3区	SD303 II区	白磁	椀	(15.0)	(2.5)	—	1/12	内・外) 灰白色 (7.5Y8/1)	—
241	3区	SD303 IV区	白磁	皿	(9.4)	(2.4)	—	1.5/12	釉) 灰白色 (5Y8/1) 胎) 灰白色 (10YR8/2)	—
242	3区	SD303 I区	瓦質土器	火鉢	—	(6.8)	—	1/12 未満	内・外) 灰白色 (N7/0)	内・外) ナデ
243	3区	SP305	土師器	皿	—	(1.65)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内・外) ナデ
244	3区	SP305	土師器	皿	—	(1.65)	—	1/12 未満	内・外) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内・外) ナデ
245	3区	SP305	須恵器	杯	(14.0)	4.0	(7.4)	1/12	内) 灰色 (N6/0) 外) 暗灰色 (N3/0)	内・外) ロ クロナデ
246	3区	SX309	土師器	羽釜	—	(6.1)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
247	4区	SK407	磁器	椀	—	(2.1)	3.0	底) 12/12	釉・胎) 灰白色 (7.5Y7/1)	—
248	4区	SK410	土師器	皿	(13.8)	(2.0)	—	1/12	内・外) 浅黄橙色 (10YR8/3)	内・外) ナデ
249	4区	SK413	磁器	椀	—	(1.8)	(6.0)	底) 3/12	釉) 灰白色 (2.5Y8/1) 胎) 灰白色 (2.5Y8/2)	—
250	4区	SX405	須恵器	杯H蓋	(10.8)	(2.9)	—	2/12	内・外) 灰色 (N6/0)	頂外) ヘラ キリ後ナデ
251	4区	SX405	須恵器	壺K	—	(3.2)	(6.0)	1.5/12	内・外) 灰色 (N6/0)	内・外) ロ クロナデ
252	4区	SX405	常滑焼	甕	—	(8.4)	—	1/12 未満	内・外) 明赤褐色 (5YR3/2)	内・外) ナデ
253	1区	包含層	須恵器	杯H蓋	(10.6)	3.3	—	3/12	内・外) 灰白色 (2.5Y8/1)	頂部外面) ヘラキリ後 ナデ
254	1区	包含層	須恵器	杯B蓋	—	(1.2)	—	1/12 未満	内・外) 暗灰色 (N4/0)	内・外) ロ クロナデ
255	3区	攪乱	瓦	軒平	長さ (8.7)	幅 (12.6)	—	—	暗灰色 (N3/0)	凹) 布目 凸) ナデ
256	1区	攪乱	土錘	—	長さ (2.6)	幅 1.25	厚さ 1.25	—	内・外) 橙色 (2.5YR6/6)	ナデ
257	4区	鉄筋コンクリ構造物	耐火煉瓦	—	—	長さ 23.0	幅 11.2	厚さ 6.2	灰白色 (10YR8/1)	—
258	4区	攪乱	煉瓦	—	—	長さ 23.2	幅 11.2	厚さ 6.4	灰白色 (10YR8/2)	—
259	4区	攪乱	煉瓦	—	—	長さ (11.3)	幅 11.6	厚さ 6.2	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	—

付表2 5区出土土器観察表

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整
260	5区	SE501	土師器	皿	(15.6)	(2.9)	-	1/6	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
261	5区	SE501	土師器	皿	(16.5)	(2.7)	-	1/6	橙色 (5YR7/6)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
262	5区	SE501	土師器	皿	(16.0)	(2.6)	-	1/6	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
263	5区	SE501	土師器	皿	(14.8)	3.1	-	1/3	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
264	5区	SE501	土師器	皿	15.9	2.9	-	ほぼ完 形	浅黄橙色 (10YR8/3)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
265	5区	SE501	土師器	皿	(8.6)	(1.5)	-	1/6	橙色 (7.5YR7/6)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
266	5区	SE501	土師器	皿	(9.7)	1.4	-	1/6	橙色 (7.5YR7/6)	内) ヨコナデ、粗 いハケ、 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
267	5区	SE501	土師器	皿	(10.2)	1.4	-	5/12	にぶい橙色 (5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
268	5区	SE501	土師器	皿	(10.6)	(1.4)	-	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
269	5区	SE501	土師器	皿	10.2	1.6	-	ほぼ完 形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
270	5区	SE501	土師器	皿	(9.8)	(1.6)	-	1/4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
271	5区	SE501	土師器	皿	(10.0)	(1.6)	-	1/4	浅黄橙色 (10YR8/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
272	5区	SE501	土師器	皿	(10.0)	(2.0)	-	1/6	にぶい橙色 (5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
273	5区	SE501	土師器	皿	(10.2)	(1.5)	-	1/6	浅黄橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
274	5区	SE501	土師器	皿	(10.8)	(2.2)	-	1/3	橙色 (5YR7/6)	ヨコナデ、ナデ
275	5区	SE501	土師器	皿	14.4 ~ 15.3	3.2	-	完形	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
276	5区	SE501	土師器	皿	(15.6)	(2.7)	-	1/4	橙色 (5YR7/6)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
277	5区	SE501	土師器	皿	(15.0)	(3.2)	-	1/6	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
278	5区	SE501	土師器	皿	15.3	(3.0)	-	1/2	橙色 (5YR7/6)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
279	5区	SE501	土師器	皿	14.9	3.1	-	ほぼ完 形	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
280	5区	SE501	土師器	皿	15.2	3.3	-	完形	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、ユビオ サエ
281	5区	SE501	土師器	皿	15.4	(2.0)	-	1/2	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整
282	5区	SE501	土師器	皿	(9.9)	(1.9)	—	1/4	橙色 (5YR7/6)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
283	5区	SE501	土師器	皿	(10.0)	1.8	—	1/4	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
284	5区	SE501	土師器	皿	10.4	2.2	—	3/4	橙色 (5YR6/6)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
285	5区	SE501	土師器	皿	10.2	1.8	—	3/4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、ナデ
286	5区	SE501	土師器	皿	10.2	1.8	—	ほぼ完 形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
287	5区	SE501	土師器	皿	9.8	1.8	—	完形	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、ナデ
288	5区	SE501	土師器	皿	(10.2)	(2.1)	—	1/4	にぶい橙色 (5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
289	5区	SE501	土師器	皿	(9.4)	(1.6)	—	1/4	内) 赤橙色 (10YR6/8) 外) 橙色 (5YR6/6)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
290	5区	SE501	土師器	皿	(9.8)	1.6	—	1/6	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
291	5区	SE501	土師器	皿	10.4	(1.8)	—	ほぼ完 形	にぶい橙色 (5YR7/6)	ヨコナデ、ナデ
292	5区	SE501	土師器	皿	(9.4)	(1.6)	—	1/3	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
293	5区	SE501	土師器	皿	9.8	1.7	—	完形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
294	5区	SE501	土師器	皿	(9.8)	(1.6)	—	5/12	にぶい橙色 (5YR7/4)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
295	5区	SE501	土師器	皿	9.9	1.5	—	5/6	浅黄橙色 (10YR8/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
296	5区	SE501	土師器	皿	10.0	(1.3)	—	1/2	浅黄橙色 (10YR8/3)	ヨコナデ、ナデ
297	5区	SE501	土師器	皿	14.4	3.4	—	3/4	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
298	5区	SE501	土師器	皿	15.1	(2.5)	—	1/2	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
299	5区	SE501	土師器	皿	(13.6)	(2.6)	—	1/3	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
300	5区	SE501	土師器	皿	(15.0)	(2.5)	—	1/12 以 下	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
301	5区	SE501	土師器	皿	(13.8)	(2.2)	—	1/4	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ビオサエ
302	5区	SE501	土師器	皿	(10.0)	(1.4)	—	1/4	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
303	5区	SE501	土師器	皿	10.5	(1.4)	—	1/2	褐灰色 (7.5YR 4/ 1)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユビオサエ
304	5区	SE501	土師器	皿	(9.4)	(0.8)	—	1/12	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、ナデ
305	5区	SE501	土師器	皿	(9.0)	(0.8)	—	1/12	灰白色 (10YR8/2)	ヨコナデ、ナデ
306	5区	SE501	土師器	皿	(8.5)	1.0	—	1/12 以下	にぶい橙色 (5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整
307	5区	SE501	土師器	皿	14.3	(2.5)	—	5/12	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ピオサエ
308	5区	SE501	土師器	皿	10.0	1.7	—	1/2	にぶい橙色 (5YR7/6)	ヨコナデ、ナデ
309	5区	SE501	土師器	皿	(9.6)		—	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内) ヨコナデ、ナ デ、外) ヨコナデ、 ユピオサエ
310	5区	SE501	土師器	台付 皿	—	(3.2)	(8.2)	1/12	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ナデ
311	5区	SE501	土師器	獣脚	—	[4.8]	—	—	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	面取り
312	5区	SE501	須恵器	鉢	—	(4.4)	—	—	灰白色 (N8/0)	回転ナデ
313	5区	SE501	須恵器	鉢	—	(2.5)	(9.2)	1/4	灰色 (N6/0)	体部：回転ナデ 底：糸切
314	5区	SE501	灰釉陶器	椀	—	(2.4)	(7.0)	1/12 以下	灰白色 (N8/0)	回転ナデ
315	5区	SE501	白磁	椀	—	(3.2)	—	1/12 以下	灰白色 (2.5Y8/1)	回転ナデ
316	5区	SE501	白磁	椀	—	(2.3)	5.5	1/2	灰白色 (5Y8/1)	回転ナデ
317	5区	SE501	土師器	甕	—	(4.5)	—	—	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内) ナデ、ヨコハ ケ、外) ヨコナデ、 ハケ
318	5区	SE501	土師器	羽釜	—	(5.4)	—	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	ヨコナデ
319	5区	SE501	瓦質土器	甕	(15.0)	(2.4)	—	1/12 以下	黒色 (N1.5/0)	ヨコナデ
320	5区	SE501	瓦質	羽釜	(23.4)	(3.9)	—	1/12	内) 浅黄橙色 (7.5YR8/3) 外) 灰白色 (10YR8/1)	内) ナデ、ユピオ サエ、外) ヨコナ デ、ナデ
321	5区	SE501	土師器	甕	(22.6)	(2.8)	—	1/12 以下	灰褐色 (7.5YR6/2)	ヨコナデ
322	5区	SE501	瓦器	椀	(13.6)	6.3	6.2	1/3	暗褐色 (N3/0)	内) 圏線ミガキ 外) ミガキ
323	5区	SE501	瓦器	椀	(15.4)	(3.8)	—	1/12 以下	灰色 (N4/4)	ミガキ
324	5区	SE501	瓦器	椀	(15.6)	(4.8)	—	1/12	灰白色 (10YR8/2)	内) 圏線ミガキ 外) ミガキ
325	5区	SE501	瓦	丸瓦	(12.3)	(10.1)	1.2 ~ 1.5	—	橙色 (5YR7/6)	凹面：布目 凸面：擦り消し？
326	5区	SE501	砥石	—	11.6	7.7	1.4	—	—	—
327	5区	SD502	土師器	皿	(7.8)	(1.4)	—	1/6	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ、ユ ピオサエ
328	5区	SD502	土師器	皿	(9.6)	(1.6)	—	1/6	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ
329	5区	SD502	瓦質土器	甕	(19.6)	(1.7)	—	1/12 以下	内) 暗灰色 (N3/0) 外) 黒色 (N5/0)	回転ナデ、ユピオ サエ
330	5区	SD502	瓦器	椀	(12.8)	(3.2)	—	1/12 以下	暗灰色 (N3/0)	内) ミガキ 外) ミガキ？、ユ ピオサエ
331	5区	SD502	瓦	平瓦	(9.6)	(9.3)	2.5	—	暗灰色 (N3/0)	凹面：コピキ 凸面：縄目
332	5区	SD502	瓦	丸瓦	(7.8)	(7.7)	2.4	—	灰色 (N6/0)	凹面：ナデ 凸面：縄目、コピ キ

番号	地区	遺構名	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整
333	5区	攪乱	土師器	杯	(14.8)	4.7	—	1/4	橙色 (2.5YR6/6)	内) 暗文 外) ケズリ、ヨコナデ
334	5区	攪乱	須恵器	片口鉢	(26.6)	(2.8)	—	1/12 以下	灰白色 (2.5Y8/1)	回転ナデ
335	5区 南区	攪乱	瓦器	椀	(13.7)	(3.7)	—	1/6	黄灰色 (2.5Y6/1)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、ユビオサエ
336	5区	攪乱	瓦器	椀	(12.9)	(3.8)	—	1/4	内) 暗灰色 (N3/0) 外) 灰色 (10N5/0)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、ユビオサエ
337	5区	攪乱	瓦器	椀	(13.3)	(1.9)	—	1/6	黒色 (N2/0)	内) ミガキ 外) ミガキ、ヨコナデ、ユビオサエ
338	5区	攪乱	灰釉陶器	椀	—	(2.7)	(6.3)	1/6	素地：灰白色 (2.5YR8/1) 釉：明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	回転ナデ
339	5区 南区	攪乱	瓦質土器	火鉢	—	(9.4)	—	—	暗灰色 (N3/0)	内) ナデ、ケズリ 外) ナデ
340	5区 南区	攪乱	青磁	椀	(14.8)	(3.8)	—	1/12	素地：灰白色 (10YR7/1) 釉：黄褐色 (2.5Y5/4)	回転ナデ
341	5区	攪乱	瓦器	椀	(13.9)	(3.8)	4.4	1/12 以下	内) 灰白色 (10YR5/1) 外) 灰白色 (2.5YR7/1)	内) ミガキ 外) ヨコナデ、ユビオサエ
342	5区	攪乱	滑石	石鍋 再加工品	9.9	4.9	1.4	—	—	—

圖 版

図版第1 樋ノ口窯跡群第2次

(1) 調査地上空から福知山盆地を望む(北西から)



(2) 1～3トレンチ調査前全景(北から)



(3) 4～6トレンチ調査前全景(南から)



図版第2 樋ノ口窯跡群第2次

小規模調査区



(1) 1 トレンチ全景(西から)



(2) 2 トレンチ全景(東から)



(3) 3 トレンチ全景(西から)

図版第3 樋ノ口窯跡群第2次

小規模調査区

(1) 4トレンチ全景(南西から)



(2) 5トレンチ全景(南東から)



(3) 6トレンチ全景(西から)



図版第 4 樋ノ口窯跡群第 2 次

A 地区



(1) A 地区調査前全景
(北西から)



(2) A 地区調査後全景
(北西から)



(3) A 地区調査後全景 2
(右が北西)



(1) A 地区北東壁(西から)



(2) A 地区北西壁(南から)



(3) A 地区断ち割り(東から)

図版第6 樋ノ口窯跡群第2次

A地区



(1) 焼土坑 S L 01 出土状況
(南東から)



(2) 焼土坑 S L 01 断面
(南東から)



(3) 焼土坑 S L 01 完掘
(南東から)

A地区



(1) 焼土坑 S L02 出土状況
(南東から)



(2) 焼土坑 S L02 出土状況
(南西から)



(3) 焼土坑 S L02 出土状況
(南東から)

図版第8 樋ノ口窯跡群第2次

B地区ほか



(1) B地区調査後全景
(北西から)



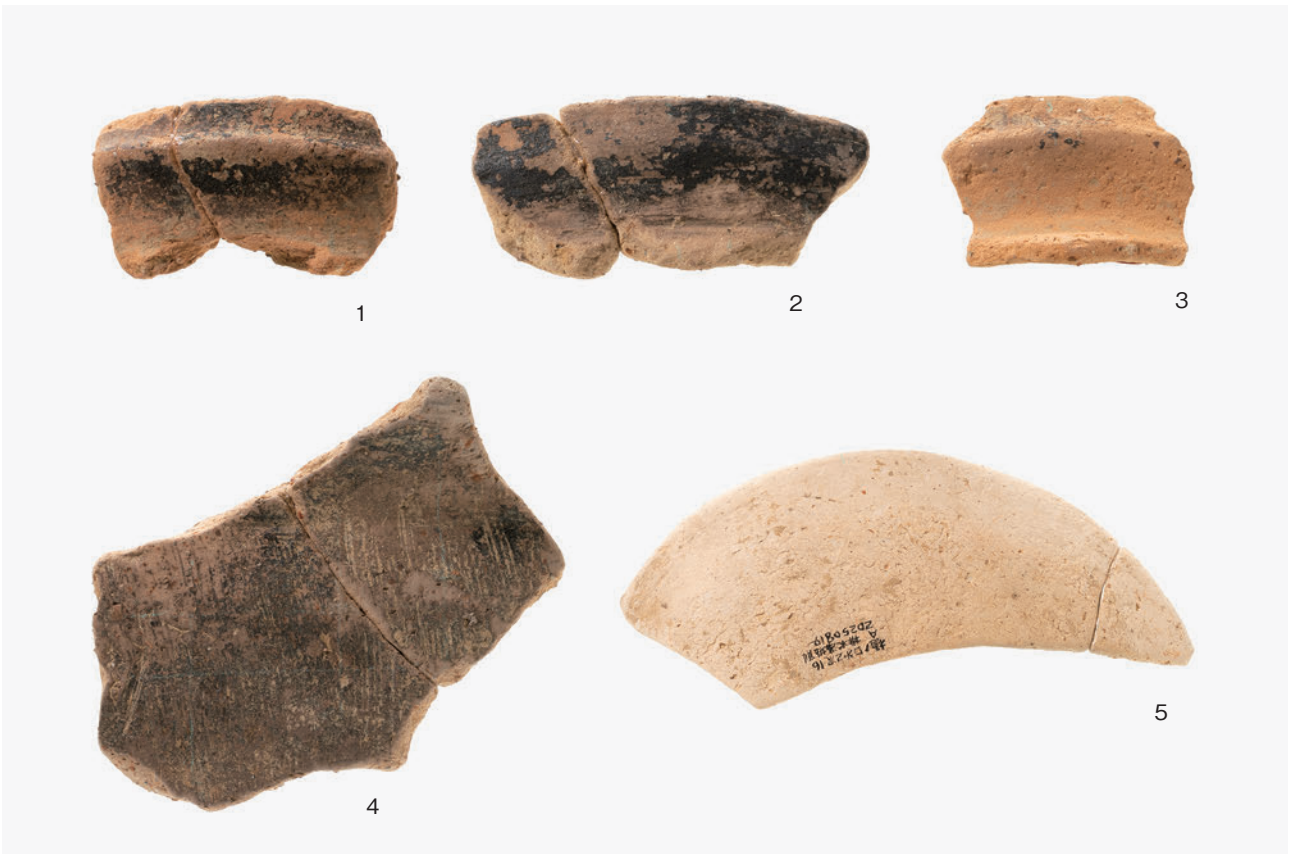
(2) B地区北東壁(南西から)



(3) 重機断ち割り地点断面
(南東から)



(1)出土遺物1 包含層出土土器1・銭貨



(2)出土遺物2 包含層出土土器2



(1) 出土遺物 3 包含層出土土器 3



(2) 出土遺物 4 包含層出土土器 4



(1) 出土遺物 5 包含層出土土器 5



(2) 出土遺物 6 包含層出土土器 6



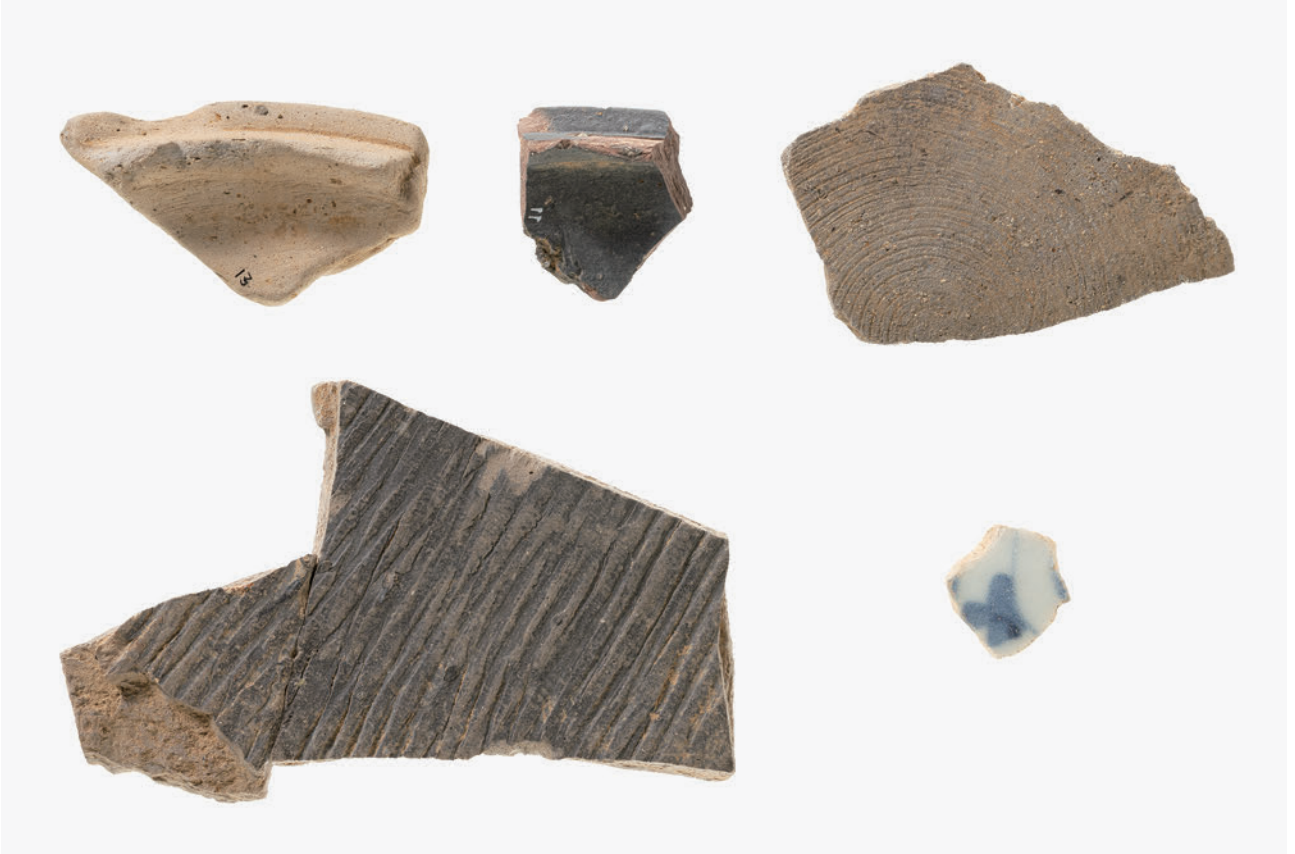
(1) 出土遺物 7 包含層出土土器 7



(2) 出土遺物 8 包含層出土陶磁器・土製品

図版第 13 樋ノ口窯跡群第 2 次

A・B地区



(1)出土遺物9 焼土坑S L01出土土器



(2)出土遺物10 B地区包含層出土土器

図版第1 宇治市街遺跡(川西地区)



1区柱穴群完掘状況(東から)

図版第2 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 1・2区調査前状況(南から)



(2) 1区南東部の柱穴群検出状況
(南東から)



(3) 1区区画溝S D150検出状況
(北西から)

図版第3 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 1区柱穴群完掘状況(南東から)



(2) 1区柱穴群完掘状況(北西から)

図版第4 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 1区掘立柱建物1(北西から)



(2) 1区掘立柱建物2(南西から)



(3) 1区掘立柱建物3・4
(北から)

図版第5 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) S P 099土層断面(東から)



(2) S P 070土層断面(北から)



(3) S P 072土層断面(北東から)



(4) S P 032土層断面(東から)



(5) S P 045土層断面(東から)



(6) S P 024・025土層断面(東から)



(7) S P 026土層断面(東から)



(8) S P 005土層断面(北東から)

図版第6 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 区画溝 S D 150 掘削状況(北東から)



(2) 区画溝 S D 150 掘削状況(南西から)

図版第7 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 東西部南壁土層断面
(北西から)



(2) 区画溝 S D 150土層断面
(北西から)



(3) 1区南西壁土層断面
(南西から)

図版第8 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 2区完掘状況(北東から)



(2) 東西部第2面全景(西から)

図版第9 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 3区完掘状況(南から)



(2) 3区完掘状況(西から)



(1) 3区東西溝 S D303東半部
(南から)



(2) 3区東西溝 S D303断ち割り
断面1 (西から)



(3) 3区東西溝 S D303土層断面2
(東から)



(1) 4区ピット完掘状況(東から)



(2) 4区区画溝S D420掘削状況(北西から)

図版第12 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 4区区画溝 S D420掘削状況
(西から)



(2) 4区区画溝 S D420土層断面
(北西から)



(3) 4区区画溝 S D420完掘状況
(北西から)



5区 調査区全景(上が北)



図版第14 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 5区 旧別館部分土層断面
(A-A') (北西から)



(2) 5区 旧別館部分土層断面
(B-B' 南側) (南西から)



(3) 5区 旧別館部分土層断面
(B-B' 中央) (南西から)



(1) 5区 旧別館部分土層断面
(B-B' 東側)(南西から)



(2) 5区 旧本館部分土層断面
(D-D' 東側)(南から)



(3) 5区 旧本館部分土層断面
(D-D' 中央)(南東から)



(1) 5区 断ち割り1 (E-E')
(南西から)



(2) 5区 断ち割り2 (F-F')
(南西から)



(3) 5区 旧本館部分土層断面
(D-D' 東側)(南東から)

図版第17 宇治市街遺跡(川西地区)



(1) 5区 旧別館部分 遠景
(北西から)



(2) 5区 旧本館部分 遠景
(北東から)



(3) 5区 旧本館部分 遠景
(南西から)



(1) 5区 井戸 S E01 半裁状況
(南西から)



(2) 5区 井戸 S E01 重機断ち
割り状況(南西から)



(3) 5区 溝 S D02 埋土堆積
状況(北東から)



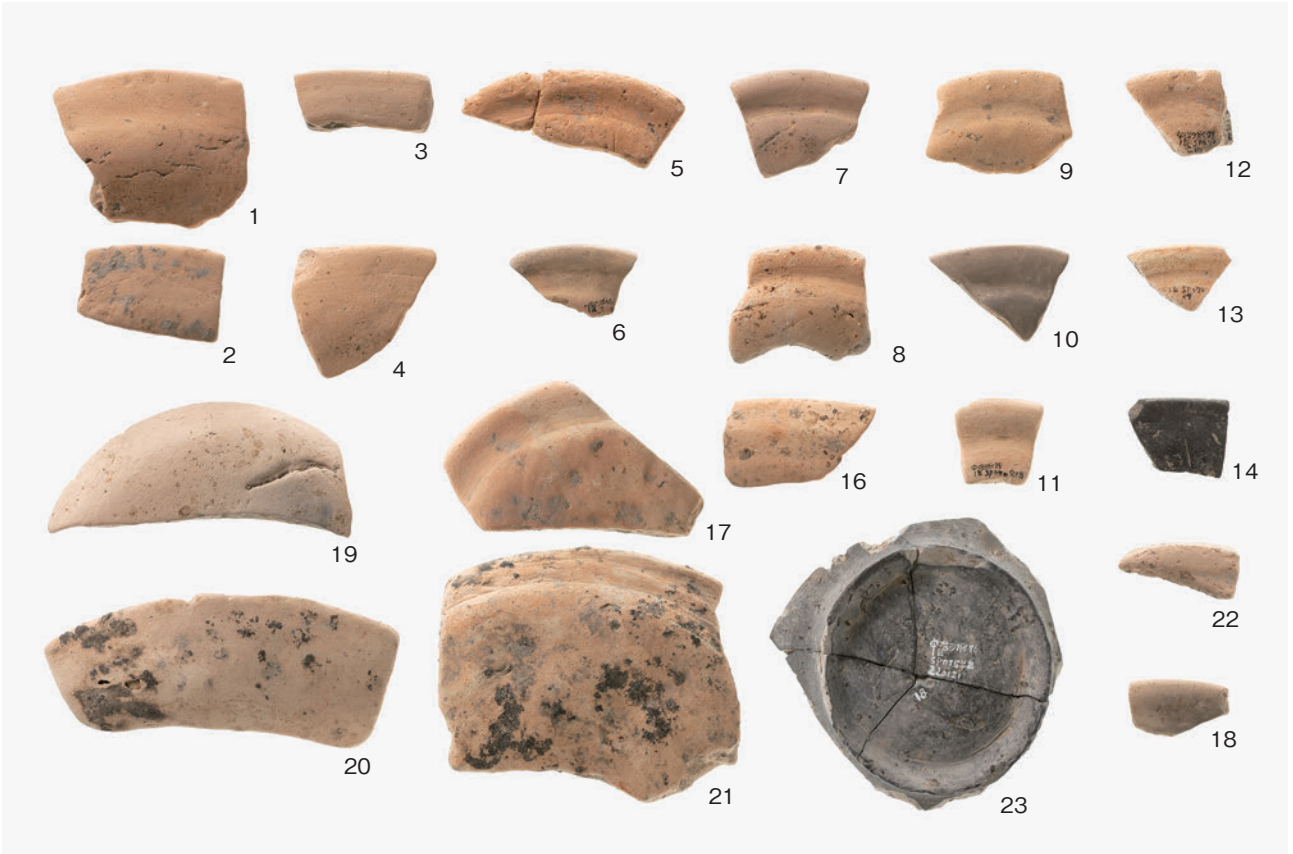
(1) 5区 重機による断ち割り1
(西から)



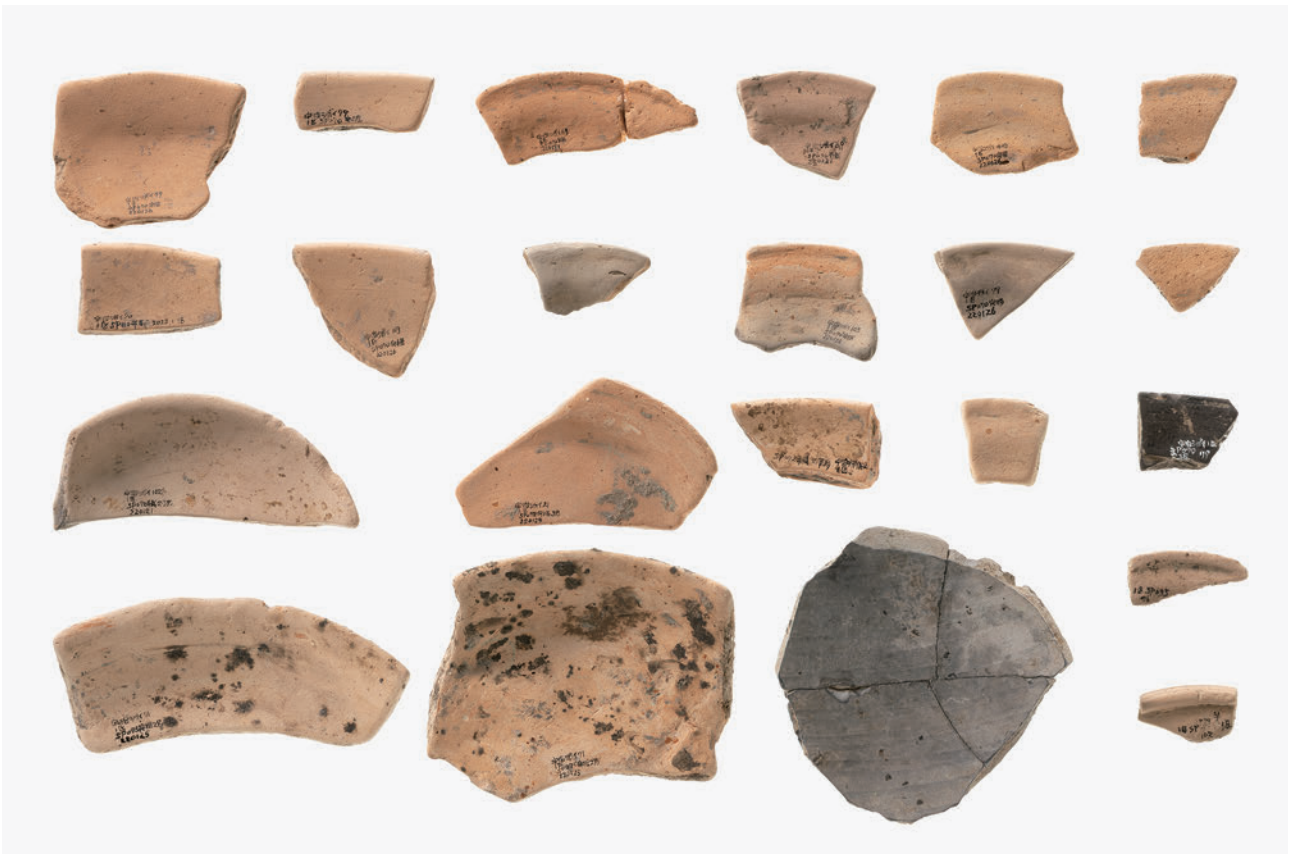
(2) 5区 断面観察(南西から)



(3) 5区 重機による断ち割り2
(北東から)

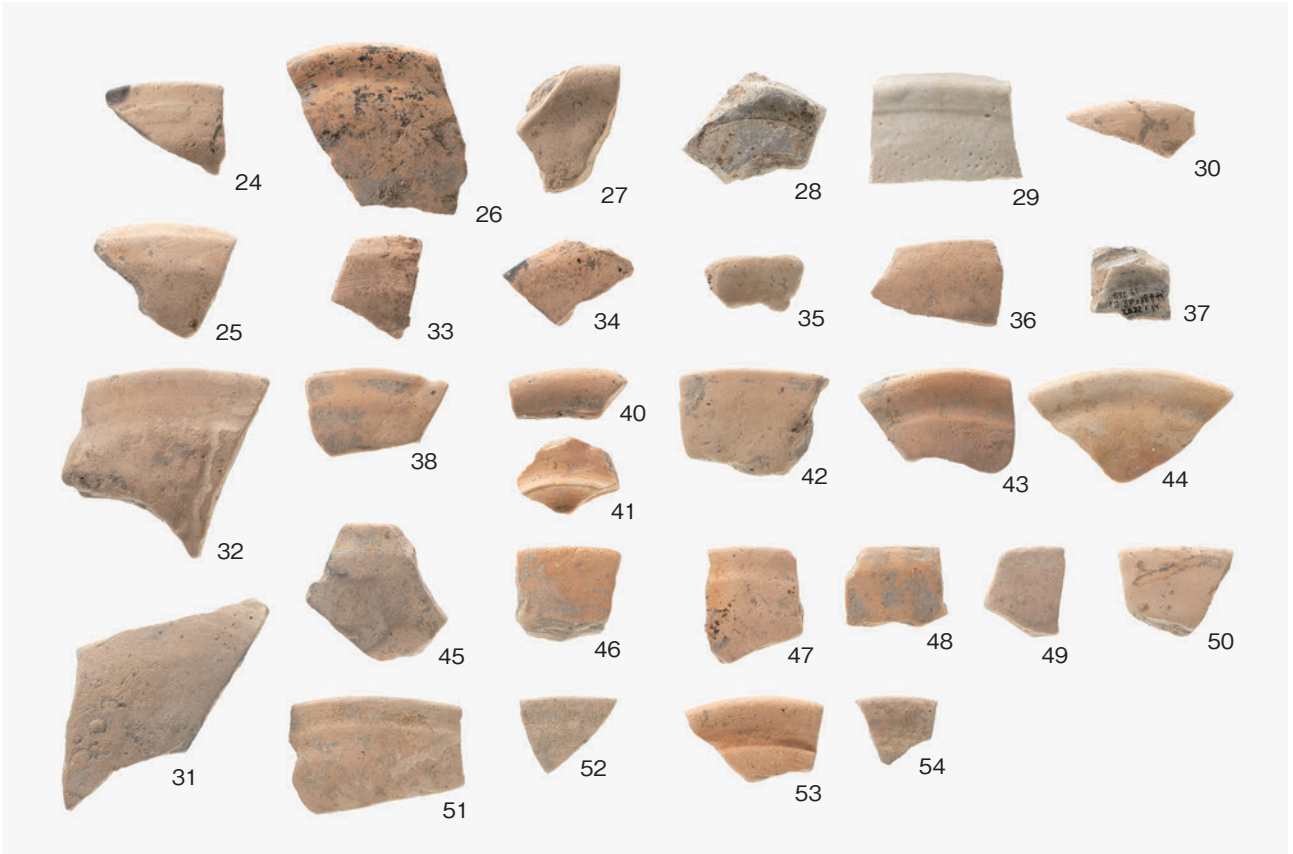


(1) 1～4区出土遺物 1



(2) 1～4区出土遺物 2

図版第21 宇治市街遺跡(川西地区)



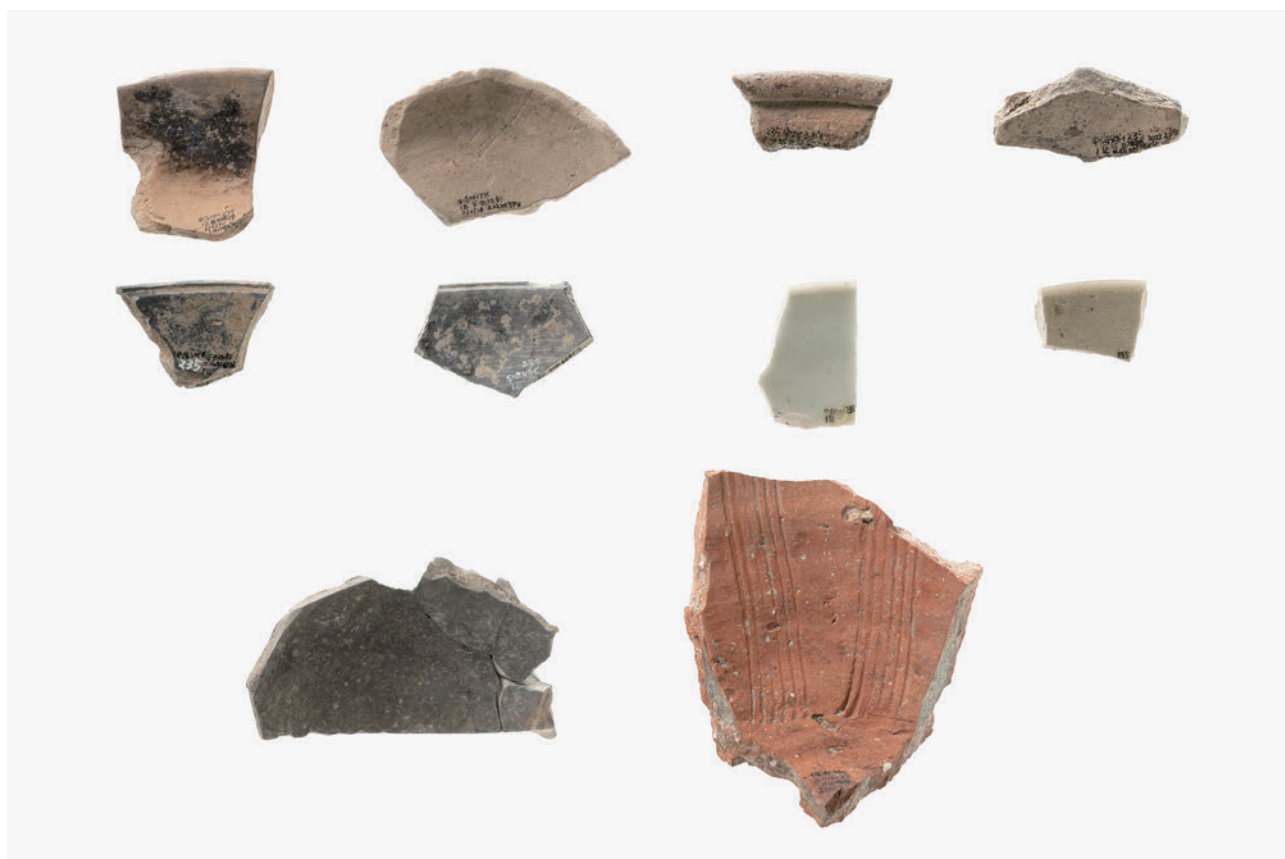
(1) 1～4区出土遺物 3



(2) 1～4区出土遺物 4



(1) 1～4区出土遺物 5



(2) 1～4区出土遺物 6



(1) 1～4区出土遺物 7



(2) 1～4区出土遺物 8



(1) 1～4区出土遺物9



(2) 1～4区出土遺物10



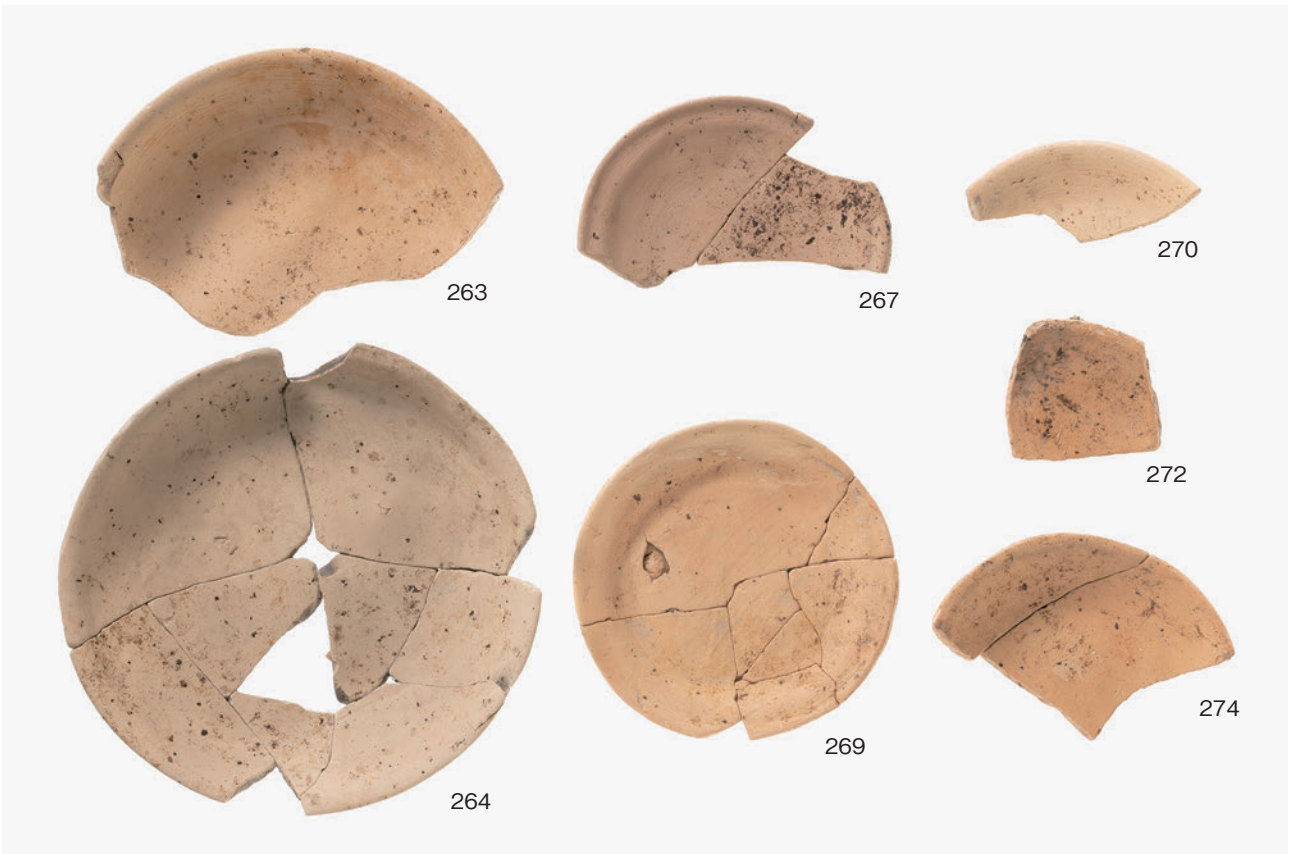
(1) 1～4区出土遺物11



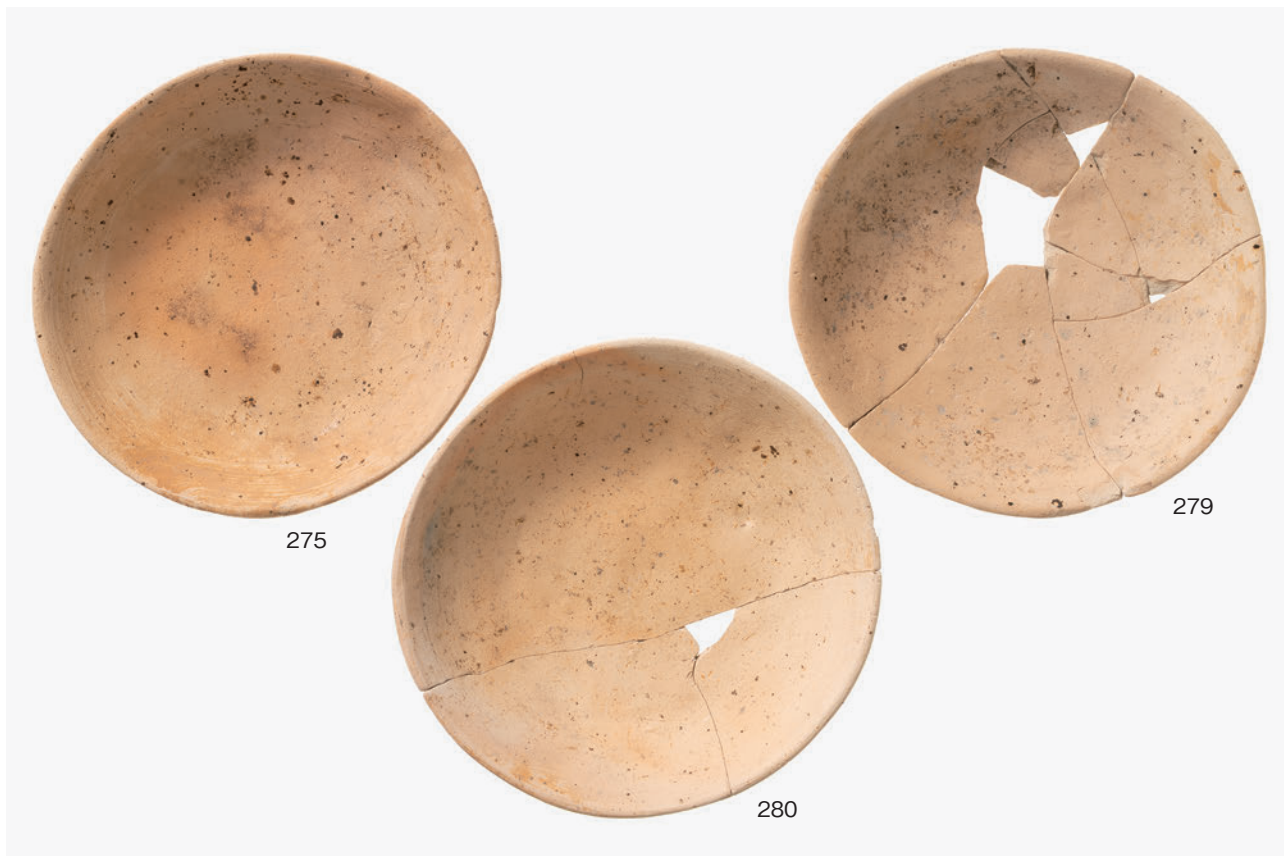
(2) 1～4区出土遺物12



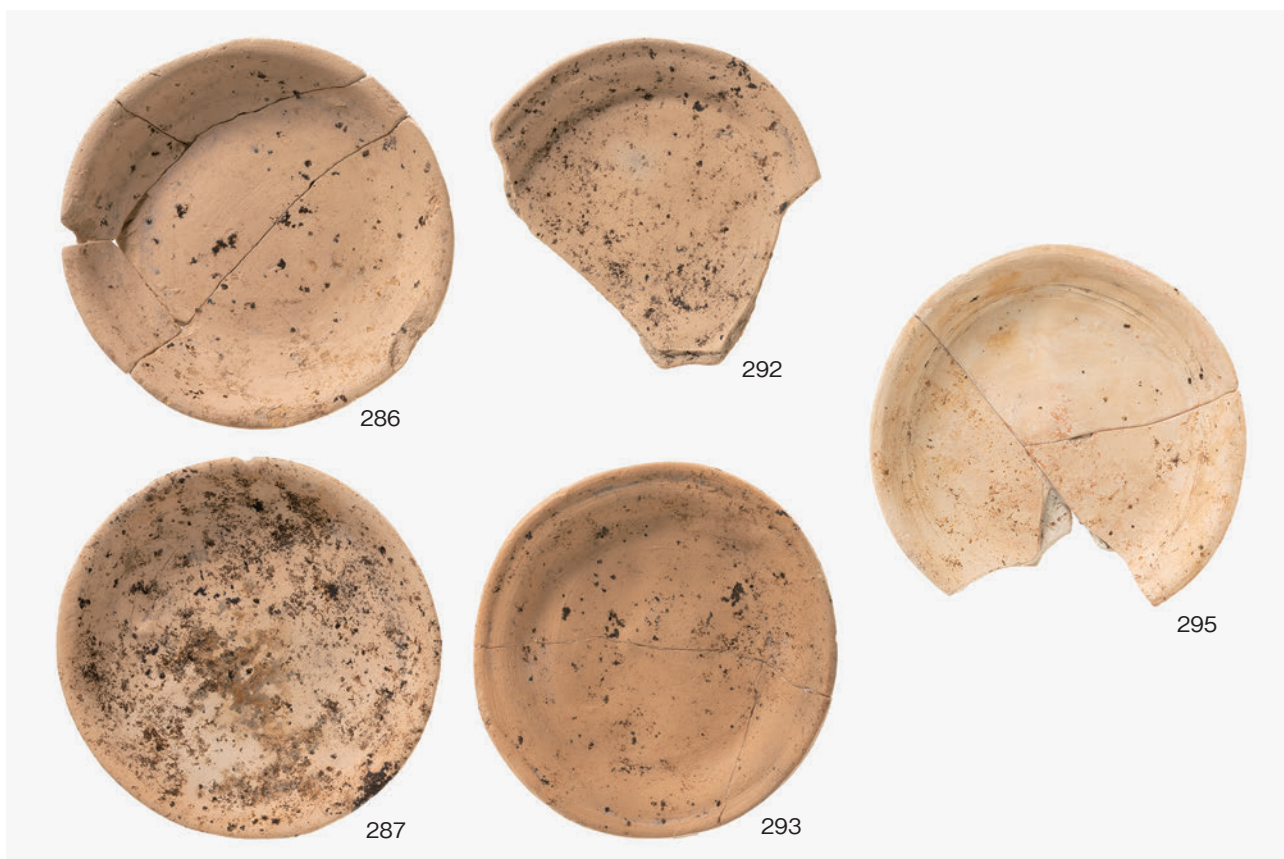
(1) 5区出土遺物 1



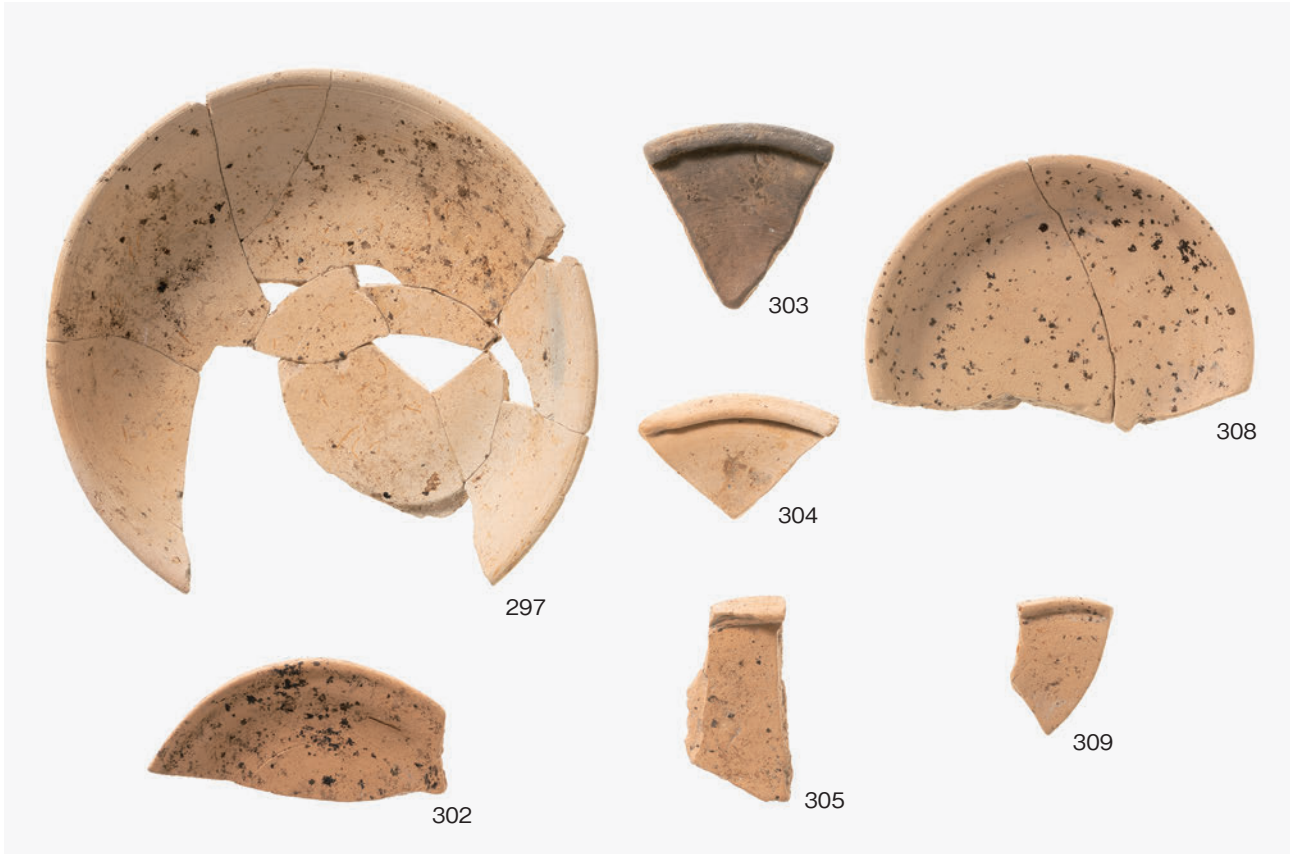
(2) 5区出土遺物 2



(1) 5区出土遺物 3



(2) 5区出土遺物 4



(1) 5区出土遺物 5



(2) 5区出土遺物 6

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第200冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第200冊
編著者名	名村威彦、加藤雅士、村田和弘、森島康雄
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel.075(933)3877
発行年月日	西暦2026年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
ひのくちかまあとぐん 樋ノ口窯跡群 第2次	ふくちやましき 福知山市牧	26201	604	35° 20' 22"	135° 05' 36"	20250724 ~ 20251015	320	砂防施設
うじしがいいせき 宇治市街遺跡 (川西地区)	宇治市宇治宇文字	26204	108	34° 53' 20"	135° 48' 00"	20211216 ~ 20220228	410	庁舎建設
						20220425 ~ 20220824	480	
						20250724 ~ 20251127	740	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樋ノ口窯跡群 第2次	窯跡	古墳時代 中世	包含層	須恵器、土師器、青磁、宋銭	
宇治市街遺跡 (川西地区)	集落	中世前期	区画溝 井戸 掘立柱建物	土師器、黒色土器	

所収遺跡名	要約
樋ノ口窯跡群 第2次	工事中に発見された古墳時代の須恵器窯について、灰原にあたる部分を調査したが、すでに窯跡関連遺構は失われていたが、古墳時代から平安時代の遺物包含層と中世の遺物包含層を確認した。
宇治市街遺跡 (川西地区)	中世前期のL字形に曲がる区画溝を確認した。方形居館の一画である可能性も考えられるが、区画内では同時期の遺構が確認できず、区画の外側で井戸を確認した。区画溝は短期間で埋まり、その後、小規模な掘立柱建物群が展開する。

京都府遺跡調査報告集 第 200 冊

令和 8 年 3 月 31 日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷

